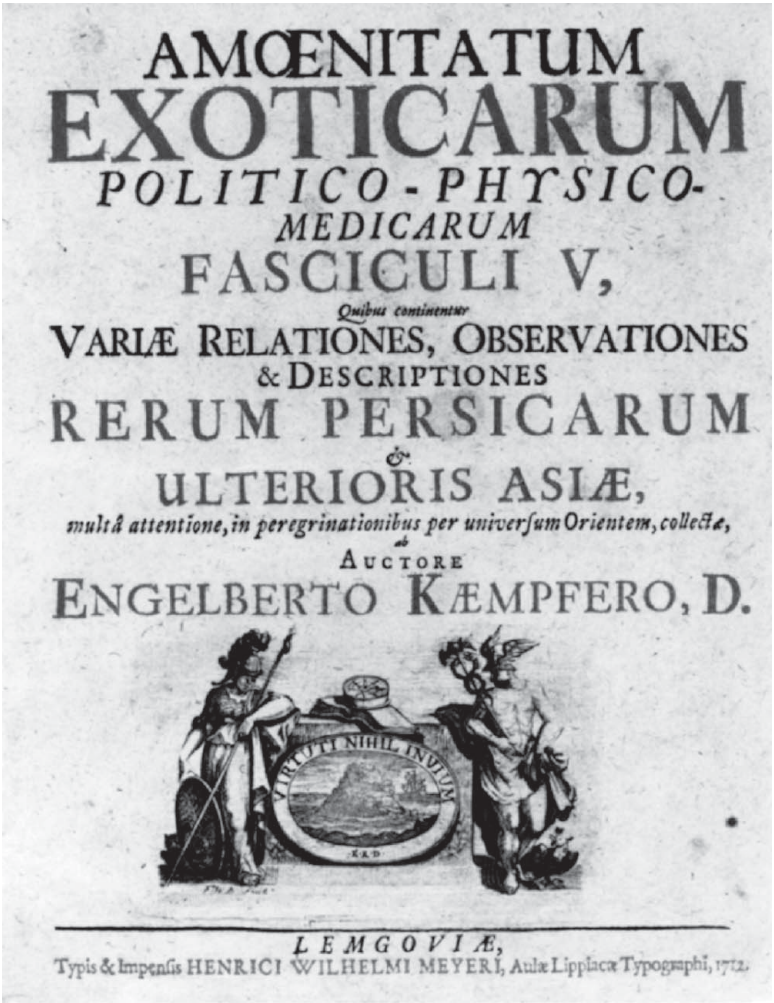
日文研

2012年9月　no.49

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

創立二十五周年記念特集号


AMŒNITATUM
EXOTICARUM
POLITICO-PHYSICO-
MEDICARUM
FASCICULI V,
Quibus continentur
VARIÆ RELATIONES, OBSERVATIONES
& DESCRIPTIONES
RERUM PERSICARUM
&
ULTERIORIS ASIÆ,
multâ attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectæ,
ab
AUCTORE
ENGELBERTO KÆMPFERO, D.

LEMGOVIÆ,
Typis & Impensis HENRICI WILHELMI MEYERI, Aulæ Lipplacæ Typographi, 1712.

ケンペル『廻国奇観』標題紙（レムゴ、1712 年刊）

ドイツのハンザ都市レムゴ生まれのケンペルは、スウェーデンの使節団員としてペルシア帝国に 2 年ほど滞在した。その後、東インド会社に外科医として就職し、しばらくインドネシアに滞在した後に、日本へと渡り、2 回江戸参府に同行した。帰国後、ケンペルはフリードリッヒ・アドルフ伯爵の侍医となっているが、アジア滞在中に取ったノートを本としてまとめる時間はあまりなかったようである。唯一、生前に出版された本が『廻国奇観』である。本書は、主にペルシアについての研究をまとめたものであるが、日本については、和紙の生産や茶、鍼灸および、凡そ 300 種類の植物についての図と記述があり、これら日本の植物の多くを初めてヨーロッパに紹介している。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）

日文研

創立二十五周年記念特集号

——エッセイ——

小松和彦　創立二五周年を迎えて　2

瀧井一博　二五年史座談会を企画して　4

——座談会の記録——

創設の経緯と理念、今後の展開　7

共同研究をめぐって—今日までそして明日から　59

国際交流の展望　114

文献、データベース、出版　162

共同研究　205

基礎領域研究　219

彙報　221

所員活動一覧　231

エッセイ

創立二五周年を迎えて

小松和彦

日文研は、今年の五月二一日に二五周年の折り目を迎え、初代所長の梅原猛顧問や杉本秀太郎先生ら草創期にかかわった先輩諸先生にも参加いただき、ささやかながらも記念の式典も開かせていただきました。

日文研では、これまで十周年、二〇周年の折り目に、それぞれ記念の国際研究集会を開催しており、その流れでいけば、三〇周年にあたる年に、また記念の行事を計画するのが適当なのかもしれません。しかし、今回、二五周年記念と銘打った会を設けることになったのは、猪木武徳前所長の下で取り組んできた『日文研二五年史――資料編――』が完成したことによります。つまり、この会は、じつはこの年史を披露するとともにこれを祝う会も兼ねていたわけです。

二五年史の編さんの必要性を提言したのは、白幡洋三郎教授と私でした。これまで日文研では、本格的な年史が作製されておりませんでした。これまでそれを作らなかった理由もそれなりにあったようですが、私たちはその時と今とでは日文研が置かれている状況が大きく変化し

つつあるという認識を抱いておりました。というのも、草創期からの教員が次々に退職し、日文研の歴史を知らない教員が大半を占めるようになってきていたからです。数年もすれば、草創期の日文研の歴史を体験した教員はほとんどいなくなるという状況が迫っているのです。

しかも、日文研の設立にあってはいろいろと外部から誤った批判がなされたという経緯もありました。したがって、日文研の内外に、たしかな資料に基づいて、その経緯を知る方々に確認をとりながら、日文研の可能な限り正確な歴史を記し示すことは、急務の課題となっていたのです。

もっとも、二五年にも及ぶ歴史を、限られた紙面で書き尽くすことは不可能です。できあがった『資料編』には、書き留めて置かねばと思いながらも断念した事項もあれば、さまざまな理由で描くことをあえて控えたこともあります。これらのことは、今年度中には二五年史の物語編として刊行を予定している『日文研物語』（仮題）で、一部は披露されるはずですが、そこからもこぼれ落ちたことについては、次世代にしっかり申し送りをして、いつかは書き記して欲しいと思います。

『資料編』の頁をぱらぱらと繰りながら感じるのは、この二五年の間に、自画自賛になりますが、日文研はじつに多様な活動をしてきたということの驚きです。国内外の学界のみならず、社会に対しても多大な文化的貢献をしてきております。このことは、たとえば四人もの文化功労者を輩出してきていることからもおわかりいただけるものと思います。そうしたこれまでの実績を前にして、私ども現在の所員はこれからもこの実績を汚すことがないよう、地道かつ大胆に活動を展開して行かなければならないとの決意を新たにいたします。

創立時における日本および国内外の日本研究の状況は大きく変わっています。日文研もそれ

に合わせて変わってきました。しかし、忘れてはならないことも多々あります。二五周年を記念して刊行されたこのたびの年史を参考にしながら、これからの日文研の役割をしっかりと再考し、さらなる飛躍に挑戦していきたいと考えております。

今後も心温かいご助言、ご支援を賜りたいと思います。

（国際日本文化研究センター所長）

二五年史座談会を企画して

瀧井一博

日文研は本年二〇一二年に創立二五周年を迎えたが、それを記念して資料編と物語編の二冊の年史を刊行することになった。その編纂室長を拝命した私は、これを機に所員全員が参加して二五年を振り返り今後の展望を語り合う座談会を開催してはどうかと考え提案したところ、編纂室や所員会で賛同を得ることができ、昨年の二月から五月までの毎月一回のペースで会が催された。

この企画を立てた理由として、私が木曜セミナーの幹事も兼ねていたため、これが実現したらその分、木セミの配役に頭を悩ます必要がなくなるという邪な思いがあったことはまず正直に告白しておこう。だが、動機に多少の不純さはあっても、蓋を開けてみればこの企画は好評

だった（と信じたい）し、また二五年史編纂事業のそもそもの趣旨にも叶っていたものと確信している。

「そもそもの趣旨」とは、私の理解が正しければ、この年史編纂が単なる顕彰事業なのではなく、新旧の世代交代を迎えるこれから数年間のなかで、日文研という組織の来し方という遺産を共有し、今後の行く末という将来構想を各人が熟慮する契機となるべきというものである。そういうわけで、計四回の会では、創設の経緯、共同研究、海外交流、収集資料というテーマで六、七名のスタッフを集めてざっくばらんに日文研の過去・現在・未来が語り合われた。各回には草創期からのメンバーと中堅若手とをブレンドすることに腐心したが、それは上記のような成立経緯に鑑みてのことに他ならない。

かのマックス・ヴェーバーは、師である古代ローマ史家テオドール・モムゼンと教授資格請求論文の公開審査で激論を交わしたが、その後モムゼンはその場に居合わせていた同僚たちに向って、「私はヴェーバー氏との議論を通じて決して説得されなかったし、これからも自説を修正する必要を認めない。しかし、これからの斯学が彼を中心としたものとなるであろうことは認める」と述べたうえでヴェーバーに向かい、「若者よ、この槍を私に代って担え。これは私にはもう重すぎる」と語ったという。その逸話を思い起こし、内心どこかでそれに匹敵するような新旧両世代の激突が生じ、日文研の新たな歴史へのビッグバンが起こらないかと期待もした。そこにまでは至らなかったが、ところどころでジャブの打ち合いや見解の相違のスパークが発せられる瞬間はあり、それはこれから掲載される全記録のなかに推し量っていただきたい。

もっとも、総じて新世代は、世継物語を聞くかのようにお行儀よく耳傾けたというのが、実

情であった。それは、日文研の歴史を学ぼうという虚心坦懐な勉強心の表れか、あるいは諸先輩方の存在がかくも圧倒的ということなのか、はたまた単なる白けかそれとも今はまだ爪を隠しているだけなのか。その答えはここ数年のうちに出るだろう。その時が待ち遠しくもあり、また空恐ろしくもある。

（国際日本文化研究センター准教授）

座談会の記録

創設の経緯と理念、今後の展開

二〇一一年二月一六日

パネリスト
伊東　貴之
井上　章一
牛村　　圭
榎本　　渉
小松　和彦
白幡洋三郎
鈴木　貞美

司会
瀧井　一博

瀧井　では、早速始めることにいたしましょう。皆様、お待たせいたしました。これから四回にわたって日文研二五年史の刊行に向けて、所員全員参加で座談会を行って、それを収録し、

来るべき二五年史に反映させていきたいと思っております。

きょうはその第一回目ということで、日文研の創設の経緯や理念、またそこから今後の展望みたいなことについて、ざっくばらんにお話しできたらと思っております。

当初の予定していたメンバーのうち、井上先生と小松先生がちょっと会議とバッティングしてしまいまして、すぐ後から来られると思います。

私、自己紹介が遅れましたけれども、司会を務めます瀧井でございます。

きょう、登場していただいている先生方のご紹介というものはおいおいしていくことにしまして、まずはそれぞれの参加者の先生にとっての日文研との出合いといいますか、最初の日文研とのコンタクトみたいなことについて一人ずつお話しいただけたらと、思っております。

最初は、日文研創設期からのメンバー、後で井上先生も来られますけれども、この場にいらっしゃるのは白幡先生ですので、まず最初に白幡先生から口火を切っていただいて、創設の頃の思い出とか、お話しいただけたらと思います。では白幡先生、お願いします。

白幡　では、手短に。私は、日文研に来る前、京都大学農学部の林学科にいました。それで、日文研とのかかわりは詳しく言うと長くなるし、たぶんいろんなところで出てくると思うので、ここでは概略を述べるに止めます。

私は、京都大学の人文科学研究所の共同研究会に参加していまして、その共同研究会の班長が吉田光邦という科学史の先生でした。そこに集まっている人間が文・教育学部から理・工・農学部まで、医学部もいましたけれど、文系から理系まで多分野にわたっていたんですね。その共同研究会に参加している縁で、梅棹忠夫さんの研究会の人たちとも知り合いになるとか、それから梅棹さんが館長の民族学博物館、既に日文研の先輩としてできていました共同利用研

ですよね。その共同研究会のメンバーにたくさん知り合いができるなどの縁で、そういう人たちの間で、何か日本文化研究のための研究所づくりの話があるというのを聞いたんですね。一九八三〜四年頃であったと思いますけれども。私はまだ助手でしたので、それは噂で聞くぐらいだったんです。そのうち、共同研究会のメンバーの中とか友人関係の中にそういう話がだんだん表立って出てきまして、それで一九八六年にこの日文研の創設準備室ができたときに、創設準備のための討議資料をつくったり、どんなふうに日文研の研究を進めてゆくか、実際に動いていったらどうなるかというような、応用問題を検討するグループ「ＡＮＯの会」ができたんですね。これは、人文研の教授だった山田慶兒さんがキャップ役になって、勉強会という形でやっていましたが、そこのメンバーとして呼ばれた。その中心になっていたのは亡くなられた園田さんで、園田さんは創設準備室の次長をやっていて、大体東京で学者側のこういうふうにつくりたいというイメージと、役人の側からの金がないとか、何のためにそれが必要であるかとかという、いろんな質問が出されるわけですけど、その想定問答にどうやって答えるか、そのため園田さんは月に一回か二回帰ってきて、京都で理論武装のための勉強会をやって、懐に、どう言ったらいいのかな、おもしろく言うと反論の実弾を持って、東京に戻っていってバンバンと打つと。反対派がそんな研究所は要らんと言っても、完璧に反論できるように準備していました。組織・体制とか、予算とか、人員の数とか、年間の活動のスケジュールとか、成果の公表とか、いろいろなシミュレーションをやりました。ＡＮＯの会のメンバーに入っていて、そしてその成り行きもあって、日文研の創設準備にかかわることになり、結局、最初のスタッフに入れていただいたわけです。

その辺は、私は日文研創設一〇周年記念号のエッセイにもその一端について触れましたけれ

ど、今思えば創設前後は大変熱気にあふれていて、例えば一九八六年の五月の連休は、三日間ぐらいかけて延々と研究所のあり方を議論し、あらゆる点についての想定問答集をつくった思い出があります。今、日文研の研究活動全体を示す個人研究から共同研究、研究協力まで半円形の図がありますが、これはそのとき議論をした結果のまとめです。取りまとめは山田慶兒さんがやってくれたんですけれど、それによって日文研は個人研究、一人一人の研究からほかの研究者のためにもやる研究協力まで、考えうるかぎりの研究方法を備えた組織であると位置づけられました。これまでにない組織である点を強調するような資料を一生懸命つくったというのが、特に初期の頃の思い出です。

創設で、一つだけ特に大事な問題として議論するのに苦労したのは、日本の大学のほとんどに国史、国文、いわゆる日本についての根本的な学問があるじゃないかと、なぜ日文研なんか要るのだという意見に対する答えです。有名な立派な大学に国史、国文という講座が全部あるんだから、それを組織がえしたり、あるいはその活動を刺激したりして、国際化とか、日本学の進展だとかというのはできるんじゃないかと言われたときに、なんで日文研でなければいけないのかという論理を必死でひねり出すのに、みんなでよく討議をしたなあという気がします。だけど、いまだによくわかりませんね。それでもいいんじゃないかと、思う面もありますね。極論ですが、いっぺん解体して、国史・国文に戻る（日本史、日本文学の名称一色になっていますが）というのも別に悪いことではないと思ったりもします。ただ八五年、八六年頃には、やっぱり長く都であった京都市に、日本研究の一種のセンターをつくりたいという考えは皆の中に共有されているところであって、そして、ただしそれはどういうグループがその中心を担うかというのは、またいろいろその後の論議を生むことになったと思うんです。日本全国

にそれまで長い時間をかけてつくられてきた伝統ある「日本学」の諸分野、特に国史、国文とどう違うのかを説明するというのは、今でもそれは必要なことではないかなと思っています。

以上です。

瀧井　ありがとうございました。では、古株の順ということで、次に鈴木先生に、同じように日文研との出合いといいますか、あと初期の頃のお話、思い出話みたいなものを若干していただけたらと思います。よろしくお願いします。

鈴木　創立メンバーには井上さんがいるので、そのお話を聞いてから出てこない話をしようと思っていたんですけれども。

私は、三八歳ぐらいまでフリーランスで著述や編集などをやっていたのですね。そのうち、東洋大学に就職して、二年目かに中西進先生からお話があったのですが、少なくとも二回はお断りしています。国立の日本文化の研究所ができたという話は知ってたんですけど、それ以上のことは、わけがわからない。とても自分の仕事が忙しくて、私なんかではとても務まりませんとお断りしたことをよく覚えています。とくに、すごく抵抗があったのは、私の場合は官になるということが、自分にとってどういうことなのかわからなかった。そんなことは露とも思っていなかったわけです。私立の大学に勤めたばかりで、自分の仕事を続けていければそれでいいと思ってたんです。私はフランス文学科を一応は卒業していますので、日本文学や文化について、基礎的なこともよく知らない。一九二〇年代以降についてなら、文学史、文化史をひっくりかえすようなことはやっていたわけですが。それでも、学恩のある先生はいて、その方に相談したところ、そのお話は受けなさいといわれた。官になること云々は、あんたが官僚組織とどう渡り合うかの話であって、何もそれにのみ込まれる必要はないではないか、という

ことを言われて、ああ、そういう考え方があるんだと気づかされた。それが一番思い出深いところですね。もうひとつは、研究所の創立にかかわるということはめったにないことだから、いい経験になるということを言ってもらったこと。これもふりかえってみて、そのとおりだと感じましたね。それで決断して、今、白幡さんの話にあったエミナースのところに、まだ日文研が動き出して一年もしてないところに家内と一緒に行って、梅原さんにはじめてお会いして、「おもしろいことをやりましょう」と温かく迎えていただきました。「ミスキャストと言われないように頑張ります」とご挨拶をしたのですけど。しかしいったい、何をやっていいかわからないという状態が続きました。共同研究のお手伝いなどをしながらいろいろ考えていったわけですね。学際共同研究ってどうあるべきなのかなとか、そういうことを考えてきたわけです。

というのも、各分野の偉い先生方の議論が空中戦をやっている。全然かみ合ってないことも多い。これは共同研究って言えるのか。それなりに絡み合った話ができなくては、しかたがない。私は、今、概念史の研究みたいなことをやっているのですが、その経験が非常に大きいですね。それぞれの分野でどういうふうに基本タームができているのかを知らずに自分の分野に引き寄せて議論して、それでいったい何が変わるのだろうか、という疑問に発しているのです。四、五年は、そういうことを考えていました。ただ、私はちょっと東京で仕事が多過ぎたので、毎週新幹線で通ってたんですけど、それも若かったから出来たことですが、全体としては、とても自由で楽しかったことはまちがいない。

そして三つ目としては、日文研の創設に関して、どうしてもふれなきゃいけない話をします。私は東京にいましたので、かなり批判的なことが飛び交っているのも知っていました。ひ

とつは東京中心主義からの反発です。もうひとつは官立、文部省のつくるものということに関して私立の人たちからはかなり反発がありました。また、左翼系の人びとは、ナショナリズムの拠点みたいになるんじゃないかという強い警戒を隠しませんでしたね。それらが社会科学者をうんと入れろとか、そういう注文になって出ていたのは知っています。活字に公然と出てきたのは二、三年たってからだと思いますけれども。新左翼系の人たちがやはりナショナリズムだという批判を、活字の上で行いましたね。「国際化という名のファシズム」だとか。それに対して、日文研の中の人たちはあんまり何も反応しなくて、それは「誤解だ」ということは言っていたのですけども、外ではっきり言ってくださったのは、立命館の西川長夫先生です。今、日本で国立の組織をつくって一つの思想に固まるわけがないじゃないかという、そういう反論をなさったことを覚えています。

それから、アメリカの酒井直樹が、日文研ヤマトイズムという批判をした。裏にバードサンクチュアリがあるのは日文研のものだとか何とか、間違いも含めてですが、それで日文研に来ていた若い外国人から自分は就職できなくなってしまうと心配して相談されたことがありました。だけど、そんなことはなくて彼はすぐに日本で就職しましたけれども。

それは、中曽根さんのお声がかりでできたことと、梅原さんに対する攻撃だったわけですけど、梅原さんはいわばアイヌ文化基底説だったので、ヤマトイズムではないわけですから、よく中身を知らないナショナリズム批判が主だったわけです。

ですから、それらを払拭する努力も必要でした。酒井直樹もハルトゥーニアンも、一昨年でしたか、日文研に来てくれましたが、アメリカは私立とか州立が多いのでちょっと違うんですけど、外国の国立の大学や研究所はほとんど国家権力とくっついてる。実際、そういうところ

が多いわけですね。工学部長になったら建設大臣か何かに横滑りするとか、そういう大学が多いわけです。それと日本はだいぶ違う。「学問の自由」が保障されているわけです。そこのところが、よくわかっていない。日本の勉強をするなら日本の行政制度の仕組みぐらい少しは知っておいてよ、と言いたいですけども。逆にアカデミズムが政治と離れ過ぎているところが、僕なんかは問題と思っているんですけれども。

外務省の外郭団体である国際交流基金と私たちは協力関係をつくっていますけれども、私たちが担当しているのはあくまでも研究ですから、そこは相対的に独立した関係を保ってやっているわけです。逆に、かつて日文研は文部省直轄だった。だから行きたいという人も外国人の中にもたくさんいたでしょう。いまは、人間文化研究機構の一機関になっている。今日の日本の学問行政、文化行政の仕組みというようなことから、もう一回、自分たちのポジションを私たち自身が捉え直さないと。国内外におけるポジションを、たえず自分たちで自覚していることが必要ではないかなと思っています。

以上です。

瀧井　ありがとうございました。

たった今、駆けつけてくださったところなのにいきなりで申しわけありませんが、古参の方からということにしておりますので、次、小松先生のほうから、日文研との出合いについてざっくばらんにお話しいただけたらと思います。

小松　私は以前大阪大学に勤めていたんですね。一五年ほど勤めておりまして、五〇歳のときにこちらに移ってきました。ですから、ちょうど一三年ぐらいになりました。

大阪大学をやめてこちらに移るということの一番大きな理由の一つは、大学の重点化、大学

院重点化に反対だったんですね。反対も断固反対ということをやっていたんですけれども、基本的には少数派でした。今、いろんな大学が重点化した結果、大学院生がそれこそ博士号を持った人がたくさんあぶれていますが、こうなることはその頃からもうわかっていたんですね。そういう状態が来るだろうということがあったものですから、基本的にはこれからの大学院というのは、阪大は大変だろうなというふうに思っておりました。

しかも日本学科というちょっと変わったところにおりましたので、いろんなことを教えなきゃいけない。留学生も教えなきゃいけないし、博士課程まで学生を育てなきゃいけない。その上重点化したらとんでもないことになると思われました。だいぶ前からこちらの初代の所長の梅原や山折といった先生方とは、若い頃からちょっとお付き合いがありまして、共同研究会に時々来ておりました。大変興味深いなと思ったのは、みんな勝手なことを言っている人たちが一つのテーマのもとにいろんな意見を交わしていることでした。阪大の文学部は、何というんでしょうか、徒弟制的な講座制度が非常に優先したようなところでなかなか気軽に発言できない。そういうようなところにいたものですから、すごく伸び伸びとした、そういう意味では自分の考え方を遠慮なくしゃべれるところだなあというふうに思っておりました。

縁あって声をかけていただいたので、さきほど述べたようにやめる潮時と思っていたので、こちらのほうに来ました。日文研の定年まで一五年ありました。要するに振り返ってみると、阪大勤務が一五年、日文研勤務が一五年。一五年というのは相当長い。あっという間に過ぎちゃったんですが、当時はいろんなことができるだろうなと思って、自分が阪大ではできなさそうな科研の共同研究であるとか、あるいはそのもとになるような所内の共同研究会を、自由にある意味では誰にも文句言われずに行うことができるというふうに思ってやってまいりまし

た。ただ、どの程度そのときに考えたことが実現できたかというと、半分ぐらいだろうと思っていますが。当時はそういう共同研究会というものに対する憧れみたいなものを実現させるためにやってきたんだろうというふうに思っています。

実は、共同研究会というのは、僕は人類学とか民俗学をやっていたので、既に民博の共同研究会のメンバーになったり、歴博の共同研究会のメンバーになったりして、経験はあったんですね。ただ、共同研究会というのはどうしても、最初のうちは幅広くいろんな人を集めるんですけども、だんだんと、気がつくと、ここもそういうことが起きているんじゃないかと心配してるんですが、同じ人がずっと共同研究会のメンバーになって、気がついたら一〇年以上も、メンバーがそんなに変わらないような形になりがちです。と同時に、メンバーが小さくなっていくんですね。僕は驚いたんですけど、ある機関の共同研究会に数年ほど前に特別ゲスト、ゲストスピーカーとして行ったときに、フルメンバーの三分の二はほとんど常時来ていない。そして、常時来ているのは、そこの大学院生と若手というようなことになっていて、私がしゃべったときは、本当に正規のメンバーは十数人いるんですけれども、きょう集まっているのは五人ですと。五人のうちの恐らく一人を除いて大学院生だったんじゃないでしょうかね。ですから、よほど緊張関係を持って、そして、一生懸命いろんな人に参加してもらえるような形でやらないとああいうふうになるのかなあというふうに思いました。これはいろんなところの共同研究会が、ここ日文研もそういう可能性を持っているわけですけれども、何というんでしょうかね、いろんなところで共同研究会が行われるようになると、ついついつまらないところには面倒くさくなって行かなくなるというようなことが起きるんじゃないかというのを心配しながら、自分の研究会がそうならないように一応は努力してまいりました。

ただ、自分の研究会に一生懸命なために、隣にある研究会にあまりなかなか顔を出すことができないのが、ちょっと自分では申しわけないなあと反省もしております。共同研究会というものが日文研の柱です。そして、外から見たときに日文研らしく見える研究会をどうやって維持していくか。そこのところが一番大事だと思っております。

そんなところで、とりあえずいいですか。

瀧井　ありがとうございました。

では、井上先生も駆けつけてくださいましたので、よろしくお願いします。井上先生は創設期のメンバーですので、創設の頃の思い出話みたいなことを、お話しいただけたらと思います。

井上　これから申し上げることは、僕の頭の中に浮かんだ絵なので歪みはあるかもしれません。それはお断りしておきます。

私が強調したいのは、この研究所は、京都市の支えがあって、できたんだということですね。桑原武夫と梅原猛が京都市に、日本文化研究所をつくれと長い間言ってきました。その京都市が文部省に掛け合っていて、時期がめぐってきてできたわけです。そのことを鮮やかに示している事例を言いましょう。僕の知っている範囲で日文研の候補立地は四つありました。宝ヶ池と蹴上と今の五条のガスタンクの跡地と、それからここです。僕は当時文部省に出向いていた園田さんから、蹴上へ建物を建てる運びになったから、その図面を描いてくれと頼まれたことがあります。昔、建築の心得があったので、簡単な図面を描きました。そのあと、園田さんから「いや、蹴上の話はなくなった」と言われたことを覚えています。

実をいうと京田辺、当時は京田辺と言っていなかったですが、関西学術研究都市からも誘致

の声は上がりました。ですが、あそこは京都市ではありません。もし関西学術研究都市、正式名称はそれでいいのかな。あそこを、候補地にすれば、もう京都市という枠は超えてしまいます。そうなると、当然首都圏が立候補するでしょう。ぜひうちへ日文研を招きたいという声を上げると思います。そうなっては収拾がつかないから、京都市から敷地を外すことはできないと強く言われたことを覚えています。それで、京都市の周辺をあっち行ったりこっち行ったりして、まあ、ここに落ち着く。ここなんか本当に端っこの端ですけれども、ぎりぎり京都市という構えを保つことができたのを覚えています。

前にも申し上げたことがあるかもしれませんが言います。どうしてこんな僻地にしたんだと、当時交通機関が何もありませんでしたから、公用車で送り迎えされている梅原所長にぼやいたことがありました。ぼやきついでに、「まさか梅原さん、比叡山の最澄と張り合うつもりではないでしょうね」というふうにお尋ねしたんですよ。からかいとおべっかを、半分ずつまぜてね。すると梅原さん、「君、その話は人前でするな」と言わはった。「ああ、この人は本気で最澄と張り合っていたのか」と、そう思ったことを覚えています。

こういう場で堂々と語っていいものかどうか、迷いますが、これも言いましょう。それは違うと白幡さんが思われれば改めてほしいのですが、私はやはり、桑原武夫の存在が大きいと思います。桑原さんが京大をやめられたときに、たぶん中曽根康弘から――たぶんではない、中曽根さんから、彼がやっている学校って拓大やったっけ。拓大から誘われたんですよ。そのときに、当時の桑原さんは彼を小僧っ子扱いしていましたから、断らはりました。その中曽根さんに今度は桑原さんが日文研をつくってくれと頼まんならんようになったわけです。

日文研をつくるために中曽根康弘をまねく京都会議が桑原、梅原、梅棹、上山、今西の五人

をホストに行われました。この集まりの勘どころは、これ、私の想像ですが、昔、中曽根康弘を袖にした桑原武夫が彼の前で「すみませんが日文研をよろしくお願いします」と挨拶することにあったと思います。そこが、政治的なドラマツルギーのクライマックスだったと思います。そして、桑原さんは、梅原さんからの伝言によると、なかなかそれを切り出せずに話を左に右にしたという。梅原さんはイライラしたらしいんですけど、最終的に桑原武夫がこしらえてほしいということを頼むと、中曽根康弘がやりましょうと言う。――みんなそれでほっとしたんですね。ほっとしたというふうに聞きました。やっと言うてくれたというふうに。私は、これも邪推ついでですが、これで桑原先生の文化勲章はすこし早くなったんじゃないかと思っています。

このことをきっかけとしているのかどうかは知りません。ですが、桑原さんはそれ以降ますますいろんな意味で梅原先生に頼るようになっていって、梅棹さんをややないがしろにしだしたかもしれません。私は日文研ができてしばらくしたころに、梅棹忠夫と会ったことがあります。当時は、世間で梅梅戦争と言われていましたが、梅棹さんはそれを否定したはりました。「梅原が憎いんやない。桑のやつや」と。「桑」と言うたはりましたね。「桑原さん」と言うてなかったですね。「桑」「桑」と言うて。ああ、すごいなあというふうに思いました。

梅原先生にも桑原さんにも、ここを国際日本文化研究の拠点にするおつもりは当初なかったと思います。とにかく日本の大学には日本文化研究をする講座がない。それをどこか国立で設けたいという思いがあっただけではないでしょうか。はじめは。外国の日本研究者が日本をどう扱うかということには、あまり大きい興味を持っておられなかったと思います。

民博には日本をフィールドとするヨーロッパやアメリカの民族学者がたくさん集っていまし

た。だから、梅棹先生は外国の日本研究がおもしろいということを知ったはったんやと思います。ここが国際性をうたうようになったのは、私は梅棹さんの置き土産ではないかと考えています。梅原さんにしてみたら、日文研をこしらえる、そのリーダーシップはもうとっていたわけですよ。そのときに、やや野党的だった梅棹さんの野党案も受け入れたという話ではないかなと考えています。度量の広い与党としてね。うらみがのこらぬようにという例の哲学が作動したんやないかな。

ついでにもう一つ言いますと、当時、梅棹忠夫は民博の横にもう一つ同じ規模の博物館をつくろうとしていました。産業技術史博物館です。ドイツにドイツミュージアムというのがありますよね。ドイツの近代産業史を見せる博物館です。リュッターマンさんなんかご存じやと思いますが、ああいう産業史、技術史の巨大な博物館を千里にこしらえようというわけです。そして、そこでは共同研究も行う。民博と同じように研究部門も設ける。

当時、京大人文研にいた吉田光邦という技術史の研究者を旗頭にして、そういう分野の研究者が結集する博物館をこしらえようとしていました。吉田光邦の助手が私だったわけです。この構想には結構リアリティーがあったと思います。文系なのに、七五〇〇万円という当時では考えられないような科研費がつきました。文部省も「どうぞ、これで研究者のネットワークをこしらえてください」というような、そういう科研費だったと思います。その事務局を私がやっていました。私はそれ以降、科研費はこりごりやと思うようになっていくのですが、その根っ子はそこにあります。もう、こういう事務処理は、勘弁してくれという。

こちらは大阪府によって支援されていました。大阪府の府民文化室が窓口になっていましたね。財政的にもある程度支えてもらっていましたし、のみならず、千里の万博記念公園にある

倉庫へ全国の産業機械の古いものを集めることも認めてもらっていました。これ、維持管理費、結構大変だったんですよ。橋下府知事になって、文化経費のカットで全部捨てられました。

産業技術史博物館構想にリアリティーがあったと思うのは、塩川正十郎が声をかけてきたんですよ。おもしろい構想だ。東大阪にこしらえるなら、自分が全力を尽くすが、やはり千里にこだわるかと。東大阪が塩爺の選挙区なんですよ。おれの選挙区にこしらえるなら、文教族のドンである塩爺が支えると。まあまあ、政治というのはこういうもんなんでしょうね。

ところが、梅棹忠夫は、千里にこだわっていました。そして、吉田光邦先生は、自分を支えてくれている梅棹が裏切れない。結局、塩川正十郎のさそいにはのりませんでした。つまり、政治家から投げられてきた真ん中の打ちやすい直球を見送ったわけですよ。私は、そこで見送る吉田さんが好きでした。好きだし、見送ってくれて助かったとも思っているんです。そんなもんバットに当てられたらたまらんですよ。私なんか、それでかかりっきりになってしまう。

当時、大阪府が推している産業技術史博物館と京都市が推している日本文化研究所は競り合っていました。身びいきもあるかもしれませんが、どちらかというと、産業技術史博物館のほうが文部省という官僚機構の中では上を行っていたと思います。だけれども、政治家の誘いに乗らなかった吉田光邦と政治家を手玉にとった梅原猛のどちらがサクセスストーリーを歩むかはもう決定的でした。これで吉田光邦を旗頭とする産業技術史博物館構想は、構想自体はその後も生き残りますが、バブルがはじけた時期には可能性がなくなりました。

まだ、その産博構想が生きていた頃に、園田さんが私に「日文研へ来ないか。今度そういうのができるから来ないか」と声をかけてくれました。「梅原先生も君の本を読んでおもしろ

がってくれている。ぜひ来いよ」と。私は京大人文研の助手をしていました。いずれ出なければならない職場です。渡りに船だと思い、ありがとうございますというふうに答えていました。ところがしばらくして「あの話はなかったことにしてくれ。君の話は通らないかもしれない」と園田さんから言われました。「何でですか」とお尋ねすると「梅棹忠夫が、君が日文研へ行くことに反対している。井上をとられてしまうと、産業技術史博物館構想の肝いり役をやっている人間がおらんようになる。それは困る。今は井上を手放したくないと言うているので、すまんが、梅棹さんの顔もここでは立てないかんから、君、我慢してくれ」というふうに言われました。まあ、しょうがないかなあと思ったのですが、ここが何ていうか、人文研の先輩・後輩やね。私と園田さんは。ありがたいなと思うのは…、ちょっとごめんね。今、涙出そうになってきた。

園田さんが、僕の師匠である吉田光邦に掛け合ってくれたんですよ。「吉田さん、申しわけないけども、あなたの助手、井上を日文研で横取りすることになると思うが、かまわないか」と。吉田さんは、これ、園田さんからの又聞きなので、ほんまはわからへんのですが、吉田さんは快く了承してくれたと。産博にとっては、産業技術史博物館にとっては痛いけれども、井上君の将来のためにはそれがいいだろうと言わはったらしい。梅棹さんは反対していらっしゃったんですが、井上君を園田・梅原側へ譲ることに同意してくれたという話を聞きました。

私はたぶん、いずれ産業技術史博物館の園田さんになっていたと思います。それができておればね。ですから、園田さんの亡くなられたことが身を切られるように…、すいません。身を切られるようにつらいですね。園田さんのことをご存じない方もいらっしゃいますよね。

ちょっと自分で感傷に浸り過ぎているかもしれません。ごめんなさい。

これも恩讐の彼方ということでしょうか。この建物ができ上がったときに、梅棹先生も招いて、お祝いのパーティーをやったんですよ。たまさか私が梅原先生の横にいたときでしたね。その私の横に梅棹さんが寄ってきはった。私は梅と梅の間に挟まれたんですよ。その梅と梅が「我々仲が悪いと言われるけど、そんなことないよなあ、梅原君」とか、そういうやりとりを始めたんですね。まあ、ほんまにやくざの親分同士みたいやなあ、かなわんなあと思いました。

私は、一時代を築いた京都の大学者たちはやっぱり血が濃いなあと思いますね。あの血が濃い人たちがこれをこしらえたんだとしみじみ思います。それと同時に、私のことはもうそんなのとは関係のないところにほったらかしといてほしいというふうに強く思っていますということで、当時を、途中で涙出てごめんなさいね。思い出話です。

瀧井　ありがとうございました。

井上　学問の話、なんにもしなかったですね。

瀧井　いや、それでいいんです。一応この記録は全文起こして、二五年史に載せようというふうに今は思っているんですけれども。

井上　「桑」というところも。

瀧井　いや、あの、涙のところをどう載せようかとか、いろいろ。

もう既にこの座談会のいろいろなお膳立ては、今までの四先生のお話でそろったようにも思いますけれども、ここでほかの参加者の先生からも一言ずつ、日文研とのファーストコンタクトやファーストイメージみたいなことについて、ちょっとお話をいただけたらなと思います。

井上　ちょっとごめん。言い忘れた。何のため最初に京都市という話を振ったのかというと、産業技術史博物館構想とくらべるためでした。こちらは、大阪府の構想だったんですよ。阪大から来ていらっしゃる先生もいらっしゃって言いにくいのです、かんべんして下さい。学術行政史には京都と大阪の戦いがありましたよね、これまでは。第三高校とか京都大学は京都にできた。つまり常に大阪が京都に出し抜かれている歴史があって、たぶんこれもその延長上に来る話なんじゃないかなという前振りのために申し上げたんですが、涙で忘れてしまいました。すいません。

瀧井　ありがとうございます。

今、鈴木先生のお話で、創設期にいろんな方面からたたかれたという話がありましたけれども、私も日文研との最初の出合いというのは受験生のときで、大学受験したときに、京都大学で立看が確か立っていたと思うんです。日文研ナンセンスみたいな、そんな感じですね。受験が終わって帰るときの、これ、新大阪の駅だったと思いますけど、新大阪の駅でも張り紙がしてあって。日本史研究会かどこか忘れましたけれども、中曽根の野望を粉砕せよみたいな、そういう感じのチラシだったと思います。私はそのときに日本文化を国際的に研究する施設をつくるのが何で悪いんだろうということを少年ながら思ったんですけれども、それが私自身が日文研という存在を、名前を知った最初でした。

一〇年ぐらい前に、まだ前任校にいたときに、ヨーロッパに出張で行って、そこでドイツの旧知の日本史の研究者と会ったんですね。そのときにどういう脈絡か忘れましたけれども、日文研の話が出ました。そのときにその人が、我々の間で日文研というのは非常に評判が悪い、悪いイメージを持っているというふうなことを、ぽろっとおっしゃいました。それが、日文研

との二度目の接触みたいなものです。

にもかかわらず、その後、私が日文研に奉職することになるとは思いもよらなくて。ただ、私自身はここに職を得るまでに、ちょっと二つ、そういう印象的な出合いをしております。

ほかの先生方というのはいかがでしょうか。最初のインプレッションとか、どういうイメージを抱いていたかとかということ、またそれがどう反転したかとか、あるいはそのまま持続したかみたいなことについて、一言ずつお話しいただけたらと思います。

まず、牛村先生から。

牛村　牛村圭です。日文研ができたのは昭和六二年の五月。当時、私は大学院博士課程の三年生でした。博士課程から一応研究者ということにするならば、日文研の歴史と私の研究生活がほぼ重なっていると考えています。

実は今から六年前の四月一日にここに辞令をいただきに参りましたが、そのときが日文研に来た初めてでした。すなわち、それ以前に図書館を使ったこともなければ、共同研究に加わったこともなし。理由は簡単で、「勉強せざる者、日文研に入るべからず」と自分を律していたというのが主たる理由です。

初めて日文研へ来たときは、したがって正門のところで深呼吸をし、自動ドアで深呼吸し、入って名乗りを上げようとしたが受付に誰もおらず、拍子抜けしたという記憶があります。ですので、辞令をもらう前はいわば塀の外の人、それから後は塀の中の人という日々を送っています。

長かった塀の外の人の時代のことを少しお話ししたいと思います。三点ほどあります。

一番最初に思いつくのは、師匠の一人である芳賀徹先生の笑顔ということです。昭和六一年

の初夏の頃だったと思います。比較文化という学部生の授業を先生が持っているとき、私は大学院生でしたけど、週に一回、顔を出していました。そのとき「今度、京都にこういう研究施設ができるんだ。例えば牛村圭という名前を入れてポンと押すと論文がずらずらっと出てくるんだぞ」と、うれしそうに話していらした。今では当たり前のことですけど、二〇数年前には非常にびっくりする話でした。やがて自分は東大を定年になったらそこに行くんだ、これで就職先も決まって万々歳だ、ということを話していらっしゃいました。

実はその日、あるゲストを連れていらしてて、そのゲストというのはアメリカのジャーナリスト、ジェームズ・ファローズさんだったんです。驚くような組み合わせです。というのは、ジェームズ・ファローズはその二、三年後、『アトランティック・マンスリー』に「コンテーニング・ジャパン」(Containing Japan) という、「日本封じ込め」というジャパンバッシャーたちの先端を行くような論文を発表しました。すなわち、東大に来たとき、ファローズは日本でそのための調査を行っていたということだったんです。

二つ目は、ほぼ同じ頃、やはり朝日新聞、さっき鈴木先生がお話しになった件ですが、朝日新聞が行っていた一連の日文研に対する反発キャンペーンというものです。すなわち「国策中心の日本研究所を京都に設立する動きがある。それに警戒せよ」というものを何度か読みました。

三点目はアメリカでの話です。昭和六三年の九月から三年間、北アメリカに行きました。一年目と三年目はシカゴ大の大学院生、二年目はカナダで大学の客員教授をしていました。シカゴは、ちょうどさっきお話にあった酒井直樹さんがコーネルに移った後ですので、直接お会いすることはありませんでした。シカゴには、入江昭、ハリー・ハルトゥーニアン、テツオ・ナ

ジタと三人の日本史研究者がいらっしゃったんですが、私はその中の入江先生にとってもらった。ところが入江さんは、シカゴ最後の年になりますが、サバティカルでハーバードに行ってらっしゃって、授業をお持ちではない。必然的というか、結果として、ハルトゥーニアン、ナジタ、お二人のゼミに参加し、次第に親しく教えていただくということになりました。

ちょうど日本の世が昭和から平成に変わった一九八九年、その冬学期は週に一回、ナジタ先生のもとに行って、Supervised Readingという、一冊の本について自分の考えをまとめて報告し、それについて質疑応答をするという個人授業を受けました。何でもいいよと言われたので、選んだ本は、ピーター・デールの『ザ・ミス・オブ・ジャパニーズ・ユニークネス』(*The Myth of Japanese Uniqueness*)、日本人はユニークだという神話、というこれまた日本バッシャーズの本なんですけど、それについて一章ずつ読んで報告をしていました。

ある日のこと、そのナジタ先生が、どういう脈絡かわかりませんが、日文研のことを話題にします。非常に学問に厳しい方でしたが、そのナジタ先生が深刻な顔して日文研の批判をするんです。今の記憶にあるのは、アウトレイジアス(outrageous)だという形容詞でした。語るその深刻な面持ちに私もつられて、「I promise I will not join such an institute in the future」と思わず言ってしまったというのが二九歳の私でした。

また、柄谷行人さんもシカゴに来られることがあって、なぜかその講演の端々で日文研の批判をする、という記憶もあったので、当時アメリカでの日文研の評判は甚だ悪しという印象を強く受けました。

日文研に関わった身近な方々としては、芳賀先生、また同じ東大の比較文学比較文化研究室の伊東俊太郎先生、さらに同窓先輩の上垣外憲一さん。博覧強記というよりも知的な極めて大

風呂敷というような方々が日文研のメンバーに加わってスタートしたかと思います。

非常に申しわけないことに、ここに赴任するまでは、日文研でこれほど共同研究が盛んだということは、私は部外者としては知りませんでした。すなわち日文研はといえば、極めて優秀な学者が集う研究所という印象が強く、高校の頃読んだ柿本人麻呂の本の著者・梅原猛。大学二年生の頃は将来は中学校の教師になろう、科目は英語か体育か、放課後は陸上部の顧問、こう思っていたので、教育心理の本も読みました。その著書の一人が河合隼雄。さらに、本屋で見かけたおもしろい霊柩車の本の井上章一。東大・駒場の書籍部の棚で見つけた笠谷和比古、白幡洋三郎。こういったお名前を次々に覚え、ああ、こういう先生たちが日文研にはいるんだと知って、ここは学問の府なのだなということを強く覚えていた記憶があります。

そのほか、こういう研究者がいるのだと知ると、その研究者がなぜかその次には日文研に移っている。例えば川勝平太さん、そして猪木武徳所長。佐藤卓己っているんだと思うと、今度は佐藤さんが日文研に来ている。池内？　ああイスラムねと思うと、今度彼も来ている。と気がついたら今度は自分の番だった、というのが日文研に来るまでの様子でした。

共同研究については知らずと申しましたが、研究協力が行われていたことは、うわさには伺っていました。例えば大学院生の頃、チューターで三人の外国人を担当しましたが、多少自慢げに言うと、そのうち二人が日文研の外国人研究員になりました。一人は今いらしている韓国のス・ザイゴン（徐載坤）さん、もう一人は既に数年前ですけどいらしていた韓国のイム・ヨンテック（林容澤）さん。という方々を通して、研究協力のことも聞いてました。

以上がここに伺うまでの日文研との接触ということです。

瀧井　ありがとうございました。では、次は伊東先生、お願いします。

伊東　ただいまご紹介にあずかりました伊東と申します。

私は、年代的にはたぶん牛村先生と瀧井先生の真ん中ぐらいかなあと思うんですが、ですから大体学生時代か大学院生時代ぐらいに、ちょうど日文研が創立、創設されたというぐらいに当たっております。

先ほど来いろんな先生方のお話にありましたように、当初いろんな批判とか懸念のようなものも若干あったというようなことも存じていますけれども、個人的に印象的だったのは、しばらくしてからだと思うんですが、たまたま私、あるご縁で学生時代から鈴木貞美先生は存じ上げておりまして、ちょっと私の記憶が間違っていたら大変恐縮なんですが、鈴木先生が、当時出ていたある同人誌というか文芸誌に、「杼（ひ）」という雑誌だったと思うんですけれども、エッセイをお書きになっておられました。そのエッセイでご自分が関東から今度京都に行かれるということ、それから、官につくことになったというようなことをちょっと茶化しながら書かれていたのをよく印象的に覚えています。

そして、その後もいろんな先生方の本を読ませていただいたりとか、私自身は中国思想史が専門ですので、日本研究ではないんですが、今谷先生、笠谷先生とか園田先生のご本を読ませていただいていましたし、井上章一先生の本なんかも非常におもしろく読ませていただいて、随分いろんな方々がいらっしゃるんだなあというふうには思っておりました。自分自身が中国研究ということもありまして、もちろん山田慶兒先生とか、井波律子先生とか、すぐれた中国研究者の先学の方がいらっしゃったことも存じ上げておりますが、そういっては何ですが、日文研というのはやはり日本研究のメッカで、また京都大学とか関西方面の方が多い研究所だというイメージがありました。私は東夷と申しましょうか、関東の方からやってきたので、まさ

か自分が、今年度からというか、昨年の四月に着任したんですが、自分にお声がかかって奉職することになるとは思ってもおりませんでした。

コンタクトとしては、奉職する以前に一回だけ、もう一〇年以上前になりますが、芳賀徹先生の研究会に、別に私が呼ばれたわけではなくて、そのとき、どういう名称の研究会だったか大変失礼ながらちょっと失念してしまったのですが、もうお二方とも亡くなりましたけれども、一人はやはり中国思想史で京都大学でずっと教鞭をとっておられた島田虔次先生がお話になられる。それから、私の師匠である溝口雄三という方で、この方も昨年亡くなられたんですが、お話になられるということがございました。細かい話は省きますが、別にお二人が個人的に仲が悪いとか、そういうことはないんですが、学問的に申しますと、溝口先生という方は島田先生を一つの自分に先行する高い峰であると同時に、仮想敵といってはちょっと言葉に語弊があるかもしれませんが、島田さんの業績を批判的に継承するような形で自己形成というか、自分の学問をつくっていかれた方だと思うんですね。

たまたま日文研の大学院生でいらした銭国紅さんという中国人の方なんかも存じ上げていて、何かおもしろいかもしれないから聞きに来ないかというようなことを言われて、何人かの自分の先輩とか同窓生と一緒に勝手に押しかけてきたというか、それでそういうお話を伺ったということは、今でも鮮明にそのときの様子なんかも覚えております。

しかし、その後は特に関係はあまりなかったんですが、私の前任校で親しくさせていただいていた先生などがこちらの共同研究、小松先生の共同研究に加わっていたりとか、そういうことで、親しみはそれなりに覚えておりましたが、特に直接的な接触ということは、その一回だけでしたけれども、非常に思い出深いものになっております。

瀧井　ありがとうございました。

では最後に、榎本さん、一言お願いします。

榎本　榎本です。この中ではたぶん一番若い世代に属すると思います。僕が大学に入った年は一九九四年なんで、平成に入ってのことです。ですので、もう既に日文研はいろんな一悶着を終えて、でき上がってしまった後でありました。ですので、先ほどから創設時以降に入った先生方のお話にあったいろんな騒動とかを聞き及んでいた先生方が若い頃にすごい悪い印象を持ったみたいなお話があったと思うんですが、僕の世代になるとそれもなかったのです。

ですので、こちらのほうに来ることも本当にほとんどありませんで、生まれて初めて来たのは、たぶん三〇代前半、それは数年前に大枝山のほうにちょっと来たことがあります。ただし、それはこの研究所に来たんじゃなくて、八〇〇年ぐらい前に、ここら辺に住んでいた坊さんがいまして、その坊さんがいたところを歩いてみようとして歩いて、その前にちょっとどこだろうと思って地図を見たら、国際日本文化研究センターというのが書いてあったんですね。あっ、ここにあったんだと、そこで知ったんですが、知りながら、その近くを歩きながら、うかつにそのまま帰っちゃったんです。ということで、それが私のファーストコンタクトと言えるのか、数年前にニアミスしたんだけれども、コンタクトせずに帰ったというのが私のそのときのことであります。こちらに着任したのが去年の一月付だったのですが、その前に着任が決まってから案内してもらうために来るまで、全くこちらのほうに来たことがありませんでした。

私はもともと日本史、日本中世史をやっていた者なんですが、日本史の学会の人々たちが結成している学会が幾つかあって、そこら辺では概して評判が悪かったと聞いています。しかし

私は大変社交嫌いというか、あんまり人の中に入っていきたがらない人間でして、そういうところにほとんど顔を出さなかった。顔を出しても仕事を振られそうになるとすぐどこかに行っちゃう、そんな感じで。結局、あまりそういうふうな愚痴とか中傷とかを聞くということがなかったので、その点においては余計な先入観はなく来られたとは思っています。

ただ一方で、三〇代初めぐらいまでの頃に、こっちのほうに来る動機があるかというとなかなかなくて。学校、大学とか研究所とかのイメージとかをつかむ場合は、そこにいる大学院生とか同世代の連中とかと付き合う中から、いろいろと、ああそういうとこなんだ、そこは、あそこはおもしろいねとか、そこにはそんなおもしろい人がいるんだとかということを聞く。さすがにいきなり二〇代のぼんぼんが、教授の先生から根掘り葉掘り聞くというのは大変恐ろしいので。その点では日文研にはそういう院生の数は圧倒的に少ないわけですから、なかなかそういうふうなお話を聞く機会もなくて。だから、私の中ではとにかく、何だろう、雲の上の先生たちが集まっているところという印象でした。僕の分野で言えば今谷明先生とか村井康彦先生がいらっしゃった頃ですね。あと、先ほどから名前が出ていらっしゃる梅原先生とか川勝先生とか、そういうユニークな研究をされているような方々、そういう方々がいるようなところだというふうな印象で来ました。

ただ、いろいろと言っていますが、早い話が何も知らずに来ました。どんなことになるのかなというふうに思って来たのですが、今のところは——今のところはという言い方はあれですね、大変満足しています。

基本的に今まで私は日本史研究施設の中で勉強してきて、そしてその後、東京大学の東洋文化研究所というアジアの研究を行う研究所がありまして、そこで助手もやっていました。ここ

では、まだ私もそれほど深くいろんな研究会に出ているわけではないのですが、ちょくちょく自分と違う分野の人の発想に触れることができるという、こういう場というのはなかなかおもしろいなというのは、この一年間で感じているところであります。これがどれぐらい自分に反映できるのかというのは、自分のこれからの努力次第なんだろうと思いますが、それは自分の能力との相談かなと思っていますが。

そんなところで、私の日文研とのコンタクトでした。

瀧井　ありがとうございました。

きょうは非常に時間が押しているので、あと残りの時間で、ほかの牛村先生、伊東先生、榎本先生には、ぜひ私と一緒に聞き役になっていただいて、古参の先生方のいろいろな思い出話をお聞きしたいと思っておりますが。

既にいろいろな話題が出てきたのですが、とりあえずやはり創設期に何人か、我々にとってはもう本当に、雲の上のような方々のお名前が出てきました。梅原先生、桑原先生、梅棹先生、中曽根元総理とか。それぞれその先生がこの研究所をつくるに当たって独自の構想というものを持っていらっしゃって、それがいろいろシンクロして、結果的に今の日文研ができたのではないかと、この間、二五年史の編纂に携わって思っているんですけれども、そこら辺のそれぞれの先生が持っていた構想なり思いみたいなものについて、もうちょっと詳しくお聞きしたいなと思うのですが、それぞれの先生の思いというのはどの程度一緒で、どの程度違っていたのか。梅梅戦争の話はちょっと出ましたけれども、例えば桑原先生というのも、私はこの仕事を通じて初めて知ったんですけれども、かなり一生懸命に取り組んでおられたんですね。先ほどの井上先生のお話にもありましたが、桑原先生がいなければ日文研はできなかったような

気もするんですけれども、そういった点とかはどうなんでしょうか。どなたかサジェスチョンをいただけたらと思うんですが。

白幡　さっき井上さんが言われたのですが、ちょっと一言。桑原さんはもともと京都市を動かして、長らく都であった京都にやっぱり日本文化の一大研究センターがぜひ必要であるという考えを早くから言っておられたんですね。それで僕なんかでも学生のときから聞いていたんですが、梅棹さんは、さっき言われたように、国際性というか、要するに民博が全体として海外のことを研究のフィールドにしているということもあって、国際性を日本学の中にどういうふうに入れられるかということを考えておられた。

梅棹さんがもう一つ民博以外につくりたいというふうに考えておられたというか、かかわられたのが産業技術史博物館で、これは僕も吉田光邦さんから声をかけられて、井上さんが幹事をやっていた準備組織のメンバーになり、議論の場に呼ばれたりしたんですけれど。一方、梅原さんは、当初確かに「研究協力」という、今、我々がまとめて日文研の国際的な関係の部分を言っているわけですけど、それについては、ほぼというかほとんど考えておられなかったと思いますね。考えておられるとしたら、今さっきから出ているきら星のごときというか、海外にも日本人にはできない、ぬきんでた日本研究をやっている人がいる、こういう人たちとの交流を考えておられたと思う。そこで創設初期の教授たちが会いに行かれたのは、例えばオーストリアのアレクサンダー・スラヴィクという民族学、言語学の先生とか、それからフランスのベルナーク・フランクとか、仏教、仏像の専門家ですね。それから、イタリアのフォスコ・マライーニという文化人類学者。ヒマラヤの山登りを桑原さんと同じ時期にやっていて、マライーニさんはイタリア隊の登山隊の隊長をやっていたんですけど、桑原さんはチョゴリザ登頂

を目指す日本隊の、京都大学学士山岳会隊の隊長をやっていて、登山の同志なんだけど、両方日本学ということでも結ばれているという、そういう人を梅原さんも大変評価されて研究上の付き合いもやるという姿勢でした。

梅原さんには国内における個々人の研究の優秀な人を集めたいという発想があったと思いますし、桑原さんも基本的には個人研究を中心に、共同研究というのは個人研究を支えるような形でやりたいというイメージでしたし、梅棹さんは巾広い国際的学術交流が組織として必要だという考えだったと思います。つまり、日文研が今やっている個人研究、共同研究、研究協力というのは、梅原、桑原、梅棹という、日本研究についてそれぞれ重心のかけ方が違う三つぐらいに分かれている考え方がもとになり、それがまじってここができ上がっているという感じを僕は持っています。

一番強かったというか、情熱的だったのはもちろん梅原先生。ただ梅原さんの場合は、研究協力というか国際的な（外国人との）共同研究をどれぐらいプランされていたかはわかりませんが、実際やっていくにあたっては、外国人の研究者とは付き合うけど、一般に他の研究者のために研究協力をやるというのは負担が大き過ぎるというので、皆あんまり喜ばなかった。これを日文研メンバーにやってもらうにはどうしたらいいか、うまくすんなり受け入れてもらえるような論理をつくり出すのに苦労したというか、考えていたと思います。

研究協力というのは、それが目的ではなくて、研究の進展が目的である。ここの研究所の名前で言えば、桑原さんは日本文化研究所とずっと言っておられましたし、センターとなるといわゆる交流や人のサポートが主要業務としていっぱい入ってきて、それは困る。梅棹さんは海外サポートを忘れるなという発想でしたし、その業務をやってこそ予算は来るけれども、我々

の負担になりすぎないような仕事の割り振りはどうしたらいいかを考えました。

当初いろんな人との議論のなかで出ていたプランで、やっぱりできなかったのはもっと、例えば研究所全体が、一丸となって特別研究をやるといったような、この研究所ならではの研究をやる目標を一つ掲げていたんですけど、それはうまいことといかなかったなという気がする。歴代所長がいろいろ肝いりになってやられたけど、それができなかった。これ、できなくて当然、できなくてよかったとも言える。

あともう一つは、今、榎本さんの話を聞いていて思ったのですが、榎本さんにとっては理想の研究環境がつくられているんじゃないかという印象がある。メンバーにとっての今の日文研を割に評価してくれている意見を聞いてうれしかった。喜んで今、日文研生活をエンジョイしているように見える。そういうものをつくろうとしてやってきたのがそれなりに成功しているなら喜ばしいことだ。必ずしも全員に好ましい環境ができているかどうかわからないけれど。

初期に、日文研の裏の名前は遊民センターであるべしとの意見がずっとありました。日本文化研究センターではなくて遊民センターであると。好きなことをやれる理想環境を目ざそうと。これがもうひとつできていないことですね。今、いつも会議に追われているでしょう。何という情けない状況であろうか。遊民センターとしては出来が大変悪い。幾つかできていないこととしてはそんなところです。

井上　桑原先生は、晩年、文化勲章に目がくらんだという人がいます。これはすごい意地悪な言い方やけれども、その面がなくはなかった。僕は聞いて、はあっと思ったんやけど、亡くならはった多田道太郎さんが尋ねはったんですよ。「桑原先生ともあろう方が、どうしてそういうことに気持ちを奪われるんだ」と。すると、こう答えはった。「多田君、君たちはおいしい

ものを食べたらおいしいと感じられるだろう。だけど、もう自分の年になると、もうそんなことがない。もうこういうことしか楽しめへんのや」って。何て正直な方やと思いましたね…。

鶴見俊輔にも言われたことがあります。桑原さんのことを日文研絡みで勲章に目がくらんだと揶揄する向きもあるけれども、それは間違っていると。桑原先生は、ベトナム戦争の脱走米兵をかくまう自分たちにいつも快く力をかしてくれた。あれは、もし叙勲レースを争うなら、明らかにハンディキャップになると。桑原さんにはそのハンディキャップマッチレースを楽しむゆとりがあったんだ、というふうな言い方を鶴見さんにされたことがあります。だけど、鶴見さんの目にも、晩年の桑原さんはやや政治的なことに興味を移していたというふうに見えたのかもしれません。日文研には、桑原さんをそういう方向へむけてしまった面があるかもしれないことを、私はかみしめておきたいですね。

そうそう、梅棹さんに言われたことを、もう一つふりかえっておきましょう。日文研構想が、民族主義者の企画やとたたかれている頃のことですよ。私は、こう諭されました。民博ができるときにも反対したやつはいっぱいおる。あれは、帝国主義の出先やとか、梅棹も大日本帝国の出先機関である西北研究所にいた、つまり帝国主義のお先棒をかついでた、そんな批判したやつはいっぱいおると。そんな批判をしたやつが、今、民博の若い研究者になっとると。時が移ればそうなるんやというふうに言われました。ああ、これがリアリズムなんやなあ、というふうに思いましたね。大きい組織をつくるのは、こういう冷めた人なんだとも思い知りました。

あと、これは白幡さんも一緒やったと思うけど、朝日新聞で日文研ができることをめぐって、梅原さんが左翼の歴史家と対談をするという話がありましたよね。で、その相手を一度、

大江志乃夫が引き受けたんだけど、途中で蹴ったんですよね。やっぱり出たくないと思ったんでしょう。もう対談の期日が迫っている、何とかならんかというふうに慌てふためいているときに、私は鶴見俊輔さんを存じあげていたので、鶴見さんの名前を挙げたら、「それだ、井上君」ていうて連れていかれたよね、鶴見邸まで。私達は梅原さんの用心棒のような格好で、鶴見邸にまでくっついていきました。鶴見さん、思わはったやろうな。「井上君もこんなところでちょこまかするような人間になったのか」と。でも、渋々、対談を引き受けてくれはって。だけど、その対談のやりとりには梅原さんが怒らはって、「鶴見君はいかんかった」とか言うてはったけれども。

白幡　対談というのは、あれはドナルド・キーンさんと鶴見さんと梅原さんの三者の鼎談。

井上　鼎談か。

白幡　ドナルド・キーンさんがまた、日文研設立に関してかなり厳しいことを言っておられて、しかしその後、初代の客員で来ていただいたんですよね。

井上　その手厳しい内容とはまた違う事情で、キーンさん。ここには馴染まはらへんかったと思いますけれども。

　そのときに私は、感じたんですよ。普段、梅原先生はたぶん鶴見さんのことをよくは思っていらっしゃらないだろう。だけど、どう言うたらいいのかな、立場とか思想を超えたところにある、おんなじ京都という場所で時を過ごしたというようなつながりみたいなものは、やっぱりあったと思うな。あとね、あのきわどいタイミングで、本人がいるかどうかもわからん鶴見邸へとにかくいこうという梅原先生の決断力。器が大きいなと思いました。事を成し遂げるのは、ああいう人やね。

これも、よく言われていることやけど、桑原武夫は、自分の周りにいる人の中では、梅棹と鶴見が最も頭がよいと、よく語っていた。でも、そのラインナップに梅原は一度も顔を出さなかったと。これが梅原先生のばねになったというふうに、梅原さん自身から聞いたことがあります。鶴見さんからも、言われましたね。若い頃、毎週、京大の北側にある進々堂という喫茶店で梅棹さんと語り合うことがあった。今、想い出せば、それが若いときに一番自分の頭の回転がよかった時期だと。梅棹さん自身も同じことを言うたはりましたよ。進々堂で語り合った鶴見俊輔の思い出を。もう今は全然違う人生を歩むようになったけれども、あの頃が自分の頭の華だったというふうに。一見相入れそうもない知性が、ふれあえる。私はそういう京都に、ノスタルジーをいだきますね。

白幡　大事で、できてないことの一つは、鈴木さんがさっき言ったナショナリズムの拠点になるのでは、という懸念への完全解答ですよね。国費でもって、その国の文化を研究する組織というのは本当に可能かどうか、客観的に可能かどうか。これにはやっぱり、文句が出ると想像して、みんなが熱心に議論したのを覚えていますね。だから、調査もしましたよ。各国に自国研究のための国費丸がかえの機関はあったのか、あるのか。それで調べたら、あったことはあったし、またあることはあるんです。あることはあるんですけど、全体主義国家か、共産主義国か、そういうところしか国費で国のことを研究するメンバーを集めて一つの研究所をつくってというところはないと。しかもそれは、よく見ると、どれも学術的ではなくて、例えば研究紀要とか、そういう学術報告などは出していなくて、プロパガンダの発信と政治宣伝パンフばかり出しておると。

日文研はそういうものではないから、世界で初めての試みだから、むしろこれ頑張ってやろ

うかという、そういう議論があった。ただ、それが今、成功したと言えるか。今でも、僕は鈴木さんの言われるとおりだったと思うんですけれども、なかなか海外での誤解と悪宣伝は完全には払拭できていないと思いますよ。

鈴木　今、白幡さんと井上さんがおっしゃったように、日文研は東京ではできなかったんだと思います。学会のボスが互いに牽制しあう中央ではなく、京都というところでの文化人、学者のある種の連帯連携がなければできなかった。文部省は戦前から、純粋の研究所って、理系しか認めていないのですよ。文科系で一つも認めていない。共同利用機関はみな、博物館とか資料館とか、何かの任務がくっついているわけでしょう。ぶっちゃけた話をしちゃうと。日文研には、僕らの言う研究協力、外国人の日本研究者に研究サービスを提供するという仕事がついているわけです。それが民博や歴博の博物館、国文学研究資料館だったら資料の管理、それにあたる仕事です。そういう大義名分が不可欠で、それがないと成り立たないのです。

井上　梅棹さんはその辺、機転がきくんでしょうね、そういうとき。今求められているのはこれやというのを。

鈴木　そこはわかっていらしたんだと思うのね。いわば、必要条件と十分条件をどうかみ合わせてゆくか、ということだと思うんですね。

井上　梅原先生の場合は、京大の哲学科でギリシャ語を読まされたりラテン語を読まされたり、何でこんなことばっかりやらなあかんのやという思いが、どうして日本文化を研究しないんだというのにつながっていると思う。梅原先生は、それが情熱になっていると思うんです。

鈴木　個々人の情熱はよくわかるし、いろいろな考え方がうまくかみ合ったというのはそのとおりだけど、私たちがなぜここにいられるのか、この建物はどうしてできたのかといったら、

その大義名分があるからでしょう。それを忘れたら、ここは成りたたないのですよ。

思い出話に戻ります。ちょっと、国際情勢が、ここのところ、八〇年代から、がたがた変化しているでしょう。それが研究者にもひりひりするぐらい、ここにいると伝わってくるんですよ。たとえば、チェコスロバキアという国があったでしょう。チェコから共産党系の親日派の研究者が来てらした。その次の年に、ビロード革命の大統領の親友という人が来た。この二人は、もちろん、国に帰ったら牢屋に入れあうような関係ですね。僕らは両方とも、お迎えするわけですね。前の年にボーハチコバ先生が来ていて、こんなお話しましたと言っただけで、フィアラさんは三ヶ月、私と口きいてくれなかった。実際にあった話ですよ。

それは、日文研が全方位で構えたから、起こったことなのです。全方位で行くしかないのではないかと私は思っています。もちろん個人的には、いろいろなつきあい方があってよい。けれども研究所全体として、偏りが出ないように気を配ってゆかないと。それがここの国際戦略と言ってよいと思います。

今日だってエジプトで騒ぎが起きた。メールが通じるようになったら、すぐ「先生、私は生きてます」って、若い人が知らせをくれる。そういう関係をどこともつくっておかないと。白幡さんの悩みは、僕らもずっと悩んできたことだけど、その建前の部分をしっかりつくっておいて、それではじめて言えることなんじゃないですか。

そして、韓国の精神文化研究院（現、韓国学中央研究院）みたいなところが日文研みたいなふうになりたいと言ってきたり、中国、武漢の伝統文化研究所の人たちとも連携ができたりする。もちろん、国情がちがうから、うちみたいにはできないけれども、ああいうやり方があるんだ、ということは、学んで帰ってもらえるようになった。大学院教育でもインターナショナ

ルなやり方を目玉にしていこうというところがあちこちに出てきている。僕らにとっては、言ってしまうと、負担の大きいことだけれども、それなりにおもしろい経験もいろいろしてきたわけですし、それが自分の研究の肥やしにもなっている。

白幡　夢かもしれないけど、私は日本文化研究所がよろしいと思っているんです。何で後からできた地球研が総合地球環境学「研究所」になっとるんやと。あそこは何かほかにもっと国際的に必要な任務とか、例えば環境学上で日本の立場を説明する任務などを名称に反映させるべきではないか。

井上　これ、活字になるらしいよ。

白幡　まあ、いいんです。このことは地球研が設立されるときもそう言ったんです。なんで研究所になれるのかと。今、鈴木さんが説明したけど、やっぱり理科系は研究だけでも比較的許されるんですよね。文科系は何か別のことを、業務をやれと。それで認めてやろうという感じです。だから資料収集だとか、あるいは研究協力だとか。我々は最初、研究協力なしの研究所を夢見ていたんです。

　もう一つついでに言うと、大学院も要らん。梅原さんは「研究協力は梅棹さんの言うとおりだ」というふうに、たぶんどこかでおっしゃってたと思いますが、研究協力をやるという任務を掲げたおかげで、創設準備がものすごくスピードアップされて日文研が早くでき上がったのは間違いないと思います。

　その次に、重点化に後押しされて日文研は予算的にも豊かになって、しかもそれがずっと持続した。それはやっぱり大学院を持ったということですね。京大人文研のメンバーは多くが反対したでしょう。ほぼ全員が大学院を担当しない意見だったという。日文研の私も持たない派

だったんですけれど、これは流れに乗るべきであるという感じで妥協して、それが、プラスももちろん生んでいるわけです。負担は大きいけれども、やっぱり何とかうまくいっているという感じはあるんですよね。だから、なかなか純粋な研究所のあり方を追求できていない。実際とは、なかなかうまくマッチしてないところもある、そういう思いを持っています。

瀧井　今のお話を聞いていたら、結構、当時の文部省の考えていることにうまく乗ってここまで来たという部分もあるのかなと。いわゆる文部省としては教授会自治というものをつぶして、トップダウンで運営できるような、そういう高等教育研究機関をつくりたいという路線があったと思うんです。それとあと、単に研究するだけではなくて、何か国益のために貢献できるような、そういう文教施設です。そういう国際協力や研究支援というところにうまく――当初は方便として使ったのかどうか知りませんけれども――それに乗って、今の繁栄ないし我々の苦労もあるということかもしれません。

ちょっとここで、小松先生はずっと阪大のときも日本学科ということで、ある意味、日文研のできる前からずっと日本学という枠組みでやってこられていたわけですけれども、今のお話とかを聞いて何かご感想とかありますか。

小松　そうですね、幾つかの異なった観点からお話することになります。留学生の増加の問題がありますが、これは日本の経済的な発展と深く関係しているんですね。それまでは日本のことに関心を持つ人は、どちらかといえばヨーロッパ人が多かった。遠く離れた不思議な国の日本みたいな、日本に興味を持ったような人たちが、大学なんかで研究しているというような印象があったわけですけれども、高度成長期以後ぐらいからアジアからたくさんの留学生が来るようになったんですね。

長い日本研究の歴史を持ったところから来ていただくのだったらいいんだけれども、そういうような日本語もよくうまくしゃべれないような者に対しての教育システムがほとんどできていないところに、留学生をどんどん増やしていった。ところが、旧帝大的なところというのはあまりそういうことに関心なかったんですね。ちゃんと日本語ができる人、専門書を読める人、そういう人じゃないとうちでは受け入れませんと受け入れを断っていた。

当時の文部省では、そういう状態を克服しようとしていて適当な大学を探しており、筑波大学とか阪大が手を挙げた。文化人類学をやっていると、日本研究者と出会うことは実は意外に少ないんですね。ところが、留学生コースだといろんな国の人たちがやってきて、いろんな日本研究者たちに出会う機会ができる。つまり国際的な研究をやっているのは、そういうような日本文化研究をやって教えるような大学院生なんかを抱えるところなんだというようなことに気がつきました。たまたま縁があって阪大から声をかけられたときに、「留学生がたくさんいます」というのが決め手になって赴任したのでした。幸い僕なんか雑学的な勉強をやっていたので、そういうところで留学生たちと日本人の学生たちの両方を相手に勉強できるというのは、非常に新しい、日本の中で言えば新しい環境だというようなことで興味深く思ったんですね。

それと並行するような形で日文研、先ほどで言えば日本研究所というような形でそういうものができるというふうに新聞なんかで聞いたりしたときに、これを僕はこういうふうに考えたんですね。今、留学してきている学生たちがやがて国に帰って大学の先生になる。そしてまた日本研究の弟子たちを育てるときに、その先生方、留学まではいいとして、大学に勤めて助教授になったり教授になったりした後の、その先生方のいわばサポートをするような、窓口にな

るようなところというのは、どこかになきゃいけないんだけれども、少なくとも、僕の印象ですけれども、東京大学だとか京都大学だとかというようなところは、そういうことに本気でまだ取り組んでいなかった。その中で日文研というのはそういう役割をしてくれるんじゃないかと。

例えば僕がある留学生を博士課程まで見て、国に帰った。そうすると、その人たちが自分の弟子なんかも育てながら、また日本で研究をもう一回したりする。あるいは何か相談に来たりする。より高度な知識を得るような場所としての研究所があるのは非常に大事なことだろうというふうに思っていたので、日文研には関心は持っておりました。

ただ、先ほど話題にも出ておりましたように、日文研がつくられていく過程では、国策的な研究所ではないかという噂もあって、そういうところだったら行きたくないとか、それだったら恐らく留学生は嫌がるんじゃないかとかいうようなことは思っていました。

ただ、私の日文研に対する期待というのは、たくさんの日本研究者がいろんな形でこれから増えてくる、留学生も増えてくる。そのためのある意味では非常に重要な役割を果たしてほしいなあというふうなことは、もう阪大にいた頃から思っておりました。そういう意味では、ちょうど私などはある程度の留学生を育てて、彼らが国に帰ったりして、そういう人たちのある意味ではネットワークですかね、日本研究者のネットワークを見ながら、日文研の中でそういう、いわば、どちらかといえばアジアなんかの日本研究者なんかに対してできるだけサポートしていこうというようなことは考えてきたつもりなんです。一緒に走ってきたという感じもします。

まだまだほんとに留学生を受け入れる機関、大学がない時代に、日本学科というのはそれに

応えようとしてできた珍しいコースでした。そういうことが僕の頭の中にあったので、民博だとか歴博なんかよりも、こちらの研究所のほうが、自分が教師生活をやった中で言えば合っている場所だという感じはしましたね。もしも二つあって、日文研と例えば民博と両方声がかかったら、僕は人類学者だけど、やっぱりこっちのほうがいいなという感じはありましたね。

井上　なんという、言いよう。わざわざ記録に残そうとしているでしょう。

瀧井　今の発言は絶対にカットしないでおきましょう。そのようなことでは牛村先生も似ていますね。東大の駒場の比較文学比較文化は、似たようなポジションですし、その後はシカゴのほうで、外から日本研究を見るという立場を得られていたと思うんですけれども、そういった観点から今の小松先生のお話というのは、どのようにお聞きになりましたか。

牛村　日文研に研究協力という制度が入ったというのは、さっき白幡先生の話で初めてよくわかったと私は思いました。東大の駒場もそうですし、いろいろ日本研究を広く行う施設は日本にもあるし、外国にもあると思います。ただ、外国の場合ははっきり申し上げて、一部をのぞいてレベルがまだまだと感じます。一人の教授が古代から現代まで文学を持たなきゃいけない。歴史も同じであると。例えば私はカナダにいたときに、時々秘書から呼ばれて「こんな電話があるので答えてくれ」。出ると「ヤマンバって何ですか」とか。外国の日本研究の平均レベルというのはわかりませんけど、そういう百科事典レベル。簡単な百科事典の役割を果たすところがあるかと思うんです。

一方、じゃあ日本はどうかというと、日本の施設はありますが、自分側のサポートがあまりできていないんじゃないかなという気がします。ここは研究所ですから教務課がないのは当たり前なんですけど、よその大学と比べてみて、やっぱり教務課がないというのは初めはちょっ

と驚きました。そのかわり、どんと研究協力課というのがある。その研究協力課が親しい課であるということは、研協という略称が非常に身近なものであるということを語っているんじゃないかと思うんです。

笑い話ですけど、赴任して二週間後、あちらにいらっしゃるカーンさんが私のところにいらして、「七月の日文研フォーラムの司会をやってください」、と。いろいろ詳細をお話くださって、「あとは詳しくはケンキョの喜多川さんに聞いてね」と聞いたとき、「あっ、日文研では人の名前の前に性格をあらわす語をつけるんだ」と思いました。「謙虚の喜多川さん」と思ったんですが、ご本人からメールが来て「研協」とあったので、あっ、このことかと思いました。それほど我々の日常活動に研究協力というのが根づいている。それがあれば他大学との差異化が可能だし、東大・駒場は残念ながらその辺はないです。教室の事務スタッフが研究協力をも担当している。あとは普通の教務課が担当しているにすぎないと思います。

瀧井　私だけが聞いてばっかりなので、伊東先生、榎本先生のほうからも何か。いろいろ創設の細かいエピソードみたいな話も出ましたし、あるいは意味不明な発言とかもあったかと思いますが、それってどういうことなんですかということでも結構です。

白幡　僕は、研究協力ってかなわんなとか、いろいろ本音のことも聞きたいんですけれど。研究協力という名前に落ち着くまでにはだいぶ議論があった。半年、一年ぐらいかかったと思います。最初は研究サービスと。それから相談サービスというふうに言って、要するに今、牛村さんが言ったように、本当に百科事典のようなことを聞かれても一々答えるようなサービスをしましょう、そういうことを一方では考えていたんですね。そんな仕事をもとに研究費をいただく。

井上　初期は、あれで、地域分担をしましたね。

白幡　試みに、半分冗談で地域分担しました。実現してないんですけど。井上さんは初代アフリカ担当であったんですけれども、一回もアフリカ行ってへんのと違う。いつ行った。

井上　一番仕事せんでええやろうと思うて選んだんです。

白幡　そうそう。だからみんなわかってて、やったんです。地域担当というのもつくってみようか、とね。だけど結局、初期には一応担当区域があったと思いますけど、一〇年ぐらい、続いてたんじゃないですか。

　必要ないという考えもあるけど、僕はある程度イメージをしておいてもいいと思う。それからこの間、研究の枠組みとしての五域・三軸、もうあんなもんは共同研究をむしろ縛る枠組みであったというような意見が出ていましたけれど、初めはやっぱり予算をちゃんともらうためには、片寄りなく研究をやっていますという証明が要ったわけで、そのためのマニュアルみたいなもんなんですね。

　そういう用語が飛び交うので途惑っている人もいるでしょう。新たに来られた人は、その辺はどういうふうに理解されているのですか。

瀧井　日文研ジャーゴンをつくろうとかという話が当初ありましたが…。

白幡　「謙虚」じゃなくて「研協」であるとか。

瀧井　私はちょっと、そんな内輪受けなものはやめたほうがいいんじゃないかと前から思っていたのですけど。ただ、確かにジャーゴンが多いなというのはありますけれども、最初に赴任されてきて何か面食らった言葉とかってありますか。何じゃこれはと思った言葉とか、ございますか。

鈴木　言葉もそうだけど、ここは、それ以前に組織がわからないでしょう。いろいろな経緯があるのだけれど。最も大きいのは講座制とか部門制をつくらなかったということね。それから、このぐらいの規模に留めた方がよいとか、そういう大事な判断が創立期になされているんですよ。

白幡　鈴木さんはそう思ったかもしれないけど、梅原さんは教官倍増計画を出してきたでしょう。

鈴木　私自身がそのとき反対できるほど明確なヴィジョンがあったわけではない。

白幡　してなかったかな。

鈴木　違う違う。

白幡　したんじゃない。

鈴木　山田慶児先生がはっきりと、倍増なんかしたらあかん、と。

白幡　僕も反対だった。

鈴木　要するに、一つの組織が互いの顔が見えなくなったらだめという意味です。

白幡　鈴木さんの共同研究、六〇人ぐらいおるでしょう。

鈴木　あれは顔が見えなくてもいいやり方をしている。

白幡　梅原研究所は倍増で六〇人にしようとした。

鈴木　サテライトは様ざまな規模のものがあったっていいわけでしょう。ひとつの機関を部門制に分けてしまうと、同じ仕事を分け合うとか、誰かがサボっても代行できるとか、それができなくなるでしょう。山田慶児先生、園田さんら参謀格の人たちが合意形成しながらつくってきたことがとても大きいと思うのですよ。

さっき言ったのは全方位外交ということね。それから、日文研は世界の日本研究をリードしてはならないという基本姿勢もそうです。研究情報のセンターにはなりますが、日文研は何かの旗を振らない。もちろん個々人はやっていいんですよ、自分の研究は旗を立てても、日文研として、組織としてこれが日本研究ですというのは示さないということ、そういう大事な基本姿勢が蓄積されてきているのですね。それが不文律の、日文研の精神みたいなものだと思うんだけど、これは一つ狂うととんでもないことになりますよね。今日、国際協力とか学際性とか、みんなどこの大学でもやっているけれども、それで、こんな成果が出ています、と言えるような成果をうちは出していかなくてはならない、とんでもない重いオブリゲーションを背負っていると考えた方がよい。逆にいうとそれさえ出していけばいいわけです。

もう時間がないので最後に学際研究について言っておくと、私は、ちょっと日文研にオーバーコミットしすぎかもしれないけど、個別の専門研究に還元できるような成果を出すべきだと思っているんです。ほかの分野とあわせて研究した成果によって、各専門分野の中身が変えられるということですね。そのような学際的な共同研究をたえず日文研が開発してゆくことが問われていると思っています。これが大事だと思っています。新しくここに来る人たちが、いつもそのプレッシャーの下で新しい仕事をやっていけるという状態をつくるべきでしょう。場所のもついい意味での圧力というものをつくっていかなきゃいけないんじゃないかなというふうに思います。

小松　これは感想ですけれども、確かに今、共同研究会はいい意味でのプレッシャーがあってすごく進んでいますよね。けれども、その一方では業務がよく見えない。

僕は園田さんと、日文研に来たころよくけんかしてたんですね。会議のやり方が大学のやり

方とまるで違う。一番僕が今でも腹が立っているのは、前回の会議に欠席した人が、その会議で決まったのに次の会議に出て来て、「おれは聞いてない、おれの考え通りにせよ」みたいな発言をすることがしょっちゅう起きるんですね。これほど欠席した人が威張る研究所というのは、これは危ないなあと思うんですね。

いつも園田さんは、おまえの来る前はこうだった、草創期はこうだ、これに決まっているんだから、おまえは後から来たから前のに従え、という。これが非常に嫌で、大げんかしたんですよ。だいぶこういうことを言う人が減ったんだとは思うんですけれど。

鈴木　絶えず言ったほうがいいんだよ。変えるべきところは何故、変えるのかをはっきりさせて、変える。

小松　そうですね。だから、後から来た人ももっと頑張って、それはやめてくださいとか、そういうのを。すぐ印籠みたいなものを出すなとか。我々もきっとやっていると思うんですよ。

井上　今、おびえられているのかもしれません。

小松　僕もきっとそうだと思います。昔のことを知っていると、ついついこうなっちゃう。ちゃんと説明をしていかないと、すごく断絶ができると思う。

瀧井　私、ここに赴任した当初すぐだったんですけど、ある名誉教授の先生と東京のある会合でお会いする機会があって、そのときに自己紹介して、「今度、日文研に赴任した瀧井といいます」と言ったら、その名誉教授の先生が開口一番「相変わらず会議は多いか」と言われました。「僕は前任校から移って、何だここはと思って梅原さんに直訴して、委員会を半分に減らしてもらったんだ」とおっしゃいました。確かに会議が多いということは、私がこれまで所属していた大学とかに比べて思うことなんですけれども。

ただ、そこには良い面もあって、前のところでは裏委員会とか裏執行部とか何かありまして、そこで全部決められるんです。つまり、非常に政治の領域が大きいといいますか。これは部門制をとったら、そこでもう政治というものがいろいろ入りますね。予算とかパイの奪い合いとか。そこら辺は風通しのいい組織だなというふうなことは非常に思いました。それが一つ、こちらに移ってきたときの、今も思っているすがすがしい思いなんですけど。

井上　風が吹きすさぶこともあるけどね。

瀧井　いいときも悪いときもあるということかもしれませんが。

そういうふうな何かいまだに持っている、これまでの先生の大学時代とかと比べてやりやすい面とかやりにくい面とかというのはありますか。例えば伊東先生とか、いかがでしょうか。

伊東　私も大凡瀧井先生と似たような感想で、大体最初入ってきますと、日文研はまず建築が一階だと思って歩いていると二階だったりとか、まずそういう構造もよくわからないというところがあって、確かに組織もちょっとよくわからないところがあるんですね。これは、批判ではないのですが、かといって、特に困ることもないんですけれども、誰も特に教えてくれるというわけでもなく、ただやっぱり風通しがいいというのは、これはよく感じますね。私の前任校は私立大学でしたので、いわゆる国立大学の講座制のようではないんですが、やっぱり学部、学科、専攻みたいなものがありますと、どなたか定年退職とか、ほかに移籍されて、例えばフランス語やドイツ語の先生がやめられたというと、そこがまた今度、今、中国語履修者が増えているから中国語を何とか取りたいとか、政治というか、確執がいろいろとあって、会議は前のところのほうが全然長かったですね。さまざまな改組とか、大学院をつくるとか、年中そういうことをやっておりまして、それから見ると何かこちらは、所員会議は決定権はないと

いうことらしいんですが、何か先生方、談笑されていらしたりとかして、誰も怒鳴る方も、命令したりとか用事を頼んでくる方もいなくて、ある意味で非常に好き勝手やらせていただいて。

井上　執行部に入らはったら、気持ち変わりますよ。

伊東　いやいや、それはわかります。まだ楽をさせていただいているということは、よくわかります。

で、そういう一兵卒というか、新兵の立場から見ると、ちょっと先輩の方とかの、チャップリンの映画か何かで軍隊に入った新兵みたいな感じで、先輩がこうやったら、ああこうやるんだとか思って、それをちょっとまねたりとか、そんなことをやりながらだんだん水に慣れさせていただいてきているのかなというか、そういうのが感想です。そういう何か、一人が一国一城ということではないんでしょうけれども、一人一人の自由度が高いんじゃないかなという気がしています。

瀧井　ありがとうございました。

榎本さんは、給料をもらうようになったのは、ここが最初ですか。

榎本　助手がありました。

瀧井　ああ、助手ですか。

榎本　昔やっていたところが助手だったので、その手の会議はもう一切出なかったので。だから、今こういう会議がある意味というのを全然考えたことなかったんですが、今お話を聞いて、ああそういうことかと。何か政治の面とかを極力そういうところで動かないようにしているということならば、この委員会の数も、ある意味で積極的な意味があるんだなあということ

を今知りました。

鈴木　学部の授業をしなくていい。卒論指導もない。その分、研究協力と共同研究、組織運営が給料の分でしょう。楽しみにしているわけじゃなくて、しょうがなくてやっているんです。

白幡　会議でものが決まらない。

鈴木　そうそう。

榎本　減らせれば、もちろんそのほうが助かりますがね。

牛村　会議は多くても、一人の発言が短いのが日文研の特徴だと思うんです。若干名例外がいますけど、基本的に皆さん短いですよね。早く終わりにしようという気持ちが根底にある証だと思うんです。

鈴木　だって、でかい教授会で延々付き合わなくてはならないところと比べたら、まだ。

白幡　まだましかな。

鈴木　そういうこと。自分たちでやり方を決められるのですよ、ここは。もちろん、アカウンタビリティーは問われますが。

瀧井　ここでちょっと、せっかく公開にしているんですから、もしフロアのほうから何か聞きたいということがありましたら、どうぞ。何か創設の頃のエピソードなり経緯なりについて、何か聞きたいみたいなことがありましたら、ご発言いただけたらと思いますが、いかがでしょうか。何かありましたら。

ローゼンバウム　簡単に聞きますけど、それぞれの先生たちが海外で勤めた経験を持っていると思うんですけど、それと日文研と比べたら、どういうような目立ったところがあるんですか。それをちょっと聞きたいんですけど。

白幡　僕はそれを喜んで言いたいと思っているんですけど、我々が海外に行ってサービスを受けることはあんまりない、ほとんどないと思うんです。私はケンブリッジに行きました。それからパリの高等研究所も行ったんですけど、どこでも要するに自分でやれですよ、大体。研究は自由にやってくれということですね。日本は何か細かいことをいっぱいサービスし過ぎているんじゃないかと思って、そこに海外の組織との大きな差があって、どちらが結果的によいかはわかりませんけど、日本はえらくサービスし過ぎて、むしろ研究者の迷惑になっているんじゃないかなという不安を持っていますけどね。

鈴木　日文研のこと？

小松　日文研が特別なんですよ。

白幡　かもしれません。

小松　ほかの大学は部屋もろくにもらえないでしょうね。どこか海外に出ている先生の部屋をちょっと借りるとか、そんな感じで、日文研のような研究室を、しかもたくさんのサービスを受けながら使えるところは、あんまりないんじゃないですかね。

井上　ここ、通常の文科省の施設と比べると、たぶん坪単価は一・五倍ぐらいになるんですよ。何でそれだけの坪単価を獲得することができたかというと、外国の研究者に快適に過ごしていただきたいという名目があるからですよね。それで、これだけぜいたくな施設ができたんです。

小松　なるほどね。やっぱり快適に過ごしてもらわないといけないわけだよね。

井上　そういうことになります。施設費算出の理念はそういうふうなことで。

白幡　各人の研究室の面積も計算して、皆が完全に同一になる案にしたんだけど、外国人用の

研究室は、同じようにできないと言われました。つまり、半年とか一年しかおられない先生だからというので、ちょっと減らされてはいますけど。一応皆さん、それぞれ二五平米が基準ですね。

それで、それぞれの研究室の面積を一部割いたのをまとめてつくったのが、コモンルームというところで、だからみんなで使ってよろしいということになるわけです。日文研のサービスは、よ過ぎるのかな。

瀧井　鈴木先生はいかがですか。

鈴木　要するに、人間文化研究機構の一組織となっても、どれだけこれまでの日文研のよさを保持していけるか、それがこれから問われていることだと思います。

瀧井　もしほかにあと一人ぐらいいらっしゃったら。よろしいでしょうか。

小松　所長、講評を。

猪木　ちょっと喉の調子が悪いんですね。もう重要なポイントはすべて出ていると思うんですけど、二つだけ、私自身の個人的な感想を補足します。

一つは、八七年、八八年あたりに日文研が設立されたというのと、八〇年代、輸出の増大で海外市場を脅した日本はご存じのように世界で非常にバッシングに遭い、そして日本国内では日本文化特殊論が跋扈して、アイデンティティーという言葉、私、あまり好きじゃないんだけども、日本とは何かという議論が盛り上がっていた時期だと思うんですね。それと本当に正確に日本のことを海外、内外の人に研究してもらって、学術的な交流のできる研究機関が必要だという認識とが非常にマッチしたという点。これは因果関係かどうかわからないんだけども、重要な点だと思いますね。

それともう一つは、いろんな分野の方がおられて、私も狭い意味での経済学は全然研究として進まなくなった。特に若い大学院生なんかと話ができる機会がこっちに移ってなくなったというので、確かに寂しい思いはしました。しかしどの学問も非常に専門化して、与えられたフレームワークの中で業績を上げていく。そのフレームワーク自体、あるいは概念自体を広げたり変えるということにコミットしたくないという人が非常に増えているんですよね。若い人は優秀であればあるほど、その狭い分野で早く認められたいという気持ちは強くなるものです。

そういう意味ではこの日文研は、これは雑談、雑学、耳学問というふうに呼んでもいいんですが、違う分野の人と交流することでいろいろヒントが得られる。各々の学問分野では関心が狭くなり、専門化が進む方へと振り子が振り始めているとは感じるんです。やっぱり他分野の研究者と話ができる、そういう意味では魅力のある、将来性の大きい組織だというふうに私は感じています。

その二点、ちょっと補足しました。

瀧井　どうもありがとうございました。

予定の時間をオーバーしてしまって、この後に報道懇談会も控えていたのに無理を言ってしまいました。司会の不手際で、もっといろんなお話が引き出せたかもしれないですけれども、しかし大変おもしろいエピソードやお話を聞くことができました。ご登場願った先生、本当にありがとうございました。

では、きょうの第一回目の二五年史の座談会はこれでおしまいにいたします。来月も第二弾を企画しておりますので、また皆さん、アナウンスメントにご注意ください。よろしくお願いします。どうもありがとうございました。

パネリスト

伊東貴之（国際日本文化研究センター教授）
井上章一（国際日本文化研究センター教授）
牛村圭（国際日本文化研究センター教授）
榎本渉（国際日本文化研究センター准教授）
小松和彦（国際日本文化研究センター教授）
白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）
鈴木貞美（国際日本文化研究センター教授）

司会

瀧井一博（国際日本文化研究センター准教授）

フロアーからの発言者

ローマン・ローゼンバウム（シドニー大学名誉アソシエイト／国際日本文化研究センター外国人研究員）

講評

猪木武徳（国際日本文化研究センター所長）

共同研究をめぐって―今日までそして明日から

二〇一一年三月一七日

パネリスト
稲賀　繁美
井上　章一
笠谷和比古
鈴木　貞美
戸部　良一
早川　聞多
マルクス・リュッターマン

司会
倉本　一宏

倉本　二回目の座談会は「共同研究をめぐって―今日までそして明日から」でございます。

私のほうには、これまですべての共同研究の記録と原稿を少しいただいております。特に始まった頃の共同研究についてご存じない方も多いと思いますし、私もその頃まだ学生でしたので、どんな感じだったのかなというので見てみました。

一九八七年に創設されまして、この原稿によりますと、その頃早々五班のプロジェクトが始

動したとあります。調べてみますと、その五班というのは、まず九月に「日本文学と『私』」、これは代表者が中西先生で、幹事が上垣外助教授。十一月に二ヶ月遅れまして「世界における日本研究の知識社会学的研究」、代表者が梅原先生で、幹事が園田助教授。同じ十一月に「日本文化の基本構造とその自然的背景」、代表者が埴原先生で、幹事が白幡助教授ということです。

年が変わって八八年になりまして、一月に「『場』の日本文化」、代表者が村井康彦先生で、幹事が井上先生。同じ一月に「江戸時代の芸術における外国文化（中国を中心として）の受容と変容」、これは代表者がドナルド・キーン先生、杉本先生で、早川先生が幹事ということです。

それぞれ最初の中西さんのものから、小松、早川、光田先生が班員。梅原さんのところには、井上、笠谷、白幡、鈴木、早川、安田。安田先生も助教授と書いてあります。埴原先生のところは、鈴木、早川。村井先生のところは、笠谷、白幡、早川。キーン先生のところは、白幡、鈴木ということでございます。

これを見ますと、始まったのは九月一日。洛西ニュータウン内センタービル五階の仮住まい事務所。どこにあるのか、私は全然わからないのですが、そこで行われたということでございます。

その他、共同研究の理念がいっぱい書いてありますが、この原稿によりますと、第一期と第二期に分けてありまして、第一期は一九八七～一九九六の一〇年間、この時期は日本文化研究のスターが集結している。スターによって行われたのが一〇年間ということです。しかも最初の一〇年間に関しましてはものすごく褒めていまして、「日本文化を真正面に見せたスケール

の大きな正統派モデル」とか、「大きな意気込みが感じられた」とか、「ものすごく成果が上がった」とあります。

それでは、特に最近の先生方、初期の頃の共同研究はどうやって始まったのか、どういう状況だったのかという知識があまりないと思いますので、今、前に並んでいらっしゃる先生方の中で、初期にご参加されました鈴木先生とか、笠谷先生とか、井上先生、早川先生など順番不同でございますが、まずは昔の話を思い出して、一言ずつお願いしたいと思います。

じゃあ、鈴木先生から。一番最初の九月一日の幹事です。

白幡　一番最初にやったのは、たぶん、井上さんや。

倉本　いやいや、初期の五本で幹事をやったのは、十一月スタートが白幡先生で、一月スタートが井上先生です。

白幡　一番早いのは、幹事が上垣外さん。

倉本　そうです。その次が白幡先生。

白幡　ざっとだけ言います。中西先生の「日本文学と『私』」でしたか、それはもう早くから、準備室の段階からやるということが決まっていて、そして上垣外さんが準備室にいたものですから、それで幹事役に。だけど、研究会のアイデアはきっと中西先生が中心で、たぶん上垣外さんのほうが幹事役を申し出たんじゃないかと思うんです。

それから、私がやったのは十一月からということですが、埴原先生は最初の調整主幹で、そのときの調整主幹は一人でした。で、埴原先生は日本人はどこから来たかという研究をされていまして、梅原先生がそのテーマに強い関心を持っていて、埴原先生のところに自然人類学の最新の成果はどうなっているかということを聞きに行かれたんです。埴原先生の方がさらに日

本人の起源論を深めて考えたいと思っていたか、あるいは梅原さんの質問がなかなか重たいものだったのか、それに答えるために「そうしたら、君、来てくれ」ということで、梅原説によれば、埴原先生に「ぜひ、新設の研究所に来てくれ」ということで、そのテーマも含めて呼ばれたということです。

私が幹事になったのは、そのとき実は私と井上さんは、これでも自然系ということに、自然・人文・社会の中の自然系ということになっていまして、日文研は人文学だけの研究所ではない、自然系のスタッフもおるというわけで私が埴原先生の共同研究会の幹事をやることになりました。メンバーを決めたのは、当然埴原先生の方で、幹事の私は会のお膳立てをやりました。そして、安田さんは、創設二年目に来られたのかな。

鈴木　そうです。

白幡　その後に交代したんです。

倉本　わかりました。

白幡　その次は、だから、一つの研究会の幹事をずっと最後までやられたのは井上さんじゃないかな。翌年、村井先生の研究会。

倉本　そうですね。それは翌年一月スタートですね。

白幡　その当時、我々の発想としては、教授が主宰し助教授が幹事になる、そして異分野で組む。まあ、絶対に異分野だけというわけでもないけれど、組み合わせの妙に期待する。妙というのはいろんな意味がありますから。たえなる場合もあるし、みょうな場合もあるし。そういう感じで、助教授の仲間うちでこれは譲り合ったというか、押し付け合ったのか、忘れましたけれども、それぞれ幹事を一つはやろうということで分担してやったような気がします。

後は井上さんに話を聞いてもらいましょう。

倉本　その前に、九月にスタートした中西先生の研究会に班員として出られていらっしゃったのが、大阪大学助教授の小松先生と、今いらっしゃる方は本センター助教授の早川先生と、武庫川女子大学講師の光田先生なんですが、その頃の話、じゃあ、早川先生、思い出していただいて。中西班です。

早川　そのころは今言われた五本ですから、助教授はほとんどすべてに顔を出していたように思います。まさに学際的と言ったら変ですけれども、幹事でなくても多くの所員が顔を出していました。

中西先生のところは、もうそれこそお歴々が毎回のように見えて、お話が伺えるので、そういう雰囲気がはじめてだった僕なんかは、ほんとにそれはもう刺激的だったですけれども。

中西先生が非常に主導的に進めておられて、最後の成果のところまでつながっていったと思います。

倉本　発表されたのは覚えていますか。

早川　覚えてないですよ。何を話したかわからない。

倉本　一九八九年四月三日に「絵画表現と私」というのを。

早川　ただ一つよく覚えていることは、実は各共同研究が終わった後の夕方からの懇親会です。僕はそっちの方に力をそそいで、毎回シーズンに合わせて、またそれぞれの先生の趣向とかに合わせて、ホタルのシーズンだったら清滝へ行こうとか、アユの時期には清滝の落合に食べに行くとか、モミジのときにはそれこそ小倉山、藤原定家の庵跡、厭離庵を貸し切ろうとか、そういうことをやるのが僕は楽しかった思い出が多いんですけれども。そのときに、飲み

ながらいろんな話を聞くことが多かった思い出は強いですけれどもね。

倉本　確かに早川先生は五つの研究会すべてに関与されていまして、白幡先生も四つに関与されておられます。井上先生は村井先生の幹事と梅原先生の班員ということですが、その頃のお話を伺えますでしょうか。

井上　さっき白幡さんがおっしゃったことやけれども、日文研はいろんな学問の分野を超えるということを売り物にしていました。私は工学部を出ていたし、白幡さんは農学部を出ていました。それで、理科系の若い人がいるというのは一つの売り物になったのです。売り物に、実態としてなったかどうかはともかく。

倉本　理科系の若い人というのは、お二人。

井上　そうです。今や理系としては、見るかげもないほど落ちぶれていると思いますが、私たち二人は理科系をここでは代表していたのです。信じられへんね。思えば遠くへ来たもんや。

私は村井康彦先生の共同研究班の幹事になりました。残念ながら、その共同研究班ではきちんとした報告書が出せませんでした。幹事の手際も悪かったんだと思いますが、みんなの興味があまりにばらばらだったこともあるような気がします。

私はそれ以前から京都大学人文科学研究所で共同研究という仕組みには慣れていました。あそこは旅費は出せないのですが、ほぼ毎週、あるいは期間を空く班でも二週間おきぐらいにやっていました。ここは二ヶ月おきぐらいですね、旅費を出すという都合もありますから。その意味で、一つ一つの班の凝集力は人文研の共同研究班のほうが強かったと思います。

とりわけ、今、振り返って、桑原武夫が主催した――前も桑原さんの話しましたね、ここで。

倉本　今日もどうぞ、ひとつ。

井上　私の中で桑原武夫が大きいテーマになっているような気がします。

桑原さんの共同研究には、共同執筆論文がけっこうありました。例えば鶴見俊輔と多田道太郎の共同執筆論文とか、山田稔と多田道太郎の共同執筆論文などです。あるいは中井正一の『委員会の論理』めいたこころざしもあったのかなあ。とにかく桑原さんの圧倒的な指導力で「君はこれを書きたまえ。このテーマについては君と君が共同で書きたまえ」というような、そういうタイプの強い凝集性のある研究会だったと思います。

桑原さんは民博ができたときに、民博に招かれて演説をしはりました。「私は共同研究の主宰者になるときは、あえてスターリンになった。その覚悟がなければ共同研究などはできません」と言い切らはりました。なぜ桑原武夫にそれが可能やったかについては、私にいろんな考えがあります。でも、きょうはその場ではないと思いますので控えます。ただ、本当にあの人はすごい指導者だったんだなと思います。

日文研でそういうタイプの主宰者はいなかったと思います。私が最初に幹事になったところも、みんな発表はばらばらでしたね。村井さんは、班員にテーマをあたえるような班長じゃあなかった。でも、おかげで私はおもしろい勉強ができました。例えばあるテーマが議題になったとします。人類学の方がある方向の議論をします。そうすると、地理学の方が「いや、地理学ではそんなふうに考えません」と答える。考古の人は「いや、考古ではそんなふうに受け取りません」と言う。私は、埴原さんの共同研究会も含めてですが、こんな印象を持ちました。真理とされることは学界によって違うのだと。じゃあ、そのこと自体が研究テーマになるなあと。学界によって真理がねじ曲げられる、その曲げ具合いを研究するという研究が可能になる

だろうというふうに、いずれそういう研究会を自分で持ちたいと思っていますが、そのことを教えてくれたのは初期のやや拡散的な共同研究だったと思います。その意味では感謝もしていますね。

ついでに、これも印象深かったんだけど、村井先生の共同研究班でアジールをめぐるシンポジウムを行ったことがあります。そして当時、一番ときめいていらっしゃった頃の網野善彦さんをお招きしたことがありました。

倉本　それは八〇何年ですか。

井上　何年かなあ。

研究会自体は滞りなくというか、滞りなく終わるものなんですが、終わりました。あとの懇親会で私は村井康彦さんと網野善彦さんが語り合われているのを横で聞いていました。網野さんが、ややからかいぎみに「村井さんはやっぱり京都のお公家さんだね」というふうに、言わはるんですよ。それに対して、村井さんが「関東の人にはわかってもらえないな」とやりかえすわけです。このやりとりを見て、私は思いました。学問分野によって真理が違うだけではない。出身大学によっても真理は違うんだ、と。このことをリアリティーをもって教わったのは、村井さんのあの研究会だったと思います。いずれこのことも共同研究のテーマにしてみたいと思っています。

やや拡散的だったという印象は残るのですが、それを私は悪く受け取っていません。自分の肥やしになっていると思っております。

倉本　ありがとうございました。

最初の中西先生の研究会には、当時、大阪大学助教授でした小松先生が参加されています

が、その当時は外部からごらんになって、共同研究にどういう感じをお持ちだったのでしょうか。

小松　私は、着任まで日文研の先生方とはほとんど会ったことがないんですね。おそらく井上さんとも日文研の共同研究会ができるまで、ほとんどお付き合いがなかったんですね。ただ、梅原さんとはこの研究所ができる前に二度ほど、ちょっとお会いしたことがありました。たとえば鬼をテーマにしたテレビ番組で一緒になったことがありました。

研究所ができて、そのときに中西先生から誘われて、「日本文学と『私』」というのがあるので、おまえも入れと言われて入りました。あの頃の中西先生は、非常に意欲的だったと思うんですね。共同研究会のメンバーもたくさんいたんじゃないかと思います。

ただし、私がそれほど熱心な参加者だったとは記憶しておりません。私が何を発表したかも記憶していません。ただ、一度、その後に「日本の想像力」という後続の共同研究会を中西さんが組織していて、それにも入れてもらったんですが、順番が来たからしゃべれと言われてしゃべったうちの一つが、たしか宮田登批判を延々とやっていたのでした。よく覚えているんですけれども、そのときに隣にいたのが京大のフランス文学の稲垣さんで、「あなた、変な人ですね。人の批判を共同研究のテーマにするというのは」と言って、随分不思議がられた記憶があります。それほど好き勝手なことを言える会だったような気がいたします。

それともう一つは、井上さんも言っていたように、いろんな人と出会う機会をつくってもらったということですね。その頃の光田さんは武庫川女子大にいて、大変にやる気満々の、何というんでしょうか、いろんなことを僕にも教えてくれましたし、今こんなことをやっているんですとか、書いたものを送ってもらったりして、将来中世文学研究の中心的な人物になるん

だなあという印象を持っておりました。ですから、僕よりも先に日文研に着任したのを見て、当然だよなという印象を持っております。

上垣外さんも印象に残った方で、その頃知り合った何人かの人たちとは、学歴だとか、あるいは東や西やとか、あまり気にせずにいろんな人と興味のある話を話し合っていました。それから、早川さんと同じで、終わった後の飲み会が非常に楽しくて、今回はどこに行くんだろう、次回はどこで食べられるんだろうとか、そういうふうなことで京都の食べ歩き的な会でもあったというふうに思っております。洛西のセンタービルの何階かで研究会をやっていたんですけれども、その頃の印象としてはそのようなところしか覚えておりません。

実は私は日文研の客員助教授もやっているんですよね。誰も覚えていないんじゃないかな。半年だけやっております。というのは、その後、歴博の客員も頼まれ、それでどっちかを選ばなければいけないというので、こっちのほうをお断りして、向こうのほうの客員をすることにしたんです。そんなこともありまして、歴博と日文研とはどっちがおもしろいかなとか、あるいは民博と日文研の共同研究は、どちらが面白いかなといつも思っていました。

その中で私が判断したのは、日文研というものが、後発部隊だったということもあるのかもしれませんけれども、非常に多彩ないろんな人たちが、しかも私から見れば、既にマスコミや学界で活躍をしているような人たちがたくさん集まっていたということもあって、大変に魅力的だったなあというぐらいの印象です。

ただ、そんなに熱心な共同研究員ではなかったと思います。それは、ちょうどその頃から大学が再編の時期に入って、教養部をどういうふうに組み立て直すかとか、学内的には重点化とか、いろいろ本務校のほうが忙しくなったということも関係していることもあるかもしれません。

その頃の印象としては、私はあまり、ほんとにしゃべっていたのか、何回行ったのかも記憶にないぐらいです。

倉本　ありがとうございました。光田先生のお話が出ましたが、小松先生の最初の発表は一九八八年一一月一八日、「悪霊払いの儀礼、悪霊の物語」でして、奇しくもその日一緒に発表されたのが光田先生だったんですね。そのときの印象がかなり強かったんだろうと思います。

それでは、初期の頃の共同研究に多く参加しておられました笠谷先生に昔の話をお願いいたします。

笠谷　記憶が定かではないので。

倉本　梅原先生の班員と。

笠谷　何に入っていますかね。

倉本　梅原先生、村井先生、最初の頃。あと、濱口先生、飯田先生、山田慶兒先生、村上先生、速水先生と、いっぱい入っていらっしゃいます。

笠谷　入っていますね。最初、物珍しいので、とにもかくにも入りまして。私、一番近いのはやっぱり村井先生なので、行って、井上さんが幹事をやっていたけれども、確かにかなり変わった研究会でしたよ。幹事さんも相当変わった人で、美人論の人というのは聞いていましたが、美的価値とかいろんなものを数量化しなきゃいかんというんですね。これは私は非常にショックで、つまり美とか、それは質的な問題。すべての問題はお金であれ何であれ、数量化しなきゃいかんということをとうとうとやってはりまして、いや、これはすごい人がいるなと思って、えらい感心したものでしたね。村井先生はお殿様然として「よきにはからえ」という

感じで。それと奇妙な幹事さんの何とも言えないほんわかした研究会でした。

私は歴史学出身でして、大学の歴史学というのははっきり言って非常に固いわけですよ。余計なことが言えない。手を出さないといいますか、危ない話は大体手を出さない。つまり要するに、史料実証主義ですからね。確実に根拠のある話以外は一切しないというのが実証主義歴史学の根本原則ですが、ここへ来ますとそういう話は言っていても、そもそも世界が違うという感じで。ただ、混乱させられるといいますか、逆に言うと、だいぶ違う、けったいな世界だなと思いながら、ならばというわけで、とにかくあれもこれも、とにかくメニューを全部食べてやれと。日文研にそろっている、出ているメニューは片っ端から食べてやれというわけで、いろんなやつに出まして。それはやっぱり我々にとっての血となり肉となり、本来の歴史学界だけでは済まない広がりというものをもたらしてくれたというふうに思います。

反面、私の向かいは逆に、史料実証主義という観点からすると、ややちょっと空中戦的な議論があるのではないかなというところもあって、それはこちらとしてのまたプレシップルを出させてもらいました。私としましては、得るところは甚だ大きかったですね。

私の中で、その研究の中でも一つ印象に残っているのは村上泰亮先生ですね。この村上先生、経済学者ですけれども、その議論はほとんど哲学なんですね。経済学の研究会のはずなのに現象学的であるし、超越論的何とかという議論をやっていましたね。そもそも、それを言われるんですけど、覚えてはります？

そのとき私は実は、猪木所長と一緒なんですが、所長は私が同じ班員にいるということを全然覚えてくれていないんですよ。私はちゃんと覚えているんですね。高名な猪木武徳先生だと思っていた。私がいることは「えっ、いましたか」というひどい話で、全然眼中になかったん

ですが。

私の立場から言いますと、村上先生というと『文明としてのイエ社会』という名著があるのです。これは佐藤誠三郎さん、公文俊平さん、村上泰亮さんの三教授による歴史的名著でありますが。これが実に日本の家社会論というのを中世の在地領主制、そこから説き起こして延々と論じる、それこそ非常に壮大な枠組みです。単に日本史だけではなくて世界史の観点から、そして日本の中世在地領主制の中で家というものができて、それがどのように展開して、そして今日のいわゆる日本型組織、日本型経営論にどういうふうに展開しているかということを論じた壮大な本であって、私も実はここへ来る前にその本を読んで、えらい感化を受けまして。そうしたら、この日文研の中に、その中の一人の村上先生がおられるというわけだから、これはもう喜び勇んで行きました。

光栄にも、村上先生は実は私の『主君「押込」の構造』という、かなり発想法として似た議論ですが、そのことを実は知ってくださっていまして、私としては非常に感激をしまして、それで村上先生のところの研究会に入れさせていただきましたけれども、先ほど言ったとおり、非常に経済学的であるよりもむしろ哲学的、現象論的世界というわけで、いや、すごい議論をするもんだなというので、その思索の深さと世界観の大きさ、見方の広さといいましょうか、そういうことを広く感化させられたことを覚えています。

そして、私が後から幹事を務めることになりますが、山田慶兒先生の「東アジアの本草と博物学の世界」、これは後から話したほうがいいのでしょうか。

倉本　いや、どうぞ、続けてください。

笠谷　それは私が本格的に幹事を始める分だけれども、それ以前にいろんなメニューを見て、

大いに感化され刺激され、そして、今までの歴史学界だけの議論ではここでは通用せんのだと。要するに、別の形で理論武装してやらなければ、ある意味、鳴門の渦潮に巻き込まれてしまうのではないかという思いを深くしたというのが、当初来たときの印象と感想であったということにしましょうか。

私ちょっと先に、「東アジアの本草と博物学の世界」のほうが最初のやつなので、そっちをお話ししましょうか。

私が最初に幹事を本格的に務めるようになったのは山田慶兒先生の「東アジアの本草と博物学の世界」です。歴史学の私がなぜその世界になるかということは、最初わからなかったけど、それは白幡さんが説明をしてくれて、実は私は吉宗の享保改革をやっているのですが、吉宗の享保改革の中にその芽があるんです。私の論文にもなりますが、薬の国産化という問題から蘭学に展開するという吉宗の政策の中に大きな筋があって、その辺をやればいいんだと白幡さんから言われて、ああそうか、そういう観点でそれに取り組めばいいのかということがわかって、幹事を引き受けて、入りました。

ここもやっぱり多士済々といいますか、山田慶兒先生は非常に厳しい学者でありまして、この議論はその方面で非常にしっかりした、これはこれでまた非常に別のタイプの実証主義的な研究がそろっておりまして、例えば薬学についての専門家であるとか、動物学についての専門家であるとか、博物学についての専門家であるとか、蘭学についての、それぞれの分野の碩学の方々のお話を伺いまして、私としても本来の私自身がやっている享保改革の吉宗の研究を広げられる非常によい肥やしといいますか、土壌というものになりました。これは、研究代表者もしっかりした人ですし、幹事も割と厳格でありますので、研究成果はちゃんと出しまし

た。

一言、これはオフレコですが、村井先生は非常によい先生で、私も大いに尊敬しているのですが、最大の問題は何かというたら、原稿を出してくれんという問題がありました。やることはやるんですけど、まとまらんのですよ。これは悪口だけではなくて、公でありますので、オフレコでありながら言いたいのですが、村井先生の還暦か七〇歳かのときにパーティーがありまして、そのときに、あの先生はたくさんの本を書いておられますから、いろんな出版社の方がスピーチに立つのですが、次から次に出てくるのは、村井先生の原稿のためにどれだけひどい目に遭ったかいという話のオンパレードで、その会は村井康彦糾弾集会と言うべき会になりました。

もう一つ、ちょっとおもしろいエピソード。

倉本　一応、今日は二五年史の座談会ですので。

笠谷　ついでに。この際ちょっと言いたいことがあるので。これは大事な話。先ほど出ました網野善彦先生、アジールの研究があったんですよ。実は私が網野先生に渡りをつけまして、あれだけ高名でお忙しい人ですが、ひとつここはご出馬いただけませんでしょうかといってお願いしました。アジールの研究会はそれなりに井上さんが中心になって、よい研究会ができました。

さてこれをまとめるという段になったんですよ。まとめるという段になって、まとめは村井問題が発生して、ついに村井先生は出してくれなかった。ところが、実は網野先生は出してくれたんですよ。網野先生が出し、ほかの人も八割方出たんだけれども、遂に非常に重要な研究家がですね。

井上　一言だけ。私はまだ若くて献身的やったので、あのシンポジウムを全部テープから原稿用紙に起こしたんですよ。にもかかわらず、班長の村井康彦は書かなかったんです。

倉本　出なかったんですか。

井上　出なかったです。

笠谷　出なかった。

倉本　幻の。

井上　幻です。今、シンポジウムのやりとりもふくめあの原稿、どこへやったんか、わかりません。

笠谷　あの原稿、どこ行ったんやろうね。もう一回ちょっとあれを掘り起こさないといかん。これはほんと幻の原稿。

もう一つ、ちょっとあと一言ですけど。結局、網野先生はあの忙しいのに出してくれたんですよ、律儀に。あの原稿、どこ行ったんやろうね。それが不思議なんだけど。

ともかく、最終的に出そうな見込みがなくなった。ところが、僕はとあるところで網野先生とまたばったり学会か何かで、パーティーか何かで会う羽目になって、まさに会わす顔がないわけですよ。それで、こちらのほうとしても、ううんという感じで、どう言い訳していいのかと、網野先生に向かったんやけど、幸か不幸か、あちらはむちゃくちゃお忙しい方なので、そういう研究会とか原稿を出したということを全部もう既に、要するに過去の彼方に流されていましたので、私は命拾いをしたという、ちょっとオフレコの話をちょっと恨み節を込めて申し上げました。

倉本　わかりました。

笠谷　山田先生は非常に厳格な方で、しっかりやっておられましたので。

倉本　どうも長い間ありがとうございました。

笠谷　村井先生、ごめんなさいね。

倉本　じゃあ、初期の頃から参加されております鈴木先生にお願いいたします。

鈴木　皆さんおっしゃったとおりで、初期というか、エミナースの上でやった頃は研究室もなく、みんな机を並べて、顔突き合わせて、ぶつかったりしながら、ぶつかったりって本当に体がぶつかったりしながらやっていた時期が二〜三年あったわけですよね。

　ほんとに熱気に満ちていました。皆さんおっしゃったとおりですが、言われていないことを言うと、助教授同士がものすごく議論をしました。私が覚えているのは、飲み会も含めてしょっちゅう、お互いの家にも行ったりとか、祇園にも行ったりとか、そういうのが一つ。教授の方々も同人雑誌を出したいとか、みんなで。そのメンバーで同人雑誌を出すとどこかが出版を引き受けてくれるところがあるでしょうとか、埴原先生はローマクラブみたいなやつを日本でつくれないか、どうだという話を持ちかけられたりとかしました。

　それから、よく覚えているのは、山折さんと中西さんと一緒に熊野に行ったのがありましたね。アイヌのことを梅原さんがやり、そういうことの一連の流れの中で熊野にみんなで行って、二、三泊しましたかね。

早川　二泊したね。

鈴木　二泊三日ぐらいで行って。

早川　十津川村あたりで泊まった。

鈴木　事務の方も行ったり、私はかみさんと一緒に行った。

笠谷　北海道も行った。

鈴木　北海道、私は行っていないものですから。

早川　信州も行った。

鈴木　そういう旅行みたいなことをかなりやって、そういう意味で求心力というか、全員参加ではなく、有志だけですけれども、その中でいろんな議論をしてきた。私は正直言って共同研究会の幹事も幾つもやっていますけれども、共同研究会よりもそっちのほうが楽しかったかもしれない。共同研究会の方は、立派な先生方がいっぱい、若手も含めてとっかえひっかえいらっしゃるわけですよ。そして、みんな好きな話だけして帰っていくわけですね。それを聞くのはおもしろいですよ。しかし、だからどうなんだという、つまり、それが共同研究と言えるのかなあという大きな疑問を私は持っていたんですね。そういうことも助教授で話し合っていましたね。あるいは、最初から講座、岩波講座何とかみたいなやつをここで仕掛けて、本屋さんとタイアップしてやれば、それはそれでできるね、でも、それでは面白くないね、とか、そういういろんな議論を。私は柏岡さんなんかとよくやっていたり、上垣外さんとか、そういう議論をよくやっていました。

皆さん思い出に花を咲かせているんですが、私もその手の思い出がたくさんあるんですけど、私自身が感じていたのは、私がここに就職していなかったら、ここの共同研究会には東京から来ないなと思っていたのです。交通費が出ても、話をしてそれで原稿をとられるだけ、搾取型だなというふうに思っていました。そういう意見は、例えばやめちゃったけど落合さんなんかもそう思っていたと思います。もちろん京大人文研は電車賃も出ませんでしたから、それに比べればはるかに我々は恵まれた条件だったわけだけれども、さて、参加者の労力に対し

て、こちらが何をお返しできるかということですよね、研究会の中で。私はそういうことを考えていったわけです。

本当にいろんな個性豊かな先生方とぶつかったり、助教授同士でもけんかしたりとか、そんなことはしょっちゅうやっていましたけれども、濃密なある種の空間があって、この建物に移ってからもあったと思います。非常に皆さん、意欲も満ちていたけど、どこへ行くのかわからない。笠谷さんが言ったとおりのようなことがたくさんあったわけですよね。成果がまとまらない。それでいいのかなと。今だったら、ちょっと許されないんじゃないかな、ああいう牧歌的なあり方というのは。

共同研究会の幹事をやり、総研大のほうも始まって、尾本先生の下で進化論受容のこととかをやり始めたりした。それには総研大の高畑――今の学長とか、それから、石牟礼道子さんなんかを呼んで、熊本大学の原田先生が水俣の取り組みは最初がうまくいかなかったという話をなさいました。それを聴いていて尾本先生がおいおい泣き出して、というようなこともありました。原子力資料情報室の高木仁三郎さんをお招きしたときには、村上陽一郎さんと同期なんですけれども、おふたりが卒業以来初めて顔をあわせた。アカデミズムの外対内という微妙なやりとりも聴けました。印象に残る研究会がたくさんありました。そういう場所を提供する、別の言いかたをすれば、しかける楽しみもありますね。

ちょっと急ぎますと、井上さんから、桑原さんはスターリン型だったという、ああやらなきゃ成果がまとまらないよという話も聞いていた。大体、日文研のはサロン型で、いろんな人たちが集まってきて、笠谷さんの言葉で言うと空中戦、かみ合わない話をしている。だけど、それはそれでいろいろ刺戟になっていいということなんだと思います。

それから講座型というのも申し上げましたけど、私は実は編集の仕事なんかをその前にしていたので、桑原さん世代の仕事を引き受けていた河出書房の人と知りあっていました。あそこから『人類の歴史』というのが出始めたときで、今から見たら大変な仕事ですよね。生活史のほうに歴史学がシフトしていく時期にあたっていて、その担当の編集者、今、名前は出しませんけども、が、こういうんです。「鈴木君、京大人文研、おもしろい。だけどあれは成果まとまらないよ。つまり、一人一人は大変刺戟をヤリトリして、それぞれ個人のいい本は出せるけど。それを考えないと、あなた、日文研にいても、どうやって成果を出すかと、ちゃんと考えなさい。一番の問題はタームなんだ。同じタームで中身が食い違っているのに平気でやっている」ということを言われた。私は、そのことを一〇年間ぐらい考えていたんですね。そういう問題が一つあって、ターミノロジーより、概念の問題を正面から押し出してみようとなったのです。

それから、学際的、国際的な研究をまとまりのあるものにするにはどうしたらいいかというので、『太陽』という雑誌、メディアスタディーズが盛る機運をみて、しかし、いわゆるメディアスタディーのやり方ではなくて、コンテンツを問題にしていく方法を考えた。『太陽』は総合雑誌ですから、時期は限られている。明治の終わりから、日清戦争から日露戦争過ぎ、明治の終りぐらいまでが最盛期。それで、これを共通のツールにしてやればまとまるだろうと、そんなことを考えた。それからさらに出版とジャンルの問題とか、そういう方へ移っていけないかと考えたんですね。

それとは別に、東京で、日文研に通いながらですけれども、大正生命主義の研究会をプライベートでやっていたんですね。共同研究が割と私は好きなのかもしれません。自分でやるよ

り、みんなを集めて、何か成果を出していくというほうがおもしろい。格好よく言えば、その中で自分が変われるということなんですけれども。

ただ、一つ困るのは、プライベートに集まって共同研究会をやって成果を出すのは、私が編集者になって、誰がなってもいいんだけども、エディターとして、こうしてくださいと書き直しもお願いできる。こういう編集方針ですからこうしますとできる。それに比べて日文研で成果報告を出すときに、どこまでやれるか。公に研究者を集め、公に出す場合、班員の間で明らかに食い違っている認識がある場合、どうするか。食い違いは食い違いではっきりさせればいいという考えもあるけれども、そもそも根本的に対立するようなこともある。公の場所で公費を使ってやっているわけですから、あなたの原稿引っ込めなさいというわけにはいかないですし、ここを書き直しなさいということもなかなかできない。そこのところで実は非常に悩んだことが何回かあります。

共同研究会の持ち方、発表の仕方、そういうことはさまざまに経験して、いろんな問題を抱えて、それを蓄積していくしかないと思いますし、それを日文研がやるべきことだと思いますね。大学でもいろんなプロジェクトでやっていますが、大学共同利用機関がそういうノウハウを蓄積して、あとの人に参考になるようなことも出していければいいんじゃないかなというふうに思います。とりあえずそのぐらいにしておいて、後でまた言いたいことは言います。

倉本　どうもありがとうございました。

それでは次に、年数で言いますと、稲賀先生は三重大時代から参加されていると思われますが、だんだん最近に下ってきた話などもお願いいたします。

稲賀　最初に、第一期が八七年から九六年というお話がありましたが、私は第一期を知らない

人間です。神代というか神話時代は知らず、自分が生きている「歴史」時代はもうあまりおもしろくない、というのが世の常でしょう。あまり古い話はしたくないのですが、前任校は倉本さんのご出身の三重県津市の三重大学でした。人文学部という新設学部の文化学科というというのは、きわめておもしろいところで、完全に地域研究（エリアスタディーズ）で編成されており、日本、アジア、南北を含めたアメリカ、それにヨーロッパ地中海という四つのコースがあり、領域横断が国是とされ、地理学や人類学には愉快な同僚も多く、古くさい講座制の縦割り構造が分断されていた。ここも残念ながら神代の創生期ではない歴史時代からしか経験がありませんが、これが出来上がったのには、背後に藤波という政治家の尽力があった。思えば、在任中に突然ひどく立派な講堂が建ちました。司馬遼太郎が生前最後の公開講演をした場所ですが、当時、文部省の予算はマイナスシーリングで、新しいものは作れない規則。ところがふたつだけ例外があった。ひとつがこの三重大学の講堂、そしてもうひとつは、「できるはずではなかった」日文研の、講堂です。世界ひろしといえども、といって自慢しますが、そのふたつを渡り歩いてきたのは、いまのところ地球上に私ひとりだけです。ほかに自慢できるネタもありませんが、本日は共同研究が話題で、私、過去の共同研究について語る資格はないものの、三重大人文学部の地域研究の雰囲気は気に入っていました。現状の問題点を指摘するのは、まだ早すぎますか？

倉本　どうぞ。

稲賀　日文研に最初にやってきた九七年に、鈴木貞美先生の班にいれていただき、小僧のお遣いもできなかったのですが、鈴木メソッドがどうした理念に基づいて運転されてきたかは、只今お話がありました。私はその方法を学び損ねた人間ですが、まず共同研究とは何なのか。

人々が集って研究会をやっているわけですが、実際には研究発表会をやっているだけであって、共同で研究をしているわけではない。論文は各人がばらばらに個人名で書いてしまう。ときによってはそれらの論文のあいだで見解や事実認識が真っ向から対立したまま放置されたりする。これでは学術刊行物として責任放棄だという意見もありましょうが、むしろ見解が水と油で両立しないという論争の場を設けて、そうした対立や矛盾を編者として可視化することにこそ、共同利用研のひとつの原初的な存在意義があるのではないか。

先行する共同利用研の実態も、耳にすると、たしかに最初は大変に熱気があるのだが、ある年数を重ねると、どうしても凝集力が落ちてしまう、という。さらに所内で何をやってみても、みんなが集うというサロン的な雰囲気がだんだんに失われていってしまう。二五周年を迎えて、我々も今、こうした老化現象をいかに乗り越えるかを考える潮時にある。

さらに研究という面に注目すると、共同研究と銘打ちながら、研究のほうは、費用も各自で工面せねばならず、贅沢はいえませんが、それぞれの参加者が個別に科学研究費補助金を獲得して、その成果を発表会の席に持ち寄る、という形が一般となっている。さきほど搾取型という話がでましたが、成果を持ち寄ってくれと頼むために旅費だけは弾むが、成果は共同利用研の達成として吸い上げる、というやり方でよいのか、という問題がある。

加えてこれは搾取の別の面ですが、三つめとして、すでに完成品の研究者は集うけれど、それなら次の世代をどうやって作るか、という問題が頭をもたげてくる。もちろん総合研究大学院大学が併設されており、私個人としては、研究の能力よりは、まだしも教育のほうが多少はましではないかと思いつつも、この年齢ではもう子孫造りは手遅れという自己認識ですが、そもそも後継者養成という役割は、共同利用研には与えられていない。次の世代への継承発展の

機能を最初から十全には与えられていない組織が、いったいどうやって生き残ってゆくのか、というと、これは寄生虫か宿り木みたいなもので、どこかから後釜を搾取してきて、その栄養を吸い取るしか、ほかに生き延びる術がない。

さらに四つめとして話題を転ずると、日文研は教授数わずか一五名であり、つまりスタッフ・メンバーだけでは必要な機能を維持できない機関です。一番大切な助っ人となるのは、海外からいらっしゃる客員研究員の方たちで、これも一五名いらっしゃる。初期のころには日本人も含めて、家族ぐるみ、夫婦、子どもたちをも含めた近所付き合いが、ある程度はできていた。少なくとも、亭主だけが仕事のうえの社交をして、奥方たちはそこには関与しない、という日本的イエ社会とはいささか違う方向を目指していたように思います。

ところがこれも年数がたってくると、次世代の構成員たちの奥さんたちは、なんとなく亭主の職場には顔など出しにくいという雰囲気になってしまって、とりわけ事務の方たちにそこまでのコミットはとても要求できないご時世となってきた。となると研究者とその奥さんたちだけがちらほら来所する、というのもなにか釣合がとれなく、遠慮がちになってしまい、客員の先生がたとも家族ぐるみのつきあいは敬遠されるようになってくる。客員研究者のほうでも、夕方の五時までは日本側と付き合っているけれど、それから後は切り離されてしまう。初期の牧歌的な有閑は消滅して、誰も彼も多忙を託ち、業績主義のセチ辛い世の中になってしまったことも、これに拍車を掛けているように思われます。

早川先生もおっしゃったように、最初のころは、それこそ裏研究会こそが本物だった。吉田光邦先生の追悼集など繙いても、人文研でもそうした逸話には事欠かない。だから共同研究会がいかに運営されてきたのか、についての歴史的反省をする研究会を共同でやらねばならな

い、と思っていますが、実は真夜中を越えたあたりからが本番だった、というような逸話は、それこそ神代の話ですから、本当かどうかは知りませんけれども、それが新しい研究を生み出す力だったとすれば、そうした一種の創生期の、それこそ坩堝のような雰囲気というのは、残念ながら我々は、もはや二度と経験できない。アウトプットがきちんと生産できるような、いわば世間的な義務が果たせるように制度が整えば整うほど、どうしても初期の何だかよくわからない、どこにゆくのかも分からないけれど、とんでもないものができてしまいそう、という環境は、残念ながら急速に失われつつある。

そうした状況のなかで、共同研究をもう一度作り直すにはどうすればよいか。それを考えなければならないのが、この場なのだと思います。すでに時間超過で、自分のことはあまり語りたくないのですが、ひとつだけ申しますと、私は日本の学会というものにあまりきちんと属してきた人間ではありません。博士課程の初期から一〇年ほど、北米圏ではなく、欧州を中心に非英語圏の外国をほっつき歩いて、一九八八年に日本に戻ってくると、コマバ西部劇の真っ最中でした。つまり西部さんという人を中心にして、中澤さんという人類学者を社会科学の教室に任用しようとして、それが自然科学系の先生達の反対にあって、大騒ぎに発展した。そのときに東京大学の駒場を辞めてしまったおひとりの村上先生がこの日文研に招かれたわけですが、ご病気でまもなく亡くなられた。先ほど網野さんの話がでましたが、私が駒場で付き合っていたのは、網野ジュニアだった、というような関係です。

日本に戻ってきて一番つよく感じたのは、日本の学会というものが、ひどく内向きに閉じてしまっているという印象でした。仲間内のジャーゴンで身を固め、それが通じない外様を排除して、秘密結社のようなことをやっている。ジャパニーズ・スタディーズという言葉を使う場

合には、そこでは日本列島内部での学会の仕来りとは尺度がまったく違うところで日本を捉えている。そうした海外からの学者と、どのように付き合うか。国際的、学際的、総合的と言葉でいうのは簡単ですが、それが許容される空間をいかに創るか。

それともうひとつは、日本研究者ではないけれども、世界的な水準で発言をする学識経験者がいる。それらの知的指導者とどのように関係を繋いでゆくか、ということに関して、日本の学会は極めて脆弱である。お客さんとして呼んできて、ちやほやして、それでオシマイ。儀式は終わるのですが、きちんとした議論など、からっきし出来ていない。そうした欠点をなんとか克服するのも、日文研の役割のひとつであるはずだ。そのために私のような者でも何らかの役には立つのだろうか、と思って着任しましたが、一〇年勤めてみて、その点に関しては、さしたる貢献も出きて居らず、内心忸怩たるものがあります。

一旦このあたりで。

倉本　今後のことについては、またご発言いただきたいと思います。

それでは、最近研究会を始められたというお立場で、戸部先生、お願いできますか。

戸部　最近研究会を始めたというよりも、実は私ここに来たのは一昨年、二年前ですけれども、共同研究員としてはかなり前から入っておりまして、一九九〇年代の前半から実は来ているのです。その話を、むしろ外部から見た共同研究会ということでお話を申し上げたほうがいいかなと思うのですけれども、一言で申し上げますと楽しかったですね。

私が参加しましたのは木村汎先生がおやりになっていた「交渉行動様式の国際比較」という研究会でしょうか。その後に「危機管理と予防外交」というのがありました。それからちょっと間があきましたけれども、猪木さんがおやりになった、タイトルがえらく長いので忘れてし

まいましたけれども、「戦間期日本の社会集団の相互関係とネットワークについて」とかという研究会でした。

なぜ楽しかったんだろうというふうに今思い返しているんですけれども、一つは私の職場が防衛大学校というちょっと特殊なところでしたから、なかなか外の研究者との接点があまりなかったからだろうとは思います。ちょうど日文研の建物はできましたけれども、まだ講堂ができていない時代で、下から日文研のこの建物がすっかり見えて、いかにも学問の殿堂というところがよくわかったのと同時に、何でこんな不便なところにこんなものをつくったんだろうという意識があった時代でした。

私が所属していたのは国際政治学会という大きな学会でしたし、それから先ほどのテーマから申し上げて、もうおわかりのように、国際政治学会のメンバーが共同研究員の大半だったんですけれども、やはり学会は非常に大きな組織でして、同じ国際政治学をやっているとしても、理論をやっている人がいれば、あるいはアメリカのことをやっている、ソ連、ロシアのことをやっている、それから私のように戦前の日本の歴史のことをやっている、いろんな分野の人がいて、なかなか学会に行ったからといって接点はないんですけれども、それぞれ研究分野が少しずつ重なり合いながら違う人たちが共同研究会に入ってきて、それでいろいろ自分たちの関心のあるテーマを話してくださる、その成果を吟味することができるというのは非常に楽しかったという思いがあります。

先ほど懇親会の話もありましたが、その頃は日文研ハウスもありませんでしたので、日文研は河原町御池のロイヤルホテルをディスカウントで用意してくださいました。そうするとみんな大体、東京から来る者はあそこに泊まる。それから、帰りも大体新幹線で一緒に帰る。です

から、新幹線の中でもまだ議論が続いているというようなことがありましたので、そういう意味では外から来る者にとっては非常に魅力ある研究会、機会だったような気がいたします。

それは、一つは木村先生という非常にホスピタリティーの豊かな先生が主宰してくださったからだろうとは思います。懇親会はもちろん外でやったこともございますけれども、かなりの回数をご自分のマンションでおやりになりました。それで、奥様あるいは近くにいる共同研究員の奥様も来てくださって、手弁当のパーティーだったですから、どうやってお返しすればいいんだろうとみんなで悩みつつ、ワインを持ち寄ったり何かして、非常に楽しい研究会でした。時々はアトラクションがありまして、今度は春画のアトラクションがあるからと、それにひかれて行ったことがございます。すみません、早川さん、アトラクションと言いまして。

もう一つ、楽しかったというか、自分にとって有益でありましたのは、先ほどタームのことがありましたけれども、どうしても外に出ずに狭い分野で研究していると、自分の関心以外なかなか広がらないんですが、それが、日文研であるテーマが設定されて、それに何らかの形で関係するような研究者が集まると、自分の研究テーマや関心がやっぱり広がりますし、たぶん私も日文研の報告書で書いたような論文は、ここに加わらなければおそらくテーマとして選ばなかっただろうし、書きもしなかっただろうなと思いますね。そういう機会を与えられ、しかもそういう研究も自分でやらざるを得なかった、文章にしなければいけなかったというのは、今までの自分の研究者としての道を考えると非常にいい機会を与えてくださったなあというふうに思います。

時々、先ほどの鈴木さんの話じゃないですけれども、原稿を直されたこともありましたし、原稿を随分、たぶん木村先生が手を入れたんでしょうね。読み易く直されたこともございまし

た。

一度私は「交渉行動様式の国際比較」というので、一九二四年のアメリカの排日移民法というテーマでやりました。そのときの大使がいかに凡庸であったかという話をずっとやっていたんですよ。大使は実は埴原正直という、ここにいた埴原先生のお父さんでして、後で、ここにお子さんがいるんだよと言われまして、同じ研究会のメンバーでなくてよかったなあと思ったこともありました。

あともう一つは、どうしても社会科学というと人文学ほどの広がりがないせいか、少しずつテーマが違うといってもどこかで同じ学会に所属していたりということで、割と近い人たちが集まるのですが、木村先生の研究会で私が非常に魅力的だったのは、実務家を招いて、ゲストスピーカーとしてお話をしてくださったことで、例えばソウルオリンピックの招致で裏方を務めた韓国のジャーナリストのお話であるとか、一回もご報告なさいませんでしたけれども、研究員の一人として人事関係のコンサルタントか何かをおやりの人がいまして、その方はどうも労働争議のいろんな交渉をやって、コンサルタントとしての役割をなさっている方のようでして、懇親会などでそういう人の話を聞くのも非常におもしろかったですね。危機管理では、警察のご出身で、それこそ日航か何かにその後お勤めになって、危機管理の現場を踏んでいらっしゃる方に、これも共同研究の班員として加わっていただきました。現在は相撲協会のお偉いさんになっていらっしゃいます。今も危機管理をやっていらっしゃるんだなあと思います。

自分がここに赴任しまして共同研究会を主宰するようになって、一番頭の中にあるのは、こういうときに木村先生はどうやったかなとか、こういうときに猪木さんはどうやったかなということで、前に外から見たとき自分が印象を受けた点とか、おもしろかったなという点は、ど

うにかして生かしていきたいということです。そういう意味では、今来てくださっている、特に関東方面から来てくださっている研究員の方々は、楽しんでくださっているので、まだ一年目ですけれども、それはありがたいなあと思います。

それから、これはある外国人の研究者ですけれども、東京の研究会に行くと発言の順番が決まっていると言うのです。

鈴木　それはよくみなさん言いますね。

戸部　大体、誰先生がしゃべって、その次は誰先生と決まっているというんですけど、日文研の研究会は順番が決まっていないからいいというんですよ。

そういう意味で、私も自分の経験をどこかに知らず知らずのうちに生かしているといったらいいんでしょうか。そういう形で反映させているんだなというような感じはいたします。

あと二年間続けなければいけないというか、続けるんですけれども、これからもっと活性化していかなくちゃいけないかなと思うと同時に、どうしてもっと早くこちらに呼んでくださらなかったのかなと思って。一回だけじゃ、ちょっと物足りない。もう一回ぐらいやりたかったなという感じがいたします。そんなところです。

倉本　ありがとうございました。

鈴木　私はちょっときつい言葉で搾取型なんて言いましたけど、だからこそ、来てよかったな、続けていきたいと思ってもらえるようにするには、何かをこちらがいつも提供していくということ、それがとっても大事だと思います。

それから、同じことですけれども、これは共同研究会じゃないんですけれども、国際シンポジウムでも、東京の学会へ行くと、偉い先生方が発言することになっていて、自分はとても発

言できないという雰囲気なのに日文研は違いますねと言われることが多い。僕らはそれが当たり前だと思っている。コメンテーターにうんと若い人をつけたりもしますが世間は違うのかもしれない、もっと違う風が吹いているのかもしれないというふうに思います。

倉本　私のところでも、研究員の方みんな口をそろえて、こんな楽しいことはないなんておっしゃると、よっぽど大学ってつまらないんだなあと実感していますが。

それでは、だんだん若い世代になりまして、近い将来に共同研究を開くでありましょうリュッターマン先生に一言お願いします。

リュッターマン　私の先輩はほかにもいらっしゃいますので、山田さん、松田さん、劉さん、共同研究に熱心で、有能な同僚がいるのに、なぜ私か。私に対する何らかの教訓かなとか、いろいろ心配してまいりました。私より先に声を上げる方がいるという指摘をしたいと思います。

一二年ほど前、日本学の歴史書、日本学の入門書をまとめた際に、序論としてドイツにおいての日本学の歴史をまとめたとき、二〇年代に生まれた人まで名前を取り上げて明記したわけで、その後たくさん日本学者がいますので、触れない人は後で、どうして私は指摘されないかとか言われがちですので、そこはやめました。ということで、私は幹事を務めた鈴木さんの共同研究と猪木所長の共同研究には言及しないように、と思います。

倉本　後でまたお願いします。

リュッターマン　我々資料を手渡されたことは既に指摘されたとおりで、それを見ますと日文研では非常に多彩で多様な研究が行われてきたことはありあり見えてきます。少しだけ取り上げますと、私自身の記憶ではなくて、単に資料上のものを言えば、「日本人の他界観」「日本文

化の新断面―かざり並びに奇人研究」「短冊の研究」、短冊だけを見て、非常に細かいものを中心に研究したものもあれば、また「現代日本人の労働・遊び観および行動の歴史的発達」、あるいは「将棋の戦略と日本文化」など、非常に多彩で、ただおもしろい。まとめたものもありますし、まとめてないものもあるんだけども、研究成果が出版物になっていて、今、手にすれば非常に多彩で、視野も広く、いろんな刺激を受けます。

私個人的には、例えば「日本社会における会合の実態とそのもつ意味についての歴史的研究」もこの場でできました。もしくは、特に私は手紙を研究していますので、恋文の場合には、この赤澤先生の「通婚圏、配偶者選択および性淘汰によるヒトの進化」など、そういったものを読み合わせてみれば、いろんな連想が起きて刺激を実に受けます。ほかにもいろんなものにすぐに触れられたのですけれども。

要するに、私みたいに日本学者としてスタートした者は、例えば今この頃のように、よく海外で災害の場合は、なぜ日本人はこんなに冷静に大きな災害に堪えるかという、この頃よくそういう問い合わせを受けます。そういった場合に、例えば災害に関して言えば、これは日本文化の歴史に深く根付き、一つの民族の慣れ、または癖、契沖という学者は癖という言葉を使っていましたが、よくも悪しくも慣れになったもの、それは歴史的研究で幅広く視野に入れないと、なかなかそういった今のような災害に対する、よそ者から見れば特殊的と言いがちなそういうところを説明できない。それを幅広くそういった刺激を受けるところにいることは、私も非常に感謝を持って考えております。

もう既に指摘されたように、そういった学問の肥やしをどのように生かしていくか、私たちにとっては本当に恵みでもあれば、非常に大きな重荷にもなっているというふうに私は実感し

ております。これから、そういったものをどのように整然と展開させていくかは非常に苦しい思いもしております。

つまり、今までのそういった共同研究の性格を見た場合、断片的なものが多いです。刹那的な側面もあると言わざるを得ないかもしれない。今、皆さんの記憶だけでも驚きました。覚えていない、ちゃんと記憶していない、だからこそ出版物がどれほど大事なのかということを改めて実感できましたけれども。また、考察的な弾みが多いですね。アリストテレス風には、一歩ずつは進まないで、右左に弾んだり跳ねたりして、踊ったり、言ってみれば遊んだりする。懇親会とすぐ連想なさった早川さんの言葉は非常に興味深かったです。懇談会に焦点が移りがちなという、そういう雰囲気は学問の歴史の中でいえば、幾つかのそういう分野が必要な中ではカオスというもの、そこに重点を置いて、我々は集えばカオスでいい。そして個人研究に戻れば整然としてそれを生かしていけばいいという、もしかしてそれが日文研の一つの特徴であるかもわかりません。

しかし、先ほども触れられたサロン系の雰囲気などは本当に人次第で、その代表者の性格次第で、それでいいと思うんですが、資料を調べてみれば、「研究と活動の足跡」ですか、この中での説明を読めば、「共同研究を主宰しようとする本センター教授が代表となり、補佐する幹事らとともに研究テーマを選定する」と。私は経験したことありません。そういう出発点があったということは非常におもしろくて、今は選定するのは代表者であって、幹事という機能はどんなものか、皆さんにも経験者には説明をしていただきたいと思いました。

最後に一点、ちょっと強調して表意したいのですが、研究は総合的なものでなくてはいけない、そしてそれを最後に総括するのはなかなか苦しいという指摘もありましたが、私もそれを

痛感しておりますとともに、そもそも出発点においては既往の研究というまとまりがあまりないというような事情があると思うんです。なぜこの分野について今や共同研究を行うかというその段階で、個人研究のように一〇枚、二〇枚の研究文献をまずまとめて、そうした研究がある上で、どこの穴をどのように埋め尽くすつもりかという、そういう計画性でさえあまりなさそう。そういうところに問題があるかないか。私は問題あると思うんですけれども、必ずしもそういう結論は出なくていいかもしれないので、皆さんの意見を募ってみたいと思います。ありがとうございました。

倉本　どうもありがとうございました。本質的な問題にかかわる鋭い指摘をいただきました。

それでは、過去の話はさておきまして、現状の問題点がどの点にあるのか。大体明らかになってきていると思いますが、また、将来に向けてどういう展望を持てばいいのか。特にベテランの先生方に、後進の者に向けて言葉を残していただきたいと思います。

では、白幡先生にまず口火を切っていただくのがよろしいでしょうか。

白幡　最初の一〇年の共同研究会については一〇年史に書いてあります。そして一〇年間は日文研の共同研究会誕生期というか、日文研的な共同研究ができ上がっていく過程ではなかったかと思うのです。私が幹事として最初にかかわった共同研究は日本人の起源をさぐろうというものです。そんなテーマに最初は全く関心を持っていなかったんですけど。この研究会にかかわった結果、後でほかの研究班で発表したテーマですが、お雇い外国人医師のベルツが日本人の起源のことを書いているんです。これは全然日本人が考えなかったような日本人の起源論をドイツ人が、人類学のとくに専門でもないのに見事に展開している。しかも、日本の資料をちゃんと発見し駆使して研究をやっていた。『国際日本研究』という視点の大事さを示す研究

事例です。私にとっては、共同研究の成果に貢献できたかどうかは別として、自分にとって大変役に立つものを身につけさせてくれたという感謝すべき共同研究会でした。

その次に幹事をやったのが「日本人の他界観」という久野昭先生の共同研究会です。他界観というのは、（リュッターマンさんの発言の中で、幹事と班長が相談するか？という疑念が出されたんですけど、）当時は随分相談しまして、例えばタイトルにしても「他界観」ではなく「日本人のあの世観」にしようかと議論になった。「あの世」というのは、時間的に同時性があるけれど、「他界」というのは時間的には連続というか、次の世界じゃないかとか、一回目の研究会でもタイトルも全員集まってねり直しというか、変えようかというような議論もしました。

二期目というか、一〇年ぐらいすぎると、井上さんはスターリン型と言われたんですけど、人文研の桑原研究会のような大体指導者ないし、しっかりした代表者がいて、作戦に従って、幹事役の参謀から兵隊までが全体として効率的に研究会をやっていくと。そういう感じから日文研の共同研究会はだいぶ変わってきたと思うんですね。

それから、変わり種で言うと、僕が幹事をやらせてもらったのは杉本秀太郎さんの「短冊の研究」というのですが、短冊の研究会は二〇回ぐらいあったんですけど、毎回、「短冊読会」なんですよ、毎回のテーマが。次回、「短冊読会」、三回目、「短冊読会」というので、全部それで終わった共同研究会。ほんまかいなと思われるでしょうが本当です。一人が一つの短冊（書かれた歌だけでなく）全体について解釈を述べて、それにいろいろな分野の人がそれぞれに意見を述べる。その研究会の中で文学史の人もいた。植物科学の人もいた。それから動物学の人もいた。社会学もおった。美術史もいた。早川さんも入っていた。井上さんも入っていた

かな。

井上　いや、私はさそわれもしませんでした。

白幡　ほんとにそれぞれが自由勝手に見解を述べて、結局あれは短冊の読解をやったという締めくくりで、まとめの本は出してないんですね。

早川　出てないと思います。杉本さんのはひとつも出ていない。それでいてたいへん印象にのこっています。

白幡　だけど、こうした共同研究の成果をどう考えるかというときに、この研究会は、参加各人にとってはその後いろんなことをやるのに随分役に立った、発想の多様化にも大変貢献してくれたと思うんですね。

日文研の中でも共同研究会のやり方はずっと変化してきていて、それぞれ、何ていうかな、自分の出身の専門と違うところに何か切り込んでいくことができないかという思いは、いつも誰もが持っていたと思います。

それと、共同研究は実は個人研究だと思うんですね。中西さんにしても、埴原さんにしても、中西さんは「日本文学と『私』」、埴原さんは「日本文化の基本構造とその自然的背景」、全部自分の説を証明したいという感じですね。それが最初の一〇年で、その次は、もう一つ、必ずしも自分の説を証明するんじゃなくて、幹事とともに自分がこれまで考えていなかったことをどこか見つけたいというような、そういうテーマ、選択が増えたように思います。

二〇年目からか、いつ頃から三期目とでも言える時期に入っているのかわかりませんけれど、共同研究のベースには各人の個人研究でやりたいテーマがものすごく大きくかかわっているのが日文研の共同研究の特徴ではないかなと思いますね。

それをやるには、ちょっとリュッターマンさんの考えと違って、何か後世に残ることを目指したり、体系性だとか、時代を超えるような論理性とかの獲得よりは、これまで思いつかなかった、それも内容というよりはこれまで思いつかなかった仕方、見方を試みる。それはたぶん人文研とか民博とかには少なかった、日文研に色濃くある方向じゃないかなというふうに思っています。

そういう点でたぶん懇親会というのは非常に大きな意味を持っていた。一応表立った議論というか、要するに専門的研究のテーマは大体五時か六時までに終わって、その後そのまま続けるんじゃなくて、場所をかえて全く違う視覚から議論をやるという懇親会方式がなぜ定着化したかというと、その起源は京大の人文研の、それも桑原時代のものではない。これは井上さんと私とが参加していて、亡くなった園田英弘が当初ずっと幹事をしていた人文研の吉田光邦班のやり方から来ているのではないか。吉田班ではいつも研究会が終わって、土曜日でしたけれど、六時ぐらいから食事して、大体三次会ぐらいまで行く。みんなでわいわい議論する。一番遅いときは明け方五時ぐらいまでやる。

井上　朝日を見たこともあったね。

白幡　朝までやったこともあります。それを毎週か、少なくとも二週間に一回ぐらい続けていた。あれは京大の別に人文研に共通する共同研究会のやり方じゃないと思う。吉田光邦班の習慣が食事会をやる方式を最初の教授方に植えつけてしまったのかもしれません。それで、日文研ではあれはやることにどうもなっているようなんですけど、別に必ずしなくてもいいんですね。

倉本　そうだったんですか。

白幡　発足当時の日文研では我々が好きでやっていたような気がします。それはやっぱり幹事が率先して。

早川　教授陣がみんな好きだったんですよ。

井上　やっぱりやってください。「赤おに」が困ったはる。

倉本　毎回違う店を探すので、私とかも大変なんです。

井上　時折「赤おに」で。

倉本　時折、じゃあ。

白幡　つまり、共同研究会って形式も案外に更新されていて、その結果変わった成果が生み出されているというふうに僕は思っているんですけど。もちろん全部をこのまま続ける必要はないとは思います。全部洗いざらい新しくやり直しても構わないと思うこともありますね。

　共同研究会と一口にいうけれど、共同研究会をどうも「共同研究」したことはないんですよ。桑原さんが始めたというのは定説になっていますけれど、その後どう変遷してきたかは、わかってない。今編纂中の日文研二五年史で初めてこれがわかるようになるかもしれない。そのために、スタッフの皆に共同研究についてのイメージをもっと語ってもらって、二五年史の叙述に生かしてもらえると、おもしろい学問誌ができるかもと思っています。

倉本　どうもありがとうございました。

　特に将来の共同研究に向けてお話しいただければと思いますので、こちらから順番に、早川先生から簡単にお願いします。

早川　先にも話しましたが、私がいま提案できるとしたら、やはり表の研究会の後の懇親会をふたたび活性化してはどうかということでしょうか。リュッターマンさんがいわれたように、

学際的な学問の方法として整然と議論を進めてゆく方法とは別に、逆にポンポンと飛躍しながら、新しい発想を得るという方法があるのではないでしょうか。そうした場として夕方からの懇親会を位置づけることがふたたび重要になってくると思います。

単なる飲み会でも面白い会話はできると思いますが、センターの立地条件を考えてみると、日文研の共同研究会独特の懇親会が可能だと思います。千年の都京都という立地もそうですが、年四、五回開かれる共同研究を考えますと、京都の四季をとりこんだ懇親会がいろいろと可能だと思います。

サクラ、新緑、アユ、川床、モミジ、湯豆腐など、すぐにいろいろとプランが立てられます。これまでいろいろなプランを立ててきましたが、私としてはそうしたプランを新しい人たちに遺しておきたいと思っています。

井上　笠谷さんがさきほどおっしゃった美の数量化というのは、こういうことですね。数量化し尽くした上に余白として数量化し得ない美しさがたちあらわれるというような考え方だったんですよ。若かったんやね。ヴィトゲンシュタインか何かに憧れていたんだと思います。あのころは気取ってたんやね。

桑原さんのことをスターリンだと言いましたが、それは桑原さん自身がおっしゃっておられた物言いなんです。民博で「私はスターリンになりました」と、そう言いきらはった。だけれども、スターリンになったと言わはる、その下で働いていた人たちは皆、桑原さんを温かく思い出していました。あの口の悪い、人の悪口を言わせたらもう天下一品の杉本秀太郎でさえ、桑原武夫の思い出を語るときは本当に顔をほころばしていましたね。杉本さんだけやない。そういう人は多いんです。だから私は、彼をただのスターリンだと思いません。自嘲ぎみにス

ターリンとおっしゃったんだと思いますが、人望もありました。

あとついでに、いやらしい話をしますが、桑原さんの共同研究はほぼすべて岩波書店から出ています。林屋辰三郎さんの本も岩波書店から出ていました。当時の人文研には、共同研究は岩波書店というルートがあったようです。今、私たちの共同研究へ「ぜひうちにください」と出版社が声をかけてくることはありません。「私たちが一〇〇何部か買い取りますから、ぜひ出してください」と、こちらから拝むような格好になっています。そのことを私は切なく思います。いや、学問は細分化されました。精緻にもなったと思います。コピーの機械ができました。要るところだけそれでうつせばいいような時代に、昔のような出版はあり得ないかもしれません。だけども、桑原さんがやらはったことを見ていると、論文集をホッチキスでとめるような本、いるところだけコピーをとればそれですむような本ではない、まとまりのある本をつくりたいという情熱はあったように思います。

ちょっと偉そうな言い方ですが、私もそのひそみに倣いたいと思っていました。『性的なことば』という私の班の報告書には、たぶんこの研究所ではおおむねバカにされていると思いますが、私なりのそんな思いもこめています。例えば「わかめ酒」という言葉の由来、班員は誰も知らないわけです。お互いに一から調べるわけです。そして、その項をうけもって書いた人間は自分の書いたものを全員に配って、二回も三回も手直しをお互いにし合って、つまり私は桑原さんになりませんでしたが、いや、なれもしませんが、全員で全員の原稿を点検し合うというのを重ねてまとめました。やり方によっては、まだそういう手だてで一冊の本をつくれる、まとまりのあるものにして、一冊丸ごと読みたいという読者もそこそこつくり出せるという、そんな志が私にはありました。

もちろん、私なんかのことはばかにしていただいて結構なんですが、何か共同研究のありようというのを考えたときに、お互いにあまりそりの合わない、精緻かもしれないけれども、ホッチキスでとめたような論文集をつくって――ちょっと嫌み言っているよね。嫌み言うているのをわかった上で言うんやけれども、日文研が一〇〇何部か買うからというので商業出版に持ち込む今のあり方に、いや私もいずれはそのしくみに依存するようになるかもしれませんが、何か切ないなという思いを抱いています。ということで、マイクをお渡しします。

倉本　それでは稲賀先生、お願いします。

稲賀　井上さんは『性的なことば』を纏められましたが、これは社会還元に相応しい形の出版を追求した結果の、ひとつの巧妙なる到達点を示していると思います。おまけにこれは共同作業でやらねば出来ないという意味でも、共同研究の意義を再確認させてくれる、絶妙なる編纂物です。その井上さんから私は嫌みをいわれました。私の研究会では『伝統工藝再考』と称して、八〇〇頁を越える報告書を作ってしまった。「あんたなあ、あんな枕みたいなものこさえたって、誰にも読まれへんで」と言われたのですが、これは図星ですね。とはいえ反対に、誰にも絶対通読なんかできないものを残してゆく、それが学問だ、というリュッターマン先生のようなご意見もあるはずで、これだけの振幅があるということが、健全か不健全かはとにかく、日文研の厚みであり、深みにもなっているようには思います。

実は私、本日の集いで一番不安なのは、ここに外国からの客員の先生がひとりも見えていない、ということです。共同研究を遂行する場合には、私見では、専任教授には三つの資質が要求されている。まず、マスコミに対して発言力がある。この席の両隣にはその点で尋常ならざる力量を発揮されている同僚が座っておられますが、これは日文研の求心力の源です。それか

ら第二に、特定の学会については、そこで一目も二目もおかれるだけの権威と力量を発揮し、さらにその特定の学会組織を離れ、それを越えたところでも通用するだけの学才が世間に認められていることも、最低限必要でしょう。それが昂じて、学会などには目もくれず、学者共同体からは村八分になってしまった強者がおられるのも、まことに心強い。そのうえで第三としては、外国と日本語以外のチャンネルを持っている、というのも、要件に数えなければならないと思います。もちろん、これら三つの能力をひとりの個人に要求することはできません。しかし専任の教授には、おおよそ三分の一ずつの構成員が、この三つの能力のいずれかひとつは、最低限発揮してくれないことには、日文研の共同研究は、地盤沈下を余儀なくされるでしょう。これは今からさき、それこそ世界を先取りして、次世代を担ってくれる研究者を日文研に連れてくるためにも必要な条件であり、またそうした人選をするさいの基準、クライテリアとなるでしょう。

そのうえで、共同研究の現状と将来とについて、今思いついたことを、幾つか加えます。

私も今、管理職をやらされており、国際と研究担当ということなので、第一に、国際共同研究をどのように発展させるかということが、差し迫った課題となっています。そこで考えているのは、外国からお呼びした客員研究員の先生方をお客さん扱いしていては駄目だろう、ということです。つまり専任に匹敵するだけの働きをしていただけるような環境を創っていかなくてはならない。そしてその協働作業は、このセンターの敷地内部に限られたことではなく、世界大に広がってゆく。そうしたネットワークを、電子化事業の推進とともに、どのように築き上げてゆくのか、それが大きな課題となっています。

二つ目は、創設二五年を経て、何が充実してきたかといえば、資料が極めて充実してきた。

この一次資料を使った研究という課題は、山折所長時代から、ずっと話題には持ち上がっていますけれども、さあそれを実際にはどう立ち上げるか。井上さんにはご意見があって、つまり図書館にみんなで集って一次資料を前に共同で研究を造り上げてゆく。そうしたワークショップ式の研究は、早川先生も今、外書館をアトリエとして構想しておられます。ワークショップで次世代専門家を育てながら、共同研究を未来に繋いでゆく。そうした試みは、まだ出発点にようやく辿り着いて、計画立案中という段階ではないでしょうか。

三つ目としては、最初の発言と若干重なるかも知れませんが、今度は国内の客員という方たちにどのように関わっていただくか、という問題が出てくると思います。国内客員制度は、必ずしも十分にはその潜在的な機能を果たしていない、というのが私の見解です。日文研の専任スタッフだけでは補えない欠落の箇所を、国内でこの人しかいないという人材によって補ってゆくことが大切ではないでしょうか。今のご時世ではなかなかに難しいこととは思いますが、そこまでのコミットメントを要求できて、しかもそれをお願いできるだけの学術環境を整えてゆく、という方策をまじめに考えるべき時が来ていると思います。日本全国津々浦々に、はっきり申して似たりよったりの共同研究会、あるいは週末研究会が山ほどあるなかで、日文研でなければできない成果を示してゆくことなくしては、日文研の存在意義、共同利用研のレゾン・デートルは堀崩されてゆくことになるでしょう。

そのうえで、もう時間ですから、最後に二つだけ提案をさせてください。

ひとつは、いままで共同研究会は全部で一五本走らせればよい、というのが大前提になってきました。しかしその限界がいたるところで噴出しはじめています。それを乗り越えるための工夫ですが、一方では鈴木貞美先生のやっていらっしゃる仕組みが参考になりそうです。つま

り大型のチームとなった研究会のなかに、いくつか分科会を置くという対応が、当然ながら出てきている。陸軍組織に似ていますが、五人のチームで何かをやり、それが三つ合わさって一五人となり、四五人となったところで、もう一段高いところを狙う。二段ロケット、三段ロケットにして高い軌道を狙うという方策です。こうした仕組みは、無理に制度化する必要はないでしょうが、現場でのノウハウを交換してゆく智恵は重要です。

もう一方は、その反対です。一五本の共同研究といっていますが、例えば人間文化研究機構での連携企画とどのように噛み合わせるのか、それとも別立てとするのか。そうした基本的な制度設計が、法人化ののち六年を経過しながら、現時点ではまだ出来ていません。そうしたなかで私など、試行的に始めましたのは、例えば劉建輝さんと私の班で、相互乗り入れの合同研究会を開催する。事務方にはある程度ご迷惑をおかけすることにもなりかねませんが、ある程度、各班が練れてきたところで、無理矢理ぎゅっとくっつけると、ちょっと時局向きでアブナイ発言ですが、核分裂反応が始まって、知的な炉心融解が発生する。良い意味での知的核分裂を、研究会同士を衝突させることで発生させるような工夫は、考えるに値するだろうと思います。とかく機構絡みの連携企画などは、屋上屋に負担を増やすばかりで現場の疲弊を招く、と消極的な反応がありますが、そうした厄介な企画にたいしても、我々として能率的に、しかも負担を増やすことなく対応するような体制がとれるのではないか。それはなにもひとり日文研だけの内部で閉じることではなくて、例えば歴博、民博などとの共同研究会の相互乗り入れ、というのも、前向きに取り組む余地がありそうです。いままでですと、何となく機構絡みで頼まれたので断れずに乗せられて、自分の首を絞めるような場合も生じていますが、むしろ機構のなかで主体的に上手にネットワークを張ってゆく、攻めの姿勢にでることも、あるいはでき

るのではないでしょうか。私自身は、そろそろそうした威勢のよいことを宣言する元気が、年齢的になくなりつつありますが、次の世代には、そうした合理化の工夫をお願いできれば、と期待しています。

倉本　どうもありがとうございました。

六時半までということで、最後に猪木所長の総括も必要なんですが、それも考慮していただいて、笠谷先生、お願いします。

笠谷　ちょっと話を振り返っているかもしれないのですが、スターリン云々かんぬんというのがありましたが、共同研究を始める場合の幾つかの要するにパターンの問題かと思いますけど、仮説検証型の共同研究というのは最初標榜されたんですよ。だから、それをやりますと、当然一つの指導者といいますか、主宰者の出している一つの仮説、そのたぶん典型になるのが埴原先生の日本人二重構造論というやつがありました。それから村上先生の日本型家社会論もまたそういうタイプの一つであって、それの妥当性云々を検証する、つまり多くの人々が一つのグランドセオリーを検証するという形で寄り集まってきてやるタイプの研究会があります。これは当然指導型、スターリニズム型といいますか、トップダウン型の構造になりやすいと思います。

その対極ですね、それは特定のテーマを持たずに、とりあえず寄ってみて、いろんな異分野の人が集まることによって、よそは知らないけれども、思わぬ何がしかが出てくるのではないかということを期待して、ある意味無責任だけれども、やってみたら結構おもしろいことができると。

ちょっと手前みそになりますが、さっき村井先生の悪口を言ったんですけど、今度は井上さ

んにかわって私が幹事を引き受けまして、村井・笠谷体制でやると。ちょっと思っていましたが、村井先生、とにかく成果は出しませんから、最初から引き締めて、絶対に成果報告を出すという心構えでそもそも始めたのです。しかし、村井康彦・笠谷和比古で、さあ何をやるかといったときに、村井先生は公家が専門だし、私は武家が専門だから、「公家と武家」というテーマでやりましょうという、これはかなりいいかげんな問題設定で、グランドセオリーも何もないわけです。

ところが、「公家と武家」という対極を設定してみたら、最初は日本史のつもりでいたけれども、いや、もうちょっと中国の文人型社会と日本の武人型社会というものを取り入れてみたらどうだろうか。いや、日本の武士道とヨーロッパの騎士道があるから、日本の在地領主制とヨーロッパの封建領主制を比較してみたらどうか。そうしたら、そのうちオスマントルコにもそのような擬似封建制というのがあるという話になって、オスマントルコだ、アラブだとか、じゃあ朝鮮は一体どういうふうな関係になるのかというふうにして、やっているうちにどんどんどん広がり始めてきた。最初は日本史の中における二つの勢力の対抗図式の話で始めたつもりが、いつの間にか話をしている間に、いや、それならばほかの国だったらどうなるか、こうなっているかと。そのうちに、中国、東アジアでは、中国や朝鮮は朱子学型、つまり華僑官僚型の世界であるのに、どうして日本の社会だけがこういう武家封建領主制という形、つまり東アジアの中で異文化を形成したのかといっていたら、いや違う、実は朝鮮にもそういう武人型の政治体制ができる芽は高麗朝の後にあったんだという、これは全く知らない話なんですが、突如そういう話が出てきた。そういう形でどんどん広がっているうちに、最初の第一巻目のやつはつくったけど、いや、これだったらまだやり足りないところがあるといって、第二弾

は今度は家という制度を、家という概念は極めて日本的だけれども、これをもうちょっと言うと普遍的な観点でとらえてみたらどうだろうか。ヨーロッパに行くとダンゼンハウスという考え方がありまして、これはオットー・ブルンナーという人が立てている理論なんだけれども、それと今度は日本の家論と突き合わせるという形の比較研究ができる。さらに今度は、天皇制だ、儀礼の問題だという話になり、そして最後は総括的に「官僚制と封建制の比較文明史的研究」という形で、四回やりました。

さらには、もったいないから、国際シンポジウムをつけましょうという形で、「公家と武家の比較文明史的研究」というやつをやりました。結局、このシリーズは五冊出すことができました。あの手ごわい村井先生にちゃんと書かせたということが、私はこの間、共同研究の中でも一番誇るべき点なんです。これだけは僕、井上さんに勝っていると、誇らしげに宣言できるところなんです。

ちょっと手前みそになりましたが、さっき言ったとおり、仮説検証型から出発して展開するタイプと、ぼやっと寄り集まっているうちに、まさにプラズマ状態みたいなものができてきて、それがいつの間にか臨界点になって、成果ができ上がってきてという、そしてそのことによってまた次の研究分野が見えてくるというふうな、そういう核分裂反応型の研究もあり得るということです。

ただ、先ほどからの指摘にもかかわらず、じゃあ岩波がおまえのところのやつを引き受けてくれるかというと、それは確かに一〇〇部買い上げ型でその本を出してもらっているということの弱みはあります。しかし、これは私が思うに、どうしても創業のときの華々しさと守成のときの難しさという問題だと思います。創業のときはやっぱりアドバルーンが上がりますか

ら、マスコミはみんな、それならばと来るわけです。しかし、どうしてもそれはマンネリ化してしまうわけですね。マンネリは結局、要するに沈滞のもとになるわけですが、この持続の中をどのようにやるか。それはつまり守成。この守成の功というのも、創業の功とともに、ひとつ考えてみなかったら難しいところで、要するにマンネリに陥らずに、しかもこれを持続させるという技は何なのかですね。ちょっと私には具体的な提案はないわけでありますが、歴史がもたらすサイクルの運命を我々が共有するものではないかと思いながら、私の感想という形にさせていただきます。

倉本　どうもありがとうございます。

　ちょうど六時半になりましたが、鈴木先生、お願いします。

鈴木　簡単に。桑原さんのフランス革命の研究というのは仮説があったわけではなくて、学際的に切り分けてやった。それをいわば講座型と私言っているんですけど、いろんな講座のつくり方があるでしょう。それを本屋とタイアップしてやる。それは否定すべきことではなくて、日文研でもやってもいいと思います。

　それから、埴原さんが言ったのは仮説攻撃型といって、自分の仮説を攻撃させるということを意識的に考えたけれども、しかし誰もうまく攻撃してくれない。偉い先生だからどうしても、ちょっと欠点は言うけれども、大体褒めているわけで、自分の学識を鍛えるのには十分にはならなかったということを彼は残念がってました。たしかになかなか難しいと思います。本人にその構えがあっても、でたらめな根拠のない攻撃はされても困るわけで、それはなかなか難しい。もっといろんなやり方があると思う。例えば同世代で一番先端的なことを走っている人を集めるだけで、かなりおもしろい新しい提言ができるでしょう。私はできなかったけれど

も、そういうこともできると思いますし、何をやっちゃいけない、こうしなきゃいけないということはないと思っています、私は。何でもありで、肝心なことは足を引っ張らない。本屋に売れるものをつくるのもいいし、一〇〇〇部買い上げもあっていいじゃないですか。

井上　一〇〇〇部買い上げはあんまりやと思います。

鈴木　今度の『「Japan To-day」研究』も一〇〇〇部刷りましたよ。外からお金をとってやっていて、海外に出す部数として、それくらい刷るべきだと判断した。いつもいいますが、「買いあげ」ではないですよ。こちらは海外頒布分の制作費を出すということです。

　私の言いたいことは、思いつきでもいいから、あるいは笠谷さんみたいな動き方もあるでしょう。私自身のは大体研究運動スタイル、ムーブメントをつくってゆく。問題提起をして動かしていくというのが好きなんですけども、「おまえ、これはだめだ」ということを言っては絶対だめだと思います。何でもありでいこう、多彩化していかなきゃだめだ。大学とか、ほかの機関でもやっているわけですから、そこではできないことをやればいいわけです。差異化して。手堅いのもいいし、小人数で小さい専門のがあってもいいし、ばかでかいのがあってもいい。あれはいかん、これはいかんと言わない。もちろん、外に対するアカウンタビリティは必要ですが、それが私は日文研の精神でいいんじゃないか。

　そもそも、チームリサーチは、理科系が始めたわけですよ。二〇世紀にはいって、一〇年ぐらいから。これはわかりやすくいうと、土建屋の親方の方式です。そうでないやり方でそれなりの成果を出す共同研究って外国人はわからないでしょう。チームリサーチといったら、理科系の方式や、桑原方式しか思い浮かばないでしょう。親分が外部から金をとってきて、役割を割りあてて、成果を出す、それ以外だったらピラミッドの吉村作治とか、ああいうのがチーム

リサーチだと思っているわけでしょう。だけど、そうじゃないことが人文研から始まっていて、いろんなところで手探りしている。我々はいつも新しい方法の開発みたいなことを、「あっ、ああやったら何かできるんだ」みたいなことを見せていくのが使命だと思っています。その創意工夫を何でもありで行きましょうと言っているのですが。

倉本　ありがとうございました。

三五年史の座談会があったら、私は鈴木先生の言葉を長老としてしゃべりたいと思います。じゃあ、戸部先生、お願いします。

戸部　私は一回しかできないし、一回だけやればいいので、あまり考えたことはないのですが、ただ一回しかやれない者からしてみますと、今まで多くの方々が言われたこととの関連で言いますと、一〇年やる方はちょっと長期的に考えられたほうがいいような感じがいたしますね。最初の自分の計画からおそらく変わっていくだろうとは思いますけれども、もし三回共同研究ができるとすれば、その関連性をどこかで最初から考えておかれたほうがいいなという感じがいたします。

もう一つは、学際性をどうやって担保するかということだろうと思うのですが、どうしても三年間でまとめる、あるいは一回しかできなくてまとめるとなると、まとまりやすいメンバーしかなかなか選べませんので、学際性を担保するという意味でも、ある程度の時間が必要なのではないかなという気がいたします。

倉本　ありがとうございました。

それでは最後に、猪木所長のほうから、過去のことも踏まえまして、提言やら問題点やら、すべてをお話しになってください。

猪木　いやいや、難しい仕事ですね。まず簡単に印象を二つ。皆さんよくしゃべりますね。私の分野では、短くしゃべればしゃべるほど評価されるんだけれども。いや、ほんとにいろいろ情報もたくさんいただきました。

　それともう一つは、さっきの笠谷さんの話、私は記憶がないと申し上げたんだけど、笠谷さんの話を聞いていて、うっすら思い出しました。朗々と長くしゃべる人がいたと。ただ、笠谷さん、これはちょっと失礼なことを言ったかもしれないけど、笠谷さんがあの仮説検証（検証）的云々ともう一つタイプを大きくお分けになった。あれは分かりやすい分類だと思います。私が参加した村上泰亮さんと飯田経夫さん、お二人とも亡くなられましたけど、ちょうど両極端のまさにおっしゃるようなタイプに分けられると思います。ついでにこれからのパースペクティブに関係して二、三申し上げると、スターリン型というのはちょっと言葉が強いと思うんだけども、その人にちょっと反抗したいなというようなぐらい何かの主張を持った人がリーダーになった場合は、ある程度やりやすいでしょうね。例えば村上さんはそうだったんですよね。村上さんは決して笑わない、だからみんな若い人が顔色を見ながら発言するというような雰囲気があった。

笠谷　冗談が言いにくい雰囲気ね。

猪木　それに対して飯田さんは、割に自由に、しかし特に成果物を目指すというわけでもなかったと思います。村上さんは体を悪くされて、残念ながら最後までたどり着くことができなかったのですけど。

　このお二人が、おもしろいことに、研究会のスタイルだけじゃなくて主張も違ったんですよね。日本の企業文化とか、日本の雇用慣行とか、日本人の経済生活、勤労生活に関して、企業

活動に関して、村上さんは言ってみれば日本特殊論に割に傾いておられたし、飯田さんはまた逆だったんです。日本は何も特殊じゃない、慣行面を機能的に見るとどこの世界に行っても同じだという、そういう主張の方でした。

ですから、将来的には、スタイル、やり方、まとめ方を区別して議論して、やり方に関しても飯田型があり村上型があってもいいと思うんですけれども、まとめ方に関しては共同研究というもの自体が一つのコーナーに来ていると思います。私の個人的な感想ですけど、ヒューマニティーズで共同論文というのは大体あまり書かないでしょう。理系は今、二桁ぐらいのオーサーズが名前を連ねて一つの仮説検定（検証）的な論文を書く。経済学はその中間で、大体最近の実証研究は三、四人の共同名の論文が増えてきて、一人というのはほとんどないですね。理論研究も単独論文は減ってきていますね。

それに対して人文学は少し違う。共同研究がまとめ方という段階で、つまり、議論し討論し、先生というか権威主義的なことを言う人に刃向かいながら議論をするという討論の場と、最終的にまとめるという段階で、ホッチキスで綴じるという形にならざるを得ない。ヒューマニティーズは個人・オーサー自身の個性を奪い去ることは、私はできないような感じがします。それが第一点、つまり、やり方とまとめ方を区別して議論したほうがいいということ。

もう一つは、若い人を巻き込んでいく教育機能を持つべきだと。そういう意味で、私は桑原先生の研究会は全く知りませんけれども、スターリン的であれば、これは教育機能を持ちますよね。さっきの顔色を見ながらやらざるを得ないという雰囲気は、やっぱり学問にあるわけですね。そして権威に対する反抗みたいなもの。だから、そういう意味で若い人を招いて、たくさん巻き込んで、そしていろいろな仕事をしてきた先生の研究の姿勢はこうだとか、研究の丁

寧さはこうだとか、研究をしていく上での倫理としてどういうふうなことを自分に課しているかなんてことを何となく吸い取っていく。

最後に一点だけですけれども、飯田先生から誘われたとき、一種のサロン的、ディレッタンティズム的、耳学問をさせていただく機会として、勉強になりました、それで終われば自分の分野へと散っていく、というようなイメージだったんです。実際、私自身、共同研究会を二つやって、知識創成的な要素というのはあるなあというふうに感じますね。これは予感なんですけれども、それがどれほど大きなものか小さなものかは別にして。だから、学問が細分化されればされるほど、共通語を失わないためにも、みんなバベルの塔になってしまわないように。共通の言語を持つためにも、何かこういう共同研究のポジティブなプラスの役割というのを、われわれが証明する義務もあるんじゃないかな。

私も昔は共同研究会に対してちょっと否定的だったんですけどね、特にヒューマニティーズに関しては。だけど、まとめ方はちょっと置いておいて、議論の場としての役割は無視できないということで、私のまとめといたします。

倉本　うまくまとめていただいて、おかげさまで座談会も何となくまとまったような形にしていただきました。

ほかにフロアのほうから、これは言っておかなければいけないというご意見がございましたら、マイクを回します。よろしいでしょうか。

笠谷　ちょっと、どうしても一つだけ、これだけ指摘したいのが一つあるので、ちょっとだけ言わせてもらえますでしょうか。

倉本　まあ、どうぞ。

笠谷　これは現在、実務的な話ですが、共同研究が非常にやりづらくなっているんです。我々、共同研究は通常金土型でやるというのが一つのスタンダードで、土曜日だけの方もおられるのですが、金土二日型、隔月金土開催型が一つのスタンダードだったのですが、今、金曜日の開催が非常に難しくなっています。

これはどういうことかといいますと、各大学の締めつけが非常に厳しくなって、金曜日を休講にして日文研の共同研究会に参加するということは非常にできにくくなっている。要するに、半学期、一五回ですか、そのノルマが非常に強化されていて、それが削れない。当然、会議等もある。したがって、金曜日の欠席が非常に顕著になってきている。したがって、我々はそれを変えざるを得なくなってきている。倉本さんもやられていますが、つまり土日型に変更するようになってきた。これはどうしようもなく、私も次の四月からのやつを、これまでの趣旨を変えて、土日型に変えざるを得なくなってきている。本当は望ましくないけれども、その形になる。

ただ、これがどういうふうな展開になるのか。これをネガティブにとられるべきなのか。それとも、そこまでしても土日であっても研究会に来るんだという熱心なやつが、逆にそのことによって生まれることになるというふうにポジティブにとらえるのか。これはちょっとやってみなきゃわからないのですが、一つの節目にあることだけをちょっと指摘したいということであります。

倉本　もう私立大学の教員は土曜日も締めつけが厳しくて来られないと思います。

という話はさておきまして、それでは二回目の座談会をこれで終わらせていただきたいと思います。まだまだお話し足りない方、いらっしゃると思いますが、あちらに瀧井先生のご尽力

で一席設けていただいておりますので、その場でまたお話しいただきたいと思います。

先生方、どうもありがとうございました。フロアの皆さんもありがとうございました。

パネリスト

稲賀繁美（国際日本文化研究センター教授）

井上章一（国際日本文化研究センター教授）

笠谷和比古（国際日本文化研究センター教授）

鈴木貞美（国際日本文化研究センター教授）

戸部良一（国際日本文化研究センター教授）

早川聞多（国際日本文化研究センター教授）

マルクス・リュッターマン（国際日本文化研究センター准教授）

司会

倉本一宏（国際日本文化研究センター教授）

フロアーからの発言者

小松和彦（国際日本文化研究センター教授）

白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）

講評

猪木武徳（国際日本文化研究センター所長）

国際交流の展望

二〇一一年四月二一日

パネリスト
磯前　順一
猪木　武徳
テモテ・カーン
佐野真由子
細川　周平
山田　奨治
劉　建輝

司会
荒木　浩

瀧井　皆様、お待たせいたしました。それでは、第一七七回の日文研木曜セミナーを開催したいと思います。

今月と来月はちょっと変則的でありまして、今まで二回にわたって日文研二五年史企画ということで座談会を開催してまいりましたけれども、これから四月と五月の木曜セミナーの場をおかりしまして、日文研二五年史座談会を引き続き行っていきたいと思います。

そういうことで、本日は日文研二五年史座談会のパートⅢということで、「国際交流の展望」と題して開催したいと思います。時間のほうも、いつもでしたら一時間半ですけれども、きょうは二時間、一八時半までたっぷりとお話を聞きたいと思います。

これまでの過去二回は、古株の先生がたくさんいらっしゃったので、二時間でとても足らなかったのですが、本日は古株の中では安田先生が残念なことに急にお仕事でご欠席になってしまいまして、比較的フレッシュな顔触れとなりました。そういうこともありまして、過去を振り返って懐古するというよりも、むしろ未来志向の話がいろいろ聞けるのではないかと楽しみにしております。

では、本日の座談会自体の司会は荒木浩先生にお願いしておりますので、荒木先生にバトンタッチしたいと思います。では、よろしくお願いします。

荒木　よろしくお願いいたします。比較的フレッシュなというご指摘もありましたので、活気に満ちた座談会になればと思っております。

今、瀧井先生のほうからご紹介がありましたように、二五年史というのをつくっております。資料編と物語編とに分かれているのですけれども、資料編というのは主にいろんな情報を盛り込んだ資料集で、その資料を読んだ方々にそれぞれの日文研のイメージを抱いていただこうという側面を持っているものであります。その第二章に「研究活動二」というのがございまして、そこに国際研究集会や海外活動というものが載せられる予定になっております。そして、第三章が「研究協力活動」ということで、シンポジウムをはじめとする日文研のいわゆる研究協力活動について記述される。二五年史にはほかにもたくさん、今日の話に関係することはあるのですけれども、資料編でいいますと、第二章、第三章に関係する重要な日文研の活動

が、本日のテーマの国際交流の諸相ということになります。日文研というのは国際的、学際的、総合的というのが一つの売り文句だとされています。私はまだ日文研ビギナーですので聞きかじりですけれども、そういう形で日文研の方針が展開している中で、筆頭に来る国際交流ということについて、今回は座談会という形式でいろんな情報をうかがい、交換して、先生方から提言や批判をしていただこうという集まりであります。

パートⅢとしたのは、瀧井先生からもご紹介がありましたように、今年に入って二月一六日でしたか、創設期について、この壇上で先生方に集まっていただいて座談会を行っております。また三月一七日に、今度は共同研究にテーマを定め、やはり同じように座談会をしていただきました。今回は木曜セミナーという形で、初めての公開形式での座談会ということになりますが、さらに言いますと、昨年一二月に井上先生、早川先生、白幡先生の三人のいわば古株の先生方に、エトレの小野さんのほうから、インタビュー形式といいますか、座談会形式といいますか、それも共同研究ということをテーマにして座談会が行われています。そういう意味で言いますと、ゼロ回を合わせて四回目、次回の資料をめぐる座談会で合計五回という、非常にたくさんのお話をいただくことになっております。

話をする都合上、共同研究とか、創設とか、国際交流とか、あるいは資料というふうに、少し細切れにしてありますけれども、これまでの座談会を伺っていても、あるいは資料などを読ませていただいても、非常にそれらは相互密接に関係していることであります。主に今回は国際交流に特化した形で話をしていただきますが、問題をゆるやかに広く捉えていただいて、フロアにいる先生方からもお感じになることなどを自由闊達にお問いかけ下さい。ステージの先生方のお話への疑問あるいは提言、それから賛成など、積極的なご発言をいただければという

ふうに思っております。

先ほども瀧井先生からテーマの紹介がありましたが、「展望」という言葉のその意味を辞書で確認してからタイトルをつけたのですけれども、「振り返りつつ前を見る」というのが「展望」の語義であるようです。本日の討論は、どちらかというと前傾しながら、前を見ながら進めたいと思います。数多い先生方に今日はお集まりいただいております。それぞれ多様な形で国際交流の経験を積んでいらっしゃいますし、所長、海外研究交流室長もいらっしゃいますので、日文研としてのオフィシャルな見解もあります。それから、海外で教えられたり、研究をなさったり、数多くのシンポジウムに参加されたり、あるいはご自身が海外で研究経験を積まれたりと、いろんな形で国際交流というキーワードのもとに仕事をなさっている先生方がおられます。ある種、立場のある先生はそれを踏まえながら、そしてまた先を見ながらということですが、少し場がほぐれましたら、もうざっくばらんに、私としては、どちらかというと自慢話とか、あるいはとんでもない失敗の話なんかも入れていただくとありがたいと思います。一回全員にお話しいただきますが、その後また活発に、これも言いたい、あれも言いたいということをおっしゃっていただければというふうに思っております。

大変恐縮ですけれども、日文研の主要な大事な柱である国際交流について、猪木所長のほうからまず口切りでお話しいただければと思います。

猪木　最後かなと思っていたんですけれども。

フレッシュな顔ぶれとおっしゃって、皆さんが私の顔をごらんになりましたね。確かに私は「新鮮」ではないかもしれませんが、フレッシュには「生意気」という意味もあるんですね。だからフレッシュというのは、ここにいる方はみんな生意気な方でもあるのです。

国際交流というふうに銘打たれていますけれども、これは非常に広い意味ですよね。何を交流するかということばかり言っていますけれども、要するに国と国との間でやりとりをするという非常に広い意味になっています。日文研で海外研究交流室等が中心になって研究協力委員会等でいろいろ議論をして企画を立てるというような、そういう意味での日文研の活動としては、研究協力という言葉を使いますね。

私は、研究協力という言葉は、創設の時代から大変重い意味を持たされた、背負わされた言葉であるということを実は日文研の創設準備室の議事録、議事要旨ですか、私はドーアさんに四年か五年前でしたか、海外研究交流顧問をお願いしたときに読みました。というのは、ドーアさんがこの研究所設立の経緯なり趣旨をもうちょっと私は詳しく知りたいとおっしゃったので、設立準備委員会の議事要旨を読んだときに、こういうことが書いてありました。

第一ラウンドの時間は何分ぐらいですか。

荒木　全く決まっていません。

猪木　そういうことはあり得ないので。一〇分ぐらいで収めます。

その中でこういうやりとりがあるのです。文部省のお役人さんと梅原先生、そしてこちらの準備室には園田さんが次長をされていて、黒田英雄さんという方が事務的なヘッドをされていたのですが、「センターという名前は意味があまりはっきりしない」「横文字で軽過ぎる」「研究所としてはどうか」というような議論があったときに、「いや、研究所としてしまうのはよくない。この構想の基本概念というのは研究と研究協力だ」と。研究協力というのは少し具体的に申しますと、主に海外の研究者への情報の提供、資料を収集し整理し、日本研究に関する情報を提供し、そして学術上のサポートをする機能ですよね。その研究協力というのが、実は

研究と等価であるというふうに言っているんですね。この二つの重要なファンクションを、センターという言葉だとその意味が失われないけれども、研究所としてしまうと、研究協力という概念、もともとのコンセプトの中にあった二つの柱の重要な部分が欠落してしまうというやりとりがあります。

これは、一九八二〜一九八三年あたりから、桑原先生、梅原先生、梅棹先生等々が日本研究の中心的な施設をつくるというときに、どの時点でこの考えが明確に出てきたのかというのはちょっと、その議事録は創設準備委員会ができてからのものですからよくわかりませんが、とにかく情報提供と海外の日本研究者の要請に応じて、自立した研究者への研究を側面からサポートするという機能が非常に重視された研究所としてできたということですね。これを私は、着眼点として、他の研究所と日文研を区別する非常に重要な点だというふうに思います。

ですから、私が所長になりましたときに、日文研は決して文化交流の機関でもないし、個人の研究者の寄り合い所帯でもない、学術外交のための機関だという意味で、学術外交という言葉を使ったのですけれども、趣旨、考え方は基本的に同じだというふうに思います。国際交流というふうに言うと、ちょっとあいまいさが増えて、日文研の柱の一つの輪郭がはっきりしなくなる。もちろん実際は人と人とが交流し、その人と物、書物とか映像、文書資料などが前提としてあるわけですから、具体的には交流という言葉は不適切ではないと思うのですけれども。ただ元来、研究協力という言葉が、共同研究と並んで同じウエートを持った。そして海外の研究者の独立した研究、自発的な研究に対するサポート機関だということが強調されていたということです。この点は、私自身もともすれば忘れてしまう。

そうした議論の中で、外国人を客員として呼ぶときに、日本語を話せない人でもいい。しか

し、日本語が読める人じゃないとだめだという意見も出ております。ですから、それはこれから後で皆さんがいろいろ討論なさるときに、失敗談も含めて具体的な研究協力のコンセプトが現実にはどういう形で変容したかというようなことを振り返るのも大事だと思いますので、私の発言はこの程度にとどめておきます。

個人研究、研究者への資金援助でもない、そしてむしろ書かれたもの、映像的なものを通して、外国の日本研究者自身の自発的な研究テーマを推進するために側面からサポートする機関であるということが、この研究所の特徴であり、重要なおそらく忘れてはならない点じゃないかなというふうに思います。

第一ラウンドはその程度にいたします。

荒木　ありがとうございました。

今、一つ問題提起がされましたので、後で議論の重要な柱にしたいと思います。

次に、私が赴任してまもなく、一通の六月三日付の文書というのをいただきました。それは日文研が海外で行うシンポジウムの企画募集という書類で、海外研究交流室から来たものでした。日文研には海外シンポジウムというのと日本研究会というのと海外研究交流シンポジウムという研究交流のカテゴリがあり、さらに、海外ネットワーク形成事業というのもありますが、いただいたペーパーはその企画の立て方とか、あるいはそれをどう推進していくのかについての呼びかけの文書でありました。

同じように、一一月でしたか、今後三年間の海外研究交流室の構想する展開についての詳細な文書をいただいて、今、日文研がイメージしている、外に出ていくほうの学術外交のことがわかりかけているのですけれども。もう少し詳しくそのことも聞きたいということもあります

ので、続きまして、現在室長をしておられる山田先生のほうから、ざっくばらんにで結構ですけど、ご自身の体験でもよろしいですし、あるいは日文研の方針でも結構ですが、まずお話しいただければと思います。

山田　ちょっと予想していたのと違う振られ方をしたので、どうしましょうか。今、私は海外研究交流室長をしておるのですけれども、今どういう方針でやっていますというような話よりは、私自身が感じていること、思っていることを、たぶんそんなに発言の時間はないでしょうから、言いたいなと思うんですけれども。

先ほど所長が、このセンターの目標、目的、存在する理由に二つあって、研究と研究協力という二本柱があるということでした。ですが、例えば我々、専任のスタッフを選ぶときは、主として研究の能力を見るわけですね。研究の能力というのは、それをはかる方法はある程度ありますけれども、研究協力の能力というのはなかなかはかりがたいものがあって、どのくらい社交的かとか、例えばホスピタリティーがあるかとか、そんなことは実際来て働いてみてもらわないとわからないというところがあって、センターの二本柱をうまく満たすように人員を配置する難しさを私は感じています。

つまり、我々は基本的には研究者でありますから、やっぱり自分の研究をしたいというのがまずあるんですね。そうなると、研究協力というミッションが研究の時間を割くものというふうに、ついついとられがちになってしまう。その辺を各スタッフの人たちがどうやって自分の中で折り合いをつけていけばいいのかというのを、皆さん、もうちょっと考えていきましょうよということを呼びかけたいと思っております。それが第一点ですね。

もう一つは、これも現役の室長としての意見、考えなのですけれども、外国から来られてい

る客員の先生方に対するサービスのあり方、サービス水準に対する感度がちょっとどうも鈍っているような気がします、正直申し上げまして。

例えば、そこまでやる必要はないとか、あるいは、自分たちが海外へ行ったときにそんなことはしてもらえないといった発言を同僚諸兄からよく聞くのですけれども、このセンターをつくったときの理想というのは、世界最高の研究所をつくるということではなかったのか。その最初の理想というのは、もう我々日常の最近の忙しさの中で埋もれてしまって、夢もどこかに消えてしまったのかと思いたくなるぐらいです。

ですから、我々として、本当に世界最高レベルのものをつくり、提供していくんだという理想像をぜひもう一回皆さんで考えてみませんかというのが、現役室長としての二点目の提案です。

こういう発言でよろしいでしょうか。

荒木　結構です。非常に今、大きな問題が提起されました。先ほどの猪木所長から出た研究協力の問題と深く関連する事柄でもあり、問いかけもありましたので、後でゆっくり議論をしたいと思います。

では続きまして、交流室長のご経験があると伺っておりますが、細川先生、よろしくお願いします。

細川　僕が交流室長だったのは二〇〇七年から二〇〇九年にかけて、二年です。そのときには現在とは組織も少し違っていて、同時に研究協力委員長をやっておりました。

私のいた間では、それまでのアジア太平洋ということで企画されていた三年計画、オーストラリア、シンガポール、中国、これに続く新機軸を打ち出そうということで、僕が就任する前の年だったかに、それまであまり日本研究が盛んでなかった三つの国を選んで回っていこうと

いう新しい行脚のスタイルを、僕ではなくて前の方が打ち出して、それにのっとって、エジプト、ロシア、ブラジルという三ヶ国に続けて行きました。そのうちのエジプトには不参加で、ロシアとブラジルに特に深くかかわりました。

ブラジルに関しては非常に長い付き合いがありますし、向こうのスタッフとも一〇年以上の付き合いがあったわけですが、ロシアというのは、そのシンポジウムがあると決まってから初めて話すような、コミュニケーションをするような人たちばかりで、ともかく初めから大変、行ったこともない国でしたから、こちらからの勘がつかめないというところがあって、なかなか苦労した覚えがあります。

また、どの時期までだったか、交流室には奥野さんというベテランの女性がいまして、そこの室長になっても、彼女の言うことを聞いていれば大体うまくいくという、信頼できる人がいて、忠告を受けておりました。そういう二年でありました。

また、海外シンポのほかに、フランスにあります欧州日本学研究所というのがアルザスにあります。これはアルザス、ドイツとフランスの国境付近にある非常に戦略的な場所で、ヨーロッパの中央であるという自覚が強い州、県ですけれども、そこの日本学研究所とも、猪木さんが室長の時代に一度行って、それ以降かなり親交を深めて、僕が室長の時代に一つセミナーをやったことがあります。

この日文研では、中国、韓国の方が非常に多い。悪く言えば黙っていてもシンポジウムが、どんどんセミナーができてしまう、人の交流がある、そういう国があります。また、北米やオーストラリアとも、まさにどんどん、これまでの二〇年間の下地があると思いますけれども、僕がかかわった国々は比較的そういった過去がなく、人の脈を開いていくというようなと

ころで、かなりいろいろ力を果たしたつもりです。

どうすればよかったかとか、いろいろ、今のお二方の話に付け足して言えば、最初、猪木さんが交流というのは人と人の付き合いというふうなことをおっしゃいましたが、そういった点をもっと出せるような組織にしたい。どうしても組織と組織、日文研とどこそこ大学、東洋研究所というようなところが、名目上は確かにそうやって組織され、お金もそうやって動いていくわけですが、こちらの気持ちとしては人と人で、相手の誰それがいいやつだから、やっぱりここでやりたいなとか。いいやつというのは、研究的にも個人的にも、いろいろな意味で信頼でき、もっと付き合いたいというような人との付き合い、情熱というのかな、そういうところをもっと実現できるようなことをもっとしたいですね。なるといいと思います。かみ砕いて言うと、小回りが利くような体制、いろいろな形の規模、あるいは予算のつくり方、開催の仕方のものがもっともっと増えていったらよろしいかと思います。

日文研の公式行事のほかに、半分ぐらいは公的、でも半分ぐらいはもっと私的な形で何かシンポジウム、セミナーに参加し、その人脈を広げてくるというような機会にたくさんの人的な、あるいは資金、事務的な資本をもっとかけるようにできたらいいと思います。

今はこのくらいにしておきます。

荒木　ありがとうございます。

また一つテーマが広がって、外へ出ていく対象、それから人脈、人と人とという話がありましたし、そのシンポジウムの運営などについての方針や今後のあり方について、幾つか提言もあったと思います。

引き続きまして、この中では二番目にご赴任が古いのではないかと思いますが、劉先生。

劉　劉建輝です。二番目に古いといいますと、山田先生の次ぐらいですか。

実は私は別の意味でもうちょっと早いです。つまり、客員研究員として九三年から一年間日文研のお世話になったことがあります。そして、途中で身分が逆転して、また専任として九九年に来たわけです。

今、他の先生方から理念とか方法とか、いろいろなお話が出ましたけれども、私は、せっかくの二五年史の企画ですので、ここですこし具体的な交流史のようなものをご紹介したいと思います。

私がかかわってきた海外交流は、特に中国を中心とするアジアの国々ですが、中国に関して言えば、先ほど海外シンポジウムの話が出ましたけれども、実は第一回目は北京大学と一緒にやったのです。一九九五年でした。その前の年、九四年に京都会議というとてつもない大きな国際集会が開かれ、その流れでキャラバンもやろうというような経緯があったように覚えています。そのとき、私は、まずこちらで京都会議のお手伝いをして、そして向こうにもどって、北京大学のほうでそのキャラバンの世話をさせて頂いたのです。その前にも一部交流がないわけではないが、研究協力としては、たぶんこれがはしりではないかと思います。そしてその後、北京大学との間でかなり緊密な協力関係が築かれたと思います。

北京大学と並んで、もう一つ、協力関係上で非常に重要な拠点となったのは、北京外国語大学に設置された北京日本学研究中心という、国際交流基金が中国政府と一緒に作った研究教育組織です。ここには、日文研の先生たちがかなり早い段階からその大学院に赴き、それぞれ一年か半年間教鞭を取っていたという経緯があります。私の知っている限りでは、中西先生、芳賀先生、その後、笠谷先生、上垣外先生、白幡先生、栗山先生、稲賀先生らがみんな行ってい

たと思います。これらの先生方、教授陣が定期的に北京に行って研究中心で教えていたことは、向こうの日本研究を大変助けたというか、研究のレベルアップに非常に貢献したと思います。

今、累積的に中国からの外国人研究員が一番多いということになっていますが、実は、これもこういう先生方の努力によって出来たネットワーク、また協力関係によって生まれた実績の一つだと思います。向こうで発見した人材を日文研に呼び、その研究を助けていたのです。

ついでに申しますと、北京日本学研究中心の卒業生が、うちの総研大に、一番たくさん来ています。全部でもう六、七人ぐらいいるんじゃないですか。研究中心から総研大の博士課程に進学し、そして学位を取って学界にデビューするという形です。そういう意味で、北京日本学研究中心と日文研との協力関係は、たぶん他に例のないケースだと思います。

北京大学と北京外大以外でも、今、中国の多くの大学と交流関係が出来ています。これには、白幡先生、笠谷先生もそうですが、おそらく鈴木先生が一番多く貢献されていると思います。私が最初に鈴木先生と出会ったのは、たしか一九九一年社会科学院で開かれた国際会議の場だったと思いますが、その時期から先生がもう頻繁に中国に行かれて、多くの大学で講演や講義をやってこられました。特にここ一〇年来、近代概念の形成という研究テーマについて、中国や韓国の学者と一緒に、例えば北京や広州、南京、ソウルなどで、ほぼ年に一回のペースで国際シンポジウムを開催してきています。そのご尽力もあって、今や中韓のほとんどの重点大学と交流、協力関係を築き上げたのです。

最後に、私自身のことで、たいへん恐縮ですが、一九九九年日文研に赴任して以来、満州研究班等を主宰したこともあって、特に前任校の北京大学と中国東北部の各大学との関係構築に留意してきました。この間、北京大学や吉林社会科学院、東北師範大学などの機関と国際シン

ポを共催したり、「満洲」をめぐる共同研究を行ったりして、かなり緊密に付き合ってきています。そしてここ数年また新たに台湾との関係を意識的に築こうと努力しているところです。

すこし意外かもしれませんが、日文研と台湾は、つい最近までそれほど深い関係を持っていませんでした。いろいろな理由があって、あまり台湾の学者を日文研に呼んでいなかったのです。たしか栗山先生が一人か二人、短期訪問に呼んでいましたが、長期の客員はまったくおりませんでした。この三、四年、所長をはじめ、私たちはかなり頻繁に台湾を訪れ、中央研究院等と国際シンポも二回ほど共催しました。そして台湾からは客員研究員、来訪研究員、また大学院生も徐々に来られるようになりました。今後もやはり中国大陸、台湾、そして香港などいわゆる中華圏の国と地域と広範に交流していかなければならないと思います。

このように、十数年間、さまざまな国際交流、研究協力をやってきましたが、その感想の一つとしてあえて申しますと、これは先ほど山田先生からも研究姿勢のお話が出ましたが、やはり自分の研究と研究協力をどのように両立させるかは、われわれにとってもっとも問われる大問題だと思います。研究協力をたくさんやれば、当然、多くの時間と体力が費やされます。それでも自分の貴重な時間を割いて海外に出ていくのは、やはり相当の自己犠牲が要求されると思います。

たしか私がまだ客員の時でしたか、芳賀先生が大変な名言を吐かれたことがあります。日文研の教員はつねにパスポートをポケットに入れて、呼ばれたらいつでもすぐ海外に飛んでいかなければだめだとおっしゃったのです。むろん、現実的にさすがにそこまではなかなかできないと思いますが、ただ、ここに在籍する以上、そういう心構えがやはりある程度必要かとも思います。自らの研究と研究協力、この車の両輪をどうバランス良く動かすのか、たいへん難しいだろうが、われわれ全員にのしかかっている重い課題ではないかと強く感じております。

すこし長くなりましたが、とりあえず以上です。

荒木　ありがとうございます。

経緯のこと、それから最後のほうでは、先ほどの山田先生のお話にあったことにもかなり絡む重要な問題が提出されました。これも後で議論しなければいけないと思います。

引き続きまして、まさに最近まで海外で実際に研究をしておられて、一番ホットな雰囲気をよくご存じな磯前先生、よろしくお願いいたします。

磯前　私はちょっとドイツで感じた話をしたいと思います。

ドイツのルール大学ボッフムというところに呼んでいただいて、一年いたのですけど、前期に所属していたのは「Dynamics of history of religion」という学際的な宗教をめぐる東アジアとヨーロッパの対話という場所で、日本で言うＣＯＥみたいなお金をボッフム大学が取ってきて、年間一二人の宗教研究に関するフェローを東アジアとヨーロッパ、アメリカから呼ぶ、あるいはイスラムから呼ぶ。それと、ボッフムにいる教員三〇人ぐらいを合わせて四〇人ぐらいで共同研究をやるという六年ぐらいのプロジェクトで呼んでもらいました。

せっかく行ったので授業をやろうかなと思って、前期は宗教学科で授業をさせてもらったのですね。タラル・アサドとか、ガヤトリ・スピヴァクとか、日本とは全く関係ない、アメリカで非常に大きな宗教学の動きとか、宗教学を超える宗教研究の動きというのがあって、そういうものが北米でどういうふうに読まれているのかというのをドイツ人の院生と日本から来た私が一緒に読んで、どういうふうにアメリカの宗教研究を問題化していったらいいかというゼミを大学院生とやりました。

後期は、どうしてもということで渋々、日本研究の日本史学科で授業をやりました。学生の

反応は全然違っていました。それから、教員の反応も全然違っていたんですね。それは、私はとても一般化できるような能力はありませんので、単に個人的な経験として話すにとどめたいと思うのですけれども。

日本研究で最初に見せたのが、一九六〇年代ぐらいにつくられた「日本誕生」とかという映画だったと思うんですね。私ともう一人、ドイツ側から教員が来て、ドイツの教授の命令だということで、私は無理やりそこに組み込まれて授業をやれと言われたのです。まずその映画を見せて、彼は何と言ったかというと、一九六〇年代に日本人はまだ『古事記』と『日本書紀』を信じていたと。そこに日本人が裸踊りをしていて、こういうのが真実だと。有名な映画監督も有名な俳優も出ている。そこにいるドイツ人の男の子、女の子というのは、留学した子は何人もいないわけですが、ああそうかな、自分のドイツ人の先生は優秀だなと思って聞いているわけですよね。例えば、原節子という女優がいる。「ここに日本人がいる」と私が言うと、呼ばれて「ハラセツコと漢字を書いてくれ」と。「嫌だ」と言うと、今まで来ていた東大教授もやっているからおまえもやれとか言われて、原節子と。途中で嫌になって拒否したのですけれども。そういう漢字を書かせる。

彼はその後、何と説明したかというと、「私たちドイツ人は六〇年代にはナチスの神話を信じているばかなやつは誰もいない、六〇年代には完全にゲルマン神話というのは批判していた」と。学生も、うんうんとうなずいているわけですね。「ところが、どうですか、日本人たちは。すばらしくエキゾチックで、神話を信じていますね。と同時に、エキゾチックかつ野蛮で。」私がいて、私の妻がいて、そこに韓国の友人がいて、「ねぇ、そうでしょう」とか言われて、「いや、どこにそんな資料があるんですか。この映画がベストセラーになった資料はどこ

にあるのですか」と言ったら、「あなた知らないの」と言われて、「見せてください」と言ったら、彼は何も見せないで「そういうものです」とか言っていました。

それで結局、私が何といっても、そういう沈黙の共同体ができてしまうので、「そうだね」という話になって、「やっぱりドイツ人っていいよね」といって、私はその三週間目ぐらいから出席を拒否して、教えるのをやめたのです。もう、耐えられないと言って。変わったことといえば、そういうことがあるんですよね。

ある日また呼ばれて、九州大学から教授がやってくるので、ボッフム大の日本史と一緒に会議をやるからちょっと来てくれと言われて、「近世におけるダイナミックス」とか何とか。「近世って何ですか」と言ったら、ドイツ人の教授が「そんな質問をするのはやめてくれ」と言われて、「ここはそういう場じゃないだろう。日本の古文書の話をする場であって、近世を問う場じゃない」。「でも、ダイナミックスと近世というタイトルで、どう見てもダイナミックスがないんですけどね」という話をしたら、「不愉快だから、あんた、ちょっと、もういいよ」とか言われて。

要するに何を言いたいかというと、つまりそういう形で日本研究とは一体どういうフレームでやっているのですかという問題がすごく、私がぽっと来たときにあるんですよね。またそこに日本人の方がいる場合があるんですよ。彼らがまたその期待に応えて、一生懸命日本人を演じようとすることもある場合があるんですよね。そこに共犯関係ができてしまって、ありがとうみたいな感じで。「何でこいつがこんなことを言うんだい」といって、それから二ヶ月後ぐらいからはもうすっかり日本研究所に呼ばれないで、宗教学のほうにばかりに呼ばれているということになっちゃったんですね。

前期は宗教学をやっていて、日本をやりたい学生なども来ていましたけれども、それはあくまでも宗教という現象、レリジョンと呼ばれている概念、鈴木貞美先生が専門でもある概念が、ヨーロッパのプロテスタンティズムができてきて、それが日本に入ってきて、自己認識がプロテスタンティズムに合わさる形でできてくる。そこに日本はおさまらない部分もあって、ずれも出てくるみたいな話をやっていく。

そうすると、イスラムをやっている学生とか、南米からドイツに留学している学生がやってくるわけですね。そこで南米ではこうだ、イスラームではこうだ、日本を私はやりたいんだけど、こうだと、学生の中でディスカッションができてきて、宗教というものに、みんなおんなじになっちゃうわけじゃないんだけれど、宗教という言葉の翻訳を通して、南米で、イスラームで、日本で、ドイツで、どういうふうに宗教という概念は翻訳されていくんだろう。そういう議論は非常に豊かにできて、私はおもしろかったんですね。そこに大学の教員もやってくる。ボッフム大の先生も聞きに来る。あるいは、彼らが私に対して反駁をする。

そういう形で議論はできたのですけれども、よくわからないんですけど、日本研究の場合はそうではなかったんですね。そういう話をするのだったら、もう来ないでくれみたいな話になっちゃって、そういうイメージに合わせて演じてほしいみたいな印象があって、非常に戸惑って、同じ大学で何でこんなに違うのかなと、一年間考えていたんですね。

この中で気を悪くする方がいるかもしれませんけど、見ていると、結局ドイツの日本学というのは、私の友人のクラウス・アントーニというテュービンゲンの先生が今、本を書いていますけど、一九三〇～一九四〇年代ナチの時期に、ある意味で日本とかかわりながら、日独同盟と関係しながら非常に盛んだった。よくも悪くも盛んだった時期があって、戦後非常にドイツ

の中では難しい場所に行ってしまった。これは後で、リュッターマンさんなんかに間違っていたら直してもらいたいと思うんですけれども。

そういう中で、ドイツにおける日本研究の場所が、ドイツ人自体が非常にマイノリティーで、教授会でもなかなか難しい。どういうふうにみんなに、何で日本を研究しなきゃならないのというのは、アニメが好きな人とかは来るけれど、そこからなかなか超えられないとか、日本語を習いたくて就職したいから来るけど、そこから日本研究に行けないとかいう問題があって、非常に難しい。そういうドイツにおける戦後の日本研究の難しさがあって。

ちょうどその時期、二月頃にアメリカ、アマーストに呼ばれて、ニューイングランドのアマーストに行って、知り合いがいるのでハーバードにも行ってきましたけれども、やっぱりそこでも中国研究は、すごく経済的に豊かになっているけれども、日本研究がだめで、もしかしたらライシャワー研究所もビジティングフェローになるためにお金を取ろうかということも今考えているという話を聞いたんですね。そういう中で、ポスドクフェローも減っているし、昔、私が二〇〇三年にライシャワーにいたときは、授業のオブリゲーションはポスドクフェローはありませんでしたけど、今はライシャワーでは授業も審査する。それで、ビジティングフェローの数もおそらく半分ぐらいになっている。で、私の知り合いのアドミスメイトは首を切られてしまった。誰か首を切らなきゃならないということで、人数も減っている。

そういうのはドイツだけではなくて、アメリカでもおそらく起きてきて、どういうふうに日本研究というものを――日本研究をやっている人はお金も欲しいし、交流もしたいから、情報も欲しいから来ると思うんですけど、ドイツの中でとか、アメリカの中で、あるいはイタリアの中でといったときに、日本研究をそれぞれの社会の中でどういうふうに意味立てるかという

ことをすごく戸惑っているような気がするんですね。それが私を呼んだドイツの日本学の先生が、ナチを信じているドイツ人はいないけど日本を信じているという形で、一つは非常に稚拙な形で、これは個人的な問題で、ドイツの日本学そのものの問題ではないと思いますけれども、そういう人が出ちゃうような形になっちゃう。

そういう中で我々は、猪木所長が言われたこと、今まで皆さんが言われたこととちょっと逆の面から今、私は話していると思うんですけれども、どういうふうに日本研究をサポートするんだろう、海外の人たちをサポートするんだろうというときに、日本研究に興味がある外国人が日文研に来るということは、そう難しいことではないと思うんですね。我々はお金を出しているわけですから。あるいは提携をやって情報を知りたいというのは、お互いあるわけですけれども。

だけれども、彼らがそれぞれの国に帰ったときに、きちんと学問的に尊敬されて、その社会で日本研究をやっている意味がどうしてできるんだろうということまで、我々が支えてあげられるようなビジョンを提供できるような研究交流ができるのか。それとも、あくまでも英語がしゃべれるから、中国語がしゃべれるから、韓国語がしゃべれるからというレベルでやってしまうのか。そこに私は、これからおそらく日文研が世界の中でどのぐらいまでの役割を果たしていけるかというのは、将来としては、私がここで雇ってもらうのには、日文研の存続の問題にもかかわってくるような大きな問題として、そろそろ転換期に来ているんじゃないかな。

日本研究をする、『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』、エズラ・ボーゲルとか、そういう時期だったらよかったと思うんですけれどもね。そうじゃない時期にしても、日本研究をしているという枠組みの中に入ってしまえば、例えば私でも日本の宗教で近代のことを知っているといって尊敬されることは可能なんですけど、日本を研究していない人であると、彼らにとって

は何の価値もなくなってしまうわけです。でも本当は、日本研究者じゃないから、おまえのことなんか知らないよというムスリムの人とか、インドから来た人とか、あるいはイギリスでカソリックをやっている人たちに対して、私が日本を研究していることは彼らにとってどういう意味があるのかということを翻訳できないと、これからの日本研究の国際化の可能性は苦しくなると思うのです。しかし、そこの点を乗り越えていかないと、人間的にも学問的にも尊敬し合って、それによって彼らにもビジョンを与えて、私たちもビジョンをもらえるというふうにはならないんじゃないのかと思います。

こういうことは、例えば私は宗教学と日本の歴史学と二つかかわっているんですけど、アメリカ宗教学会に行くと、日本人が組むパネルとか、日本研究のパネルは、もうほとんど人が集まらないという状況があって、どうやったら、宗教学あるいはレリジャスタディーズという枠の中で日本をやる人たちがどうやったら聞いてもらえるのかという非常に難しいところに来てしまっていると思うんです。

そのときにも比較というやり方を導入して、日本の人たちだけではなく、我々は今、韓国の人とか中国の人と、劉さんなんかがやっているようなトランスナショナルな形で議論を組んでいかないと、なかなか関心をもってもらえないでしょう。そういうところに、もしかすると閉鎖的状況の突破口もあるのかなという気はしています。

まとまらない話ですけど、以上です。

荒木　ありがとうございます。非常に参考になりました。また非常に大きな第二、第三の日本研究というものの総体を問うもので、これも後でゆっくり話をしたいと思います。

続きまして、この中でも比較的赴任が古くて、日本研究ももちろんそうですし、『ニューズ

レター』を通して広く広報活動の発信ということに苦労されたり、あるいは工夫されたりしているという面もありますので、今度はカーン先生のほうから、何でも結構ですので自分のお考えになるところをお話しいただければと思います。

カーン　皆さんすごく、磯前先生もかなりシビアなところまで入っていって、もうちょっと笑い話をしましょう。私の最初の頃の経験からですけれども、こちらに来た当時は交流室の一番最初の年でした。はっきり言って何のこっちゃわからないという状態が自分の周りにあり、つまりいろんな人がいろんなことをする。これが研究協力だ、これが交流だと。そして、いろんなレベル。廊下を歩いていても、こうだと説教されたり、しかもつじつまが合わないんですね、結構矛盾している。実際、どういうふうにどうしたらいいのかと。

ただ、救いになったのは、ある日赴任して少ししたときに、覚えていますけれども、河合先生と一緒にお話をしていたんですね。そのとき「仕事はつくっていくもんだよ。つくっていくものだから、いろんな人がいろんなことを言っても、自分から物を考え、自分からやりなさい」と。

当然、もう一人、私にとってかなり助けになったのは園田先生です。創設の最初の準備段階から、今先ほど猪木先生がおっしゃったような概念とか名前とか、そういう結構、時々どうでもいいかなと思うものの中に、実はかなりハードな重要なものがあると。彼はよくお酒を飲む。昔の園田先生との関係を知っている人は、よく私が園田先生とゲストハウスで一晩中飲んでいたのを憶えているでしょう。ただの酒飲みと皆さん思っていたかもしれません。そこでは、日文研または海外研究協力というものはどういうようなものなのか、ずっといろいろと議論したり、今でも聞こえますけれども、私が外れたことを言うと、ばかものとよく頭をたたか

れました。

私もいろいろと失敗をやってきました。最初の海外での日本研究会は、ドイツのボンと、そのときはＥＡＪＲＳの開催地にも行くことになっていました。ボン大学で最初は自分の練習というか、ちょっとウォーミングアップみたいな形で行ってこいと言われてました。気楽に、あまりがんがんやらなくてもいいからと。

皆さんご存じのように、当時はペーター・パンツァー先生がおられました。パンツァー先生は日文研とよく交流があったので、向こうの師匠という形でいろいろと、ドイツでの日本研究の歴史とか、人とか、どこにどういうところがあるかとか、そういうデータ、情報も教えてもらった。それが終わって、ドイツのドイツ語研究会ですか、ヤバノロゲンタに行ったんですけど、ドイツ語ができない人間が――ちょっと恥ずかしいのですが、ドイツ系なのにドイツ語が親から少し習った程度でちょっとしかできない。

日本語の用語も出てこない発表って、いっぱいあるんですね。日本語が一切出てこない日本についての発表、つまりローマ字のedobakufuとか、そういうのが出てきてもいいのに、全然出てこない。おまけに英語じゃないですから、全部ドイツ語ですから、本当に何で私はここにいるんだろうなとか思ったんです。これはおそらく私のために神様が選んだものだったと思うんですけれども。

そのときにちょうど会議か何か、相談会みたいなのがあって、そこに私が入っていったら、隣にリュッターマン先生がいて、これも何らかの縁なのかもわかりません。本人は嫌がっていますけれどもね。

その後も、自分が日本人じゃないなというのを思い知らされた事件があった。フランクフル

トから今度はＥＡＪＲＳの開かれるポーランドに入らないといけない。ワルシャワに着いたときにパスポートを出したら、ビザがなかった。要するに、私は自分がカナダ人だからどこでもウェルカムと思っていたんですね。そして、追い返されてしまいました。日本人はビザなしで大丈夫だったんです。「行くなら、おまえ、ビザを取っておけよ」とか、そういう話です。あれからは絶対に二回、三回チェックしますけれども、あの時はワルシャワから送り返されて、結局大幅にＥＡＪＲＳの学会に遅れてしまいました。あの時の私の発表は、あれはたしか図書館の資料紹介で、当時まだ向こうで紹介されていないと言われていたので、ちりめん本についていろいろとお話ししました。

そんなこんなで、最初からつまずきながら、だんだんいろいろと見えてきたり、どういうふうに物事をくっつけていけば、どういうところを考えていかないといけないかということを学んでいきました。

海外のシンポジウムは一回の規模が大きい。アメリカ、北米のシンポジウムから、たしかロシアのシンポジウムぐらいまでは、かなりたずさわってきました。日本から先生たちを連れていく、またどういうふうにどんな人を集めてくるか。お互い同じ研究の対象であれば、これは比較的楽ですけれども、意外と日文研とか日本研究となってくると、話題や分野がものすごく幅広くて、集めてきたのはいいけれども、どういうふうにそこで、いい化学反応、いい有機体というか、いい感じ、媒体というのかな、そういう場をどうやってつくっていくかというのに、私は努めました。それは日本研究会もそうでしたけれども、どうやっていけば一番いいのかと。

それと、ここの業務ですけれども、一度「おまえはカナダ人だから、カナダへ行ってこい」という話もありました。結構安易だなと思いましたけれども。カナダを横断して、何ヶ所か

な、五、六ヶ所の大学を回ったのですけれども、エドモントン、私の大学がアルバータ大学でエドモントンですし、アルバータ大学に行っているときに、ちょっと親の…。

ありがたい話で、その後、父は他界しましたから、結構元気なときに少しだけ最後居れたんですが、私の親は何も聞かなかったのですけれども、バンクーバーから来ていたおばさんが結構突っ込みのきついおばさんで、「あんた、実際日本で何をやっているの」と。私は日本研究の学科とか、そういうところを回って、そこにいる研究者といろいろと話をして、どんな興味を持っているか調査していると説明しても理解ができない。まさか偵察という言葉はちょっときついので、最終的に友達をつくりに来たんだよと。「同僚の友達をつくりに来たんだよ」と言ったら、不思議とそのおばさんは「ははは、それでわかるわ」と。何がわかったのか知りませんけれども。

まだいろいろとあると思います。『ニューズレター』ですね。『ニューズレター』について少し。

白幡先生は、「ニュース」なしで「レター」だけでいいのでは、という考えですが、僕はレターというのもちょっと。この時代にホームページとか、ああいうもののほうがはっきり言って早く行っちゃうんですけれども、やっぱり紙媒体というものの重要性というのもありますから。『ニューズレター』で一番のニュースは、おそらく日文研に来ている海外からの研究者のこと、または所内の専任の先生がされた講演会について、ここに来られなかった人、または世界に自分の読者が本当にどのぐらいいるのか、ちょっとわかりませんけれども、四〇〇〇部ぐらい刷って送りますから、そういう方々に自分の研究とかを少しでもお知らせしたい。アブストラクトにちょっと毛が生えたぐらいの長さで。時々、ある先生はかなり書きますけど、稲賀さん。

そういう形で、できるだけみんなにお知らせしようと。紙面の枚数に限りがありますから、

すべての人に当たるというわけじゃないですけれども、それは努めて、ニュースという感じよりもエッセイ的なもので発信している。

わかるんですね、交流とか協力という、自分が誰に書いているかというのを意識して書いている人と、全く無視している人。一方的にある特定の、場合によっては読者とは全く違う人に書いているような感じのエッセイが時々出てくるんですね。そのときはやはり翻訳、バイリンガルで出していますから、日本語で出てきたら英語で、英語で出てきたら日本語で訳しているんですけれども、たまにはちょっと、申しわけないんですけれども、訳者になったりすることもあります。

今後、『ニューズレター』にしても何にしても、どういうような形になっていくかというのは、いろいろおもしろい展開が出てきたらいいなと思っています。

とりあえずそれでいいかな。

荒木　ありがとうございます。

フロアの先生方にもボールが投げかけられかなり直接的にキャッチボールが始まりかけているんですが、もうしばらく前のほうで議論をして、フロアに質問なりを持っていきたいと思います。

一回目のお話の最後は佐野先生で、佐野先生は私と同期になるんですけど、研究はもちろんですけれども、それ以外に国際交流基金とかユネスコとかで研究を支える仕事についてのご経験もあって、外から見た目と、それから日文研で実際に研究活動をされた目と、両方の視点をお持ちですので、ざっくばらんにご経験や感想をおっしゃっていただければと思います。

佐野　私はちょうどこちらに移らせていただいてから一年たちました。広い意味での国際交流

ということを、交流の中身、現象の面と、それを推進する政策の面の両方から、自分の研究領域としておりますので、私の場合は、日文研の国際交流の業務にかかわることを、煩わしい負担としてではなく、非常に積極的にとらえることができていると思います。日文研の国際交流自体を研究素材にするというわけではないのですが、ただ、そうした経験がいろいろな意味で研究にもそのまま跳ね返ってくるという意味で。

一年こちらで過ごしての感想のような形になってしまいますが、特に強く感じることを二つだけ、申し上げたいと思います。

一つは、きょうは「国際交流」という枠での座談会ですけれども、その国際交流活動というものが、ちょっと通常の研究とは切り離された、距離のある付加的なこと、わざわざやるものになってしまっているのではないかということです。日文研の研究活動の本来の性格に根差した、その外延として、もっと自然に国際交流活動があるという感じになっていくと、企画推進していく上でも、実際に全員がかかわっていく上でも、位置づけやすい、やりやすいのではないかなと思うことがよくあります。

もちろんこれは当たり前のことで、わざわざ言うまでもなく、それぞれの研究のごく自然な延長として、国際シンポその他、いろんなことをなさっている先生がたくさんいらっしゃるわけですけれども、他方でどうも、付加的にわざわざやるものというふうになってしまっている部分もあるのは確かだと思います。その結果として、ここにこれだけ豊かな研究の実質、内実があるにもかかわらず、個々の国際交流事業をつくるのにきゅうきゅうとしてしまったり、あるいは、外からの要望に場当たり的に応じていく格好になってしまったり、といったことがあるのではないかと、ごく素朴な感想として思います。

それではどうしていったらいいのか。いろいろ考えられると思いますが、具体的な一例として、今年の夏にエストニアで行われる小さな日本研究会の企画を初めて担当させていただくことになった際に、現在実際に進行中の共同研究会、日文研のコアの活動である共同研究会を現地でそのまま体験していただくようなワークショップをできないかという提案をいたしました。小松先生がそれを引き受けてくださったので、大変ありがたく思っておりますけれども、今回の日本研究会は小松班の番外編として外に行っていただく、――そんな提案をいたしましたのも、今申し上げたような問題意識の一端からです。もちろんほかにもさまざまなやり方があろうかと思います。

それから、さっき二つと申しましたけれども、もう一つは「国際交流」というときに、海外に何か持っていく、あるいは海外から新たに招聘して何かやる、ということにとらわれ過ぎではないかということです。それよりも、足元を見て、この日文研の空間にこれだけの国際的な知性が集結しているということをもっと大切にしたいと、常々思います。

それは、さっき山田先生が最初のご発言でおっしゃった「最高の研究機関」ということとも重なってくるのですが、もう一歩踏み込んで言えば、やはり単に研究機関であるだけではなく居住空間であるということ、そこにこれだけ多彩な外国人研究員の方々が各国からお集まりになって、大げさでなく、人生のある一時期をここで共にしているということ――。そのような知的コミュニティとして、ここにいたことがそれぞれの人生のために大きな役に立ったと、今、本当に言っていただける状態にあるのかどうか、また、ここで日々、闊達な刺激のやりとりがあったとして、そのような場所としての日文研を外に対してアピールできているのかどうかというところに、非常に大きな問題意識を持ちます。

居住するというのは、本当に住んでいなくても、専任の先生方を含めて広い意味で申し上げているのですが、しかし同時に、実際にこの敷地内に住んでいらっしゃる方々への生活面でのサービスレベルというようなことを含めて、知的居住空間としての日文研をどう考えるかということに、もっとエネルギーを割いてもいいのではないかなと、この一年を経て感じております。

とりあえず以上です。

荒木　ありがとうございました。

今の佐野先生の提言を受けるような形で問題をまず議論していきたいのですけれども、先生方、補いの形でも結構ですし、直接的にちょっと意見がおありという方、積極的に手を挙げていただいて、話をしていきたいのですけど、いかがでしょうか。

猪木　磯前さんの話を伺っていて、これも個人的な体験になるわけですけど、だいぶ違った感じを持っていることを基本的には申し上げたい。その中で二つ、日本研究というものに関して持っている私の固定的な思い込みみたいなものを実は解きほぐしてくれた例として話したいんですね。

私は一九九七年と一九九九年にドイツに三ヶ月、短い滞在ですけれども、あちらの学生に日本の明治以降の経済発展についてのレクチャーを一五回ぐらい、二度依頼されて行ったんですけれども、私の印象は、磯前さんがお受けになったのとだいぶ違うんですよね。それはどういうことかというと、学生はドイツは大体マスターレベルの学生で、大学に五年ほどいて卒業する。当時はまだボローニャ・プロセスが入っていないときですから、要するに学士というのはなくて、マスターとその後はドクターですよね。そのマスターで自由な力作の何かペーパーを仕上げる。

その間、いろいろなセミナーに招かれたんですけど、私がちょっとおもしろいなと思った点。日本研究というと、何か閉じた日本という島国の中に発生した文化現象みたいなものを取り上げて、これが非常におもしろい、特殊な現象であるというふうなことを研究するという、私は何か固定観念がありました。ところが、私が九〇年代後半に二度目に行ったときに受けた印象は、全くそれとは別で、その中で印象に残っている話が二つあります。

一つは、ドイツのレクラム文庫と岩波文庫の発生とその形の違いを論じた報告を聞きました。これ、おもしろいなと思ったんですよね。それはもちろんドイツのほうが残念ながら先ですけれども。つまり文化が、一つの具体的な書物というものが、つまりインフォメーションなり、あるいはもっと知恵の詰まった書物が、国を超えてモデルがコピーされるというか、そういうときに一体どういうふうな違いを生み出すか、一種の文化変容というか、文化というのは閉じられた中で何かこれが非常に日本に特殊的だというような議論をする、日本学というのはどんな意味があるのかなと、私は正直に申しまして、経済学をやっていて感じていたんです。けれども、その報告を聞いて、なるほど、これはやっぱりドイツ人がよく自国のことを調べ上げて、そして他国、日本の中で生まれた岩波文庫の研究もして、それを比較するという視点というのはなかなか、これはやっぱりよほどの学問的投資をしないとできないなということで、おもしろく感じました。

それからもう一つは、これは経済史の報告で印象に残っているのが、戦時下つまり第二次大戦中の女性労働力の動員の問題、それから、女性が家庭で産めよ増やせよでどんどん人口を増やさないといかんという日本の内務省系統の政策とを比較した経済史の報告を別の研究会で聞いたんですよね。

私はいろいろな研究発表を聞いて強く感じたのは、やっぱり日本研究自体、私が古く持っていた――日文研というのができたというのは、私は大阪大学におりましたから、もちろん聞いていた。何をするのかな、日本人の研究者とか外国人の研究者を集めて、そういう研究、日本が特殊だ特殊だと議論をしているんじゃないかなという愚かな推測をしていたんですけれども、実際はもうそのとき既に一部ヨーロッパ、アメリカでもそうでしょうけれども、文化の研究とかエリア・スタディーズというものの性格がだいぶ変わってきた時期だったということを実感したわけです。

先ほど劉さんが満州の問題、日中関係、それから若い榎本さんが交渉史をやっておられますけれども、ああいう国と国との間の交渉とか比較の問題とか、そういう形に日本研究が変容しているのだなあということを私が最初に気づいたのが、実はドイツの滞在だったのです。リュッターマンさんがおられるから気を使って、ドイツのレベルの高さを言っているわけではありません。彼は私に対しても厳しい、嫌なことも言う人なので、あまり支持したくないんですけれども。でも、学問的真理というのは、好き嫌いとか、仲よさとは関係ありませんので。

一つの学問分野というのは固定されたものではなくて、やはり変容を迫られ、そして基本的には自国をよく知る者が他国を研究したときに何を生み出すことができるかということを問われているのでしょう。ドイツで私が実感したことをまじえて、磯前さんに対するマイナーコメントとして申し上げます。

荒木　磯前先生、いかがですか。

磯前　それでいいです。

荒木　話が劉先生にも来ましたけれども、いかがでしょうか。

劉　先生の最後のお話ですけれども、研究者はもちろんそれぞれ自分の専門を持っているわけですが、しかしその専門内だけではなかなか解決できない課題もいっぱいあって、どうしてもその研究対象の全体像、つまり日本文化の構造全体をある程度把握しなければ理解しにくいことが多々存在します。特に外国人研究者の場合はその傾向が一段と強くなります。私自身もそれを経験しています。先ほども申し上げましたように、私は、最初の協力される側から、その後の協力する側へ、という身分転換があったわけです。協力される側の立場に立っていた時、何を一番悩んでいたかと言えば、やはり日本文化の特質をどうつかむか、その全体構造をどう理解するかということだったのです。そして、その解決策は、私にとってつまり母国の中国文化との比較でした。

　私は一九九〇年に神戸大学を出て、天津の南開大学に就職しましたが、その外国語学院の日本文学学科で日本文学を教えていたんですね。しかし当初、いくら日本文学はこうだ、明治文学はこうだと言っても、学生たちがみんなキョトンとしていて、ああそうですかという感じで、まったく通じませんでした。そこで、彼らのよく知っている中国の作家や作品を例に挙げ、それと比較しながら説明するととても関心を示してくれて、またすこしずつ分かってくれるようになったのです。つまり、日本文学オンリーでは、どう教えてもなかなか理解してくれず、彼らの一番身近なものを持ってきて、実は両者がこう似ていて、またこう違うんだよとやったら、わりあいスムーズにこちらの話に付いてきます。まさにこの南開大学での経験から私がその後だんだん元の日本文学の専門から日中比較文学、比較文化へと「転向」したわけです。

　そして、これについては、やはりかつて李御寧先生がおっしゃっていたように、とりわけ中国や韓国との比較が非常に大事だと思います。つまり日本とヨーロッパの国々だけを比べる

と、もともとアジア共通のものも日本の特質として立ち上げられてしまうので、ヨーロッパの国々や南米、北米の国々と比較すると同時に、一番文化的に近い、類似性の多い中国や韓国と比べることによって、より日本の特質、本質が分かってくると思います。

他文化との比較がとても大事だというお話しでしたので、私の体験として簡単に補足させて頂きました。

荒木　ありがとうございます。

今のは研究協力という、いわば外側に見える問題が、実は非常に本質的に日本研究に作用してくるということ、それから、日本研究の総体というのは何かという問いかけでもあったように思うのですけれども、どうでしょうか。何かそれに絡んでもよろしいですし、もう少し述べておきたいということがあれば、ぜひお話しいただきたいのですが、まずステージの先生方。

山田　これは、もうここ何年か感じていることですけれども、国際日本文化研究センターという名称を持ち、日本という国家を一つの研究の単位としていますよね。私のように東アジア圏での大衆文化の交流などに関心がある立場からすると、時々、日本という縛りがちょっと邪魔になってしまうことがあるんです。この研究所については、先ほど磯前先生がおっしゃったように、よくも悪くも『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』の時代に構想され、つくられてきた研究所であるわけです。

ご存じのように、もっとも『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』といっても、実際は二位だったわけですけれども、今年、ＧＤＰで三位になりましたよね。もちろん経済が国力のすべてだとは思いませんけれども、その国の関心への度合いというのは、やはり経済力に否応なく比例してしまうわけです。

これから先どうなるかということを考えると非常に暗いものがありまして、ちょっと実は数字を持っているのですけれども、二〇二五年、今から一五年後のＧＤＰは、数字で言うと、アメリカが二〇兆ドル、中国がそれに匹敵する一八兆ドル、日本が大体その三分の一ぐらいの五兆六〇〇〇億、こういう差になってきます。もっと言うと、さらに二〇五〇年には、中国が世界でただ一つのスーパーパワーになる七一兆ドル、アメリカがその約半分ぐらいの三九兆ドル、以下、インド三七兆ドル、ブラジル、メキシコ、ロシア、インドネシアと来まして、日本が八位という予想です。つまり、我々はこれから先、経済的な意味では三位の位置から八位に転がり落ちていく時代の日本研究のあり方を構想していかなきゃいけないという非常に難しい状況なんですね。

そういう前提に立って考えると、どこまで日本という縛りを逃れるか、あるいはそれをもっと有効に活用していくのかという問題になってくるのかと思います。それがどういう分野のスタッフをそろえるかということにもかかわってくるかと思うのですけれども、特に社会科学系なんかは、あまり日本という縛りと関係ないという方が多いと思いますから、やはり現に今の日文研のスタッフで社会科学者は所長しかいませんですし――戸部先生、社会科学者ですか。失礼いたしました。

でも、社会学者はいなくなって久しいですよね。グローバル化なんていう言葉があるけれども、それは使いたくないですけれども、そういう中での日本研究のあり方が問われている中で、国家を単位とする発想がなじみにくい分野の人が集まりにくくなっていないでしょうか。かといって、海外での日本研究の需要が世界的にみて急速に低くなっているわけでもない。ただ、長期的に見れば、やっぱり低くなっていくだろうという中で、これは簡単に答えが出るこ

とではないんですけれども、今年二位から三位に転げ落ちたのを機会に、この研究所のあり方そのものを考え直すにはいいタイミングではないかなあというふうに思います。

猪木　この研究所に経済学をやっている人間がいることの意味を今、自分で確認いたしました。ご存じの方もおられると思いますけれども、私は、この研究所は将来的にヒューマニティーの研究所として成長するのが望ましいと思ったのですが、今の山田さんのご発言を聞いて、やっぱり経済学も要ると。ということは、今、数字上、中国が強大な、ばかでかい国になるというふうな推計を今、どこのデータか、私はちょっと知りませんがお話をされた。二〇年間二桁で経済成長をした国というのは、実はこの地球上にデータがある限り存在しないんですよ。中国が一人っ子政策をし、人口も縮むだろうし、私は中国はこれから少ししぼむんじゃないかと推測しています。中国は中国統計年鑑がありますけれども、あの統計年鑑の数字を使って単純に統計的に推計するということはできないと思うんです。ごく直感的に人口構成等を考えていき、そして過去の例を考えると、今、山田先生がベースにされた数字は、やっぱりちょっとおかしいですよということで。

山田　実は私、かつて経済学を勉強したことがありまして、いかに経済学があてにならないかということはよく知っているんですけれども、所長のおっしゃることも種々ある予測の一つということではないでしょうか。

荒木　ちょっと手が挙がりましたので。

鈴木　中身じゃなくて、別のデータを挙げますと、今、国際交流基金が日本語の検定試験をやっていますよね。受験者数だけ言うと、この二〇年間、五年ごとに倍増しています。まだ二〇一〇年の統計が出ていないのだけど、世界でほぼ一〇〇万人です。日本語の検定試験を受

けるほど熱心な人のその伸びが、五年ごとに倍増してきているのです。むしろ、バブルがはじけた後、これを支えているのは漫画とアニメの力なんですが、こういうデータもあるわけです。そして、ジャパン・クールのブーム。そのことを対象にして考えないとしようがないでしょう。国際交流のなかで、この現象をどう見るか。

荒木　わかりました。どうでしょうか。例えば今、ポップカルチャーの話もちょっと出ましたけれども。

山田　数字はやっぱりからくりがあるものでして、それがどういう…。たぶん調査対象が増えているんじゃないかと思うんですけれども。同じ対象に対しての調査であれば問題ないのですが。

鈴木　検定試験の受験者の絶対人数ですよ。地域も回数も増えていますが。日本語学習者でいえば、中国だけで百万という人もいます。山田さんの言うのと、違うデータもありますよと言っているだけ。

細川　経済発展と関心は比例しているという山田の法則ですが、それもやはりかなり今、まゆつばなんですよね。経済的にはもっと小さな例えばフランス、イタリア、例えばイタリアの経済は何位だか知りませんが、それにもかかわらず日本ではイタリアのことをやって、フランス文学をやる人が増えているんですよね。サッカーとファッションと何かとか。

　同じようなことで、日本は漫画とアニメさまさま、そのおかげで、一〇〇万人だか何かに増えている。経済というのは、私たちでどうやっても経済が急にひっくり返るわけではないので、結局のところ、いい研究者をどんどんつくってという、ばかみたいな話ですけれども、ヒューマニティーとソーシャルサイエンスというのはあまり関係ないんじゃないか。やっぱりいい研究があると、例えば磯前さんなり何なりのやっていることがイスラムの人に訴えかけ

て、そういう人がここに来て、英文だけで、フランス語と英語だけで神道を勉強するというようなことがもっともっと増えてくれば、違う形でいろんな交流、ネットワークができてくると思うので。もちろん、経済が予算とかを縛ることはもちろん認めます。

山田　まさに細川先生のおっしゃったとおり、今、フランス、イギリス、イタリアあたりがたぶん、今の順序で言うと七位、八位ぐらいのところに来ると思うんですよ。そういう国々のことが、例えば今、日本でどういう研究をされている、どういう関心を持たれて、どういうふうに研究をされているのか、あるいは世界でどう研究されているのかということ自体を研究することも、ひょっとしたら将来の日本研究を構想していく上では重要かなあというふうに思っております。

劉　一言だけです。中国で村上春樹を除いて一番売れている日本人作家は誰だと思いますか。そうです、渡辺淳一ですよ。そういうソフトパワーも日本にありますからね。そういう意味で私は行く末をとても楽観的に考えております。

特に渡辺は今はもう村上を超える勢いですね。去年、複数の出版社が彼の著作を全部無断で翻訳してしまった事件がありました。本人がたいへん困惑して、それらの出版社を相手に上海で訴訟まで起こしているんです。それだけ彼の人気がすさまじい。ですので、日本はまだまだいくらでも輸出できる文化を持っていると思います。

荒木　渡辺淳一ですか。私の評価は『無影燈』ぐらいまでで止まっているんですけれども（笑）。

それでは、いろいろ議論が展開してきましたし、そろそろフロアのほうの先生方にも一言言いたいという方もかなりおられると思います。

先ほどの研究協力ということで言いますと、現在、客員でこちらに滞在している外国人研究

者の方々も要望とか意見があると思うので、話題を限定せずに、それからステージの先生方も遠慮なく、ちょっと手を挙げていただいて発言をしていただきたいのですけれども、いかがでしょうか。

白幡　国際交流が、日本研究にどのような影響をもつかが議論されているようですが、僕はあまりそういう考えを持たなかった。日文研の任務は何を創造できるかとか、これまでなかったような研究とか、各自がやりたい研究がやりやすい環境さえつくれれば、各人がそれを利用して奔放に研究を進めてその総和が日文研になればいい。私はそういう考えだったので、これから没落するか、発展するかが問題ではなくて、私だけではないですが、自分としてやって大変おもしろかったという研究をどう積み重ねていくかなんです。

それで、国際交流と研究との関係についてオランダでやった国際シンポジウムの話をしたい。これは早川さんも一緒に行ってもらったのですけど、そのときのテーマが「一八世紀の日本とオランダを比較する」という、簡単に言うとそういうテーマで。それで、例えば出版について、オランダの一八世紀の出版と日本の出版の比較をやる、それからオランダの医学と日本の医学、つまり蘭学といって日本に西洋の学問が随分入っていましたけれども、本当にオランダの医学は当時どういう状況でどんな水準にあり、日本の蘭学は何を取り入れたのかという研究をつき合わせるとか、日本側とオランダ側の研究者を一人ずつ対比させて発表してもらい、それをテーマに全員で討論することをやったんですね。

早川さんに分担していただいたのは性的な問題、セクシュアリティーのセッションでした。一番ショックだったのは、向こうに春画に対応するようなテーマを求めたら、返事はポルノグラフィーの専門家はいると。性的な問題をいろんな角度から論じたいと考えたセッションがポ

ルノグラフィー批判のセッションになってしまった。文化の問題なんていう視点はなくて女性が被害者になった良からぬ風習で片付けられてしまう。とにかく衛生問題とか、人類の何ていうのかな、否定すべき側面として見て、性描写なんてものは文化としてとらえるなんてとんでもない風だったですね。早川さんがまた例の調子で――おられますか。明るく明るく春画の読みのおもしろさとすばらしさを述べたのですが、全然反応がない。そこでこっちとしてはますます情熱を込めて議論したんですけれども。

つまり、性的なものは、女性の強いられた商売として、要するに春画を理解するのに、すべて、何というのかな、何か対策、例えば性病の予防とか、そういう関心からだと研究者はいるんだけど、あれを例えば家族が一緒に見るような絵であるとか、人間性の奥の表現であるとかいう早川さんの説、それは全く理解されない。春画が西洋にあったかなかったについてすら答えが返ってこない。本当になかったのか。オランダの一八世紀に春画というようなものがなかったのかというのは、今後の我々の課題だなあなどといって帰ってきたんですけれども。その後、早川さんはユニークな研究を続けておられますけれども、国際的な総合研究といえるようなものは特にやれていないと思います。

我々は日本にあるこういうものは世界中にもあるだろうと思いがちです。春画はあるかもしれませんが、意外に世界にないというものがある。世界にないというのを証明するのは大変難しいんです。というようなことをあれこれ考えると、やっぱりこういう研究はおもしろいなと思って熱心にやって、そうした結果が積み重なって新しい見方が広がったり、さらにそういう研究は必要あるとかないとかというような批判的議論も巻き起こって、そういう中で日本研究あるいは日本文化研究が育っていく、でき上がっていくというのがおもしろい、いい姿ではな

いかなと私は思っています。ぜひ国際交流というのはそういうことを気づかせてくれる大事な場所だというふうな思いで、あまり悩まずに続けたい。

荒木　ありがとうございます。

さっき手が挙がりました、井上先生。

井上　僕らにどういうサービスができるかという話があったので、あえて申し上げたいと思います。

私は若い頃に、日本の宮型霊柩車というテーマに興味を持ちました。でも、これがテーマとしておもしろいということを教えてくれたのはスイスからの留学生でした。宮型霊柩車を見かけたスイス人が、あれは何やと、誰の乗る車やと聞いたのが私の想像を刺激したのです。

ここに初期、グラント・グッドマン先生という方がいらっしゃいました。グッドマン先生は、ケンタッキーフライドチキンの店に立っているカーネルサンダースの人形を見て感動していらっしゃいました。「日本人はおもろいもん、こしらえるな」。私はグッドマン先生に「えっ、アメリカにはないんですか」と聞いたら、「あんなもん、ないですよ」と。そこから私は人形という研究テーマをもらいました。

我々がサービスするだけではないと思います。我々だっていろんなヒントをもらっていると思います。そんな霊柩車とか人形の研究は学会では尊敬されないかもしれません。だけど、私は別にあんまり尊敬されたいとも思っていないので、磯前さんほどには不安を抱いていないんです。別にそんなん、日本研究で尊敬なんかされんでもかまへんやんか。大体学会で尊敬されたがるという人がいやらしいのと違うかな。

話を戻しますが、実は私なんか以上に、白幡さんの花見の研究なんか、ほんまにここのおか

げでできたような研究ですよ。ここに来てはる客員の先生に、「あなたの国に花見のようなものはありますか」と聞きまくって、それで一冊こしらえているんですから、白幡さん、まずそれを告白すべきやで。

だから、ごめんなさい。一方的に我々にどんなサービスが可能かという話ばかりしてたんだけど、我々自身が大いに肥やしにさせてもらっているということを、ぜひ、二五年史を書きとめるエトレの方々に把握しておいてほしいと思って、ついつい手を挙げてしまいました。

荒木　ありがとうございます。では、宇野先生。

宇野　皆さんのすごい体験を大変興味深く聞かせていただいたのですけれど、私は比較的新人なので、外から見た日文研がどうだったかということです。私は、日文研に九九年に赴任する前に、二つの共同研究に参加させていただいていまして、一つは石井紫郎さん、赤澤威さんの「武器の進化」であり、山へ行って木を集めてきて、弓をつくって、矢じりをつくって、さらに三田へイノシシの皮を買いに行きました。それを弓矢で射て、どれだけ突き刺さるかというような研究であります。

もう一つは、千田稔先生のもう少し格調の高い「東アジア交流」であり、どこに日本研究があるんだ、一体どこに日本の縛りがあるんだというようなことが、私には到底わかりませんでした。日本がちょっと入っていたら十分なのかと思いました。

それから、私が理解できなかったのは、国際日本文化研究センターという名前だったんです、そのとき。英語を見ると、「国際」は「研究センター」にかかっているというふうに読み取れるんですけれど、日本語だと到底そういうふうに読み取れない。当たっているかどうかわからないですけれど、これはやっぱりネーミングした人の戦略みたいなものがあって、日本の

縛りのようなことはなく、国際的な研究をして、ちょっとでも日本と関係があれば何でも日本研究だというような、戦略があったような気がします。私は、それが国際協力を進めていくときの日本研究として、非常に利点があるのではないかなというふうに感じています。

私個人は、日本列島の研究というのは、考えただけでもしんどいという感じなので、日文研に来てからシルクロードを主なテーマにしてきました。シルクロードといっても本当は日本なんてほとんどない研究をしているケースが多いんですけれど、とにかく建前としては日本も関係しているということです。フィールド調査が多いので、海外で日本隊だけで仕事できることはありますが、必ず現地の研究者と一緒にフィールドで調査をして、いろんなノウハウをやりとりします。これなんかは、私ができる一番の国際協力です。それぞれの皆さんが、それぞれの学問の質というかお立場でいろんな形で、好きなことをしたら国際協力になるというのが一番いいのではないかなと、私は赴任のときに考えて、今振り返っても、あんまり間違ってなかったと思っております。

以上です。

荒木　ありがとうございます。

私の振り方もあって、今、どちらかといいますと、パネリストの先生方からは割とシステムやセンターというあり方についての問いかけが多かったような印象があるのですが、フロアのほうからは、むしろ個人のパーソナルな研究の総和が要するにセンターを大きくして活発にさせるんだという、ちょうど対立じゃないですけど、おもしろい議論になってきていると思います。ここでぜひ外国人の研究者としていらっしゃっている側から見て、研究協力について今幾つか意見が出ましたけど、どんなふうに映っているのでしょうか。あるいはこうしたほうがい

いとか、お考えがあろうかと思います。さっき、居住空間としての日文研という話がありましたが、いかがでしょうか。何かありませんか。徐さん、お願いします。

徐　韓国から来た徐です。私は今回のセミナー、シンポとは違う、ほかの委員会でたまたまお話をしてくださいということで一回お話ししましたので、それと重なることはちょっと除いて、今回のきょうのこの木曜セミナーのテーマが「国際交流」ということですけど、今までのパネリスト、またフロアの先生方のお話を聞くと、どうしても国際交流というのを、皆さんが海外に行って、シンポとか学会をやるとか、または海外から研究者を招いて、こっちでシンポとかをやる。それだけを想定しているようで、本当は私たちのように、こっちに来ている外国人研究者との交流、これも国際交流に入るのではないかなということを感じました。

さっき、知的コミュニティというような話が出ていたんですけど、自分のような外国人研究員という立場は何なのかと思って、さっき出た日文研の二つの軸、一つは共同研究、もう一つはいわゆる研究協力だけど、じゃあ、私はどっちかと。もちろん共同研究にもオブザーバーとしては入れるんだけど、そこでは、ただのオブザーバーだし、それは継続できるということではないので、本当に、こっちに来ている外国人研究員との交流とか、それがあるのかどうかということです。

もう一つは、もちろん外国人研究員は日文研に来て、いろんな資料が見られる。日文研は研究所としてすごく幅広い、またかなり充実した資料を持っていると思います。

今回、私は日文研フォーラムでお話しするとき、いろんなこと、個人的に今までやってきたことと違う分野の資料を探してみたら、ほとんど日文研は持っていて、それでびっくりしたんですけど。でも、資料というのは、一つは物的な、物質的なものもあるし、もう一つは人、人

間、人的なものも資料の中に入っていると思います。

そこでさっきの共同研究会、または国際交流、または知的コミュニティともかかわるんですけど、私はといったら、東京のほうで留学していたので、関西のほうには、そのような人的なコミュニティとかネットワークは全然ないんですね。研究会はあるとは思うんだけど、そこの中に入るというのがなかなか難しいんです。そうなると、どうしても人的な資料としては、日文研の中の先生方に頼らざるを得ない。そういうことで、そのような面ではちょっと、やっぱり、コミュニケーションとか知的な交流ということが足りないかなということを感じました。

それともう一つは、これは人それぞれの研究の進め方があると思うんですけど、私はちょっと怠け者で、何か機会がないと、例えば発表してくださいとか、お話ししてくださいとか、そんなことがないとなかなか進まないんです。だから、基本的には外国人研究員をお招きして、自由に研究をなさってくださいということは、ある意味では非常に、これは本当にすばらしい研究状況かもしれないんですけど、何も制限がないということは、逆にほったらかしということで、私のように怠け者では研究は進まないという、そのようなことがあって、ある程度は制限みたいな、場合によってはこれをやってくださいというような、ちょっと強制的な何かないと、なかなか研究ということが進んでいかないんだなということを感じました。

荒木　ありがとうございます。

かなり具体的な投げかけがありましたけれども、先生方、何か今のことについて、いや、そうじゃないよということも含めて、もしあれば。いかがでしょうか。

細川　今、義務がない、義務を何か仕事をつくってくれというお声でしたけれども、本当はあるんですよ。あと、逆にそういうものは、日文研に来ている雑務が多過ぎる。いろいろ委員会

なり、フォーラムなり、発表なりが多過ぎるから、もっと減らしてくれと。静かにまとまった大著を書いているというような方もいて、なかなか、やっぱりカウンターパートがそういう人格を見極めつつ協力するしか、たぶんないと思うんですよね、だと思います。

劉　ほぼ同意見ですけれども、私も今まで十数年間カウンターパートをやってきましたが、本当にさまざまなケースがあります。ぜひ何かやらせてほしいという方もいるし、まったくほっといてほしいという方もいる。それを束ねて、我々のほうから何かルールを作るというのはちょっと難しいかと思います。

ただ、あえてこちら側から一つ申し上げますと、やはりせっかく来て頂いたので、ぜひここを拠点に日本の各学会にどんどん出ていってもらうのが望ましいと思います。例えば私の場合は一時に数人を受け入れる場合もありますので、とてもじゃないですが、その全員に逐一付き合ったら時間が足りません。ですので、こちらも協力するが、やはり本人が日本の学会なり、研究者のネットワークなりの中に入って、自らいろいろ交流して頂くとたいへん助かります。ただ、これはその人の性格とか、所属分野でのポジションとか、いろいろ微妙な問題も絡んでいて、ここで活躍したい人もいるし、静かに仕事をしたい人もいるので、ちょっと一様にはなかなか対応しにくいかと思います。

荒木　まさに今、徐先生、細川先生、劉先生おっしゃったそれぞれが当たっていることですので、うまくまとめられませんけれども、日文研というのはダイバーシティー、多様性が面白い研究所で、それぞれの先生がそれぞれ才能を発揮しておられているという大前提に立脚しつつ、先ほどからあるように、いろんな社会情勢とか世界情勢とかで、センターとしての何らかの対応や改革が必要な面もあるようにも思います。あるいはまた、もっと個人が相互にポテン

シャルを上げていけば、それはそれで解決してしまうような局面もある。もうちょっと結論は先になるとは思うんですけど、私などは、さっきも言ったように、日文研ビギナーとして聞いていて、今日の話題はいずれもだいぶん参考になりました。さてどうなるか、一〇年後の私を見ていただくということで（笑）、それでは時間が来ましたので、最後に所長にきれいにまとめていただいて、懇親会へと場を移したいと思います。よろしくお願いいたします。

猪木　私は先ほど冒頭で申し上げた研究協力というのを一つの柱としたという発想自体を評価しました。これは附帯的なもの、なかなか中心的なものになり得ない厄介な仕事だというふうに、今までの学術交流では考えられていたと思うんですね。私は大阪大学に長くおりましたけど、寄付講座なんかに外国の先生が来られて、さっきの徐先生の話と関連するのですけれども、とにかく干渉せんといてくれと。研究室でほんとは寝泊まりしちゃいけないんだけども、寝泊まりして研究をするというような人もいた。いろいろなタイプの方がおられるので、サポート体制をどうするかということで、山田先生は先ほど器用に要求に応えられないということを非常に心配しておられて、それがよい研究機関になり得ないというふうに論理的に結びつけられたんだけど、私はそうじゃないというふうに思います。我々はもういくらでも、こうありたい、こうしてほしいというものはたくさんあるわけですよね。だけど、先ほどの冒頭で申し上げたように、研究協力という活動の原点にもう一度戻るとか、それから研究自体の姿勢みたいなものは、やっぱりこれは分野ごとにスタイルが違うし、メソドロジーも違うから、これは一般化できない。ひとつ確かなことは、好きな研究をやれれば一番いいということ。これは本当にそうだと思います。研究面において自由にやりたいことができるような環境を整えるというのは、私は所長としての仕事だというふうに思いますから。枝葉末節という言い方をする

とよくないと思うんですけど、幹の部分はとにかく忘れないようにということだと思います。

最後にエピソードを一つ申しますと、先週、白幡さんと新潟大学の錦先生とベトナムに五日ばかり行ってきました。そのときに大学での講演会の控室でカザフスタンの女性研究者と偶然会話をすることができました。彼女はベトナムの方ですけれども、ロシアでロシア語を勉強してロシアで教育を受け、そしてある時点から日本語のほうにシフトして、現在は日本語を教えておられたんだけれども、久々に日本研究に戻ってきたと、見事な日本語を話されていました。

そのときに会話の中で、私はその彼女のキャリアをいろいろ聞いて関心があったんですけども、一緒にいた白幡さんが「カザフスタンに花見はありますか」と聞かれたのです。そうしたら、「ない」と言われた。そのときの白幡さんの興奮が伝わってきました。白幡さんは興奮すると目が団十郎みたいに飛び出すんです。「やっぱりそうですか」と満足気に言って。それで彼は一日、何かもう非常に機嫌がよかったんです。

それを最後のエピソードにして、これ以上申し上げることはありません。

荒木　ありがとうございます。

では、瀧井先生にお返しします。

瀧井　談論風発で、私、木曜セミナーの世話役を今年もやることになりましたけれども、私が理想と考えているような木曜セミナーでした。

ただ、個人的にはちょっと寂しかったといいますか、というのは、先ほど社会科学者は所長しかいないと言って、いや、そんなことはない、戸部先生もいるとか言って、ついに私の名前は挙がらなかった。私の立ち位置がよくわかった、そういうセミナーでもありました。

皆さん、どうもご苦労さまでした。ありがとうございました。

パネリスト

磯前順一（国際日本文化研究センター准教授）
猪木武徳（国際日本文化研究センター所長）
テモテ・カーン（国際日本文化研究センター助教）
佐野真由子（国際日本文化研究センター准教授）
細川周平（国際日本文化研究センター教授）
山田奨治（国際日本文化研究センター教授）
劉建輝（国際日本文化研究センター准教授）

司会

荒木浩（国際日本文化研究センター教授）

フロアーからの発言者

井上章一（国際日本文化研究センター教授）
宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授）
白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）
鈴木貞美（国際日本文化研究センター教授）
徐載坤（韓国外国語大学校副教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）

文献、データベース、出版

二〇一一年五月一九日

パネリスト
宇野　隆夫
フレデリック・クレインス
白幡洋三郎
末木文美士
早川　聞多
パトリシア・フィスター
ジョン・ブリーン
光田　和伸
司会
松田　利彦

瀧井　お待たせいたしました。五月の木曜セミナーをこれから開催したいと思います。

これまで三回にわたって行ってきた日文研二五年史を振り返る特別企画の座談会ですけれども、今月はその第四回目ということで、文献、データベース、出版事業ということを取り上げて、これまでの日文研の実績、そして課題、展望というものを自由に話し合っていただきたい

と思います。

それでは早速、本日の司会の松田先生のほうにマイクを渡したいと思います。よろしくお願いします。

松田　皆様、お忙しいところ、きょうはおいでくださりありがとうございました。

二五年史の特別企画である座談会の最終回ということで、今回は、文献、データベース、出版、一言で言えば情報の蓄積と発信にかかわるような話をしたいと思っているわけです。

どの事業も日文研の事業の柱になっているものであり、また日文研の存在理由の大きな一つでもあろうと思います。ざっと現状を言えば、文献については、今、大体四七万冊ぐらいが図書館に収められており、データベースは五二件が作られ、出版も末木先生がご苦労されておりますが、毎年一〇点ほどが欠かさず出されているという状況であります。

このように蓄積が進むと同時に、今は二五年ということを離れても少し節目にかかっているのかなという気も個人的にはしています。例えば、第二図書館が昨年でき上がったわけですが、日文研で図書館の建物が増設されたのは、歴史的に言うと一五年ぶりということになるらしいです。また、早川先生などがご尽力くださっていますが、出版の電子化などといった新しい問題も生じています。

こういったところを考えながら、きょうはそもそもこういった文献、データベース、出版の方針がどういうふうに出てきたのかという昔語りから、今後どういうことに我々が立ち向かっていかなければいけないかという未来の課題まで、ざっくばらんに話を進めていきたいと思っております。

最初に受付のところで資料をいただきました。昭和六二年六月二九日付の「研究資料委員会

の開催について」という、こういうものがあったんだなあというのを私も初めて見たのですが、これは白幡先生がご用意くださったのですか。

白幡　はい。

松田　これを見ると、どうやら今の文献収集の基本方針、つまり外書、基本、専門、目録という形で分かれている基本方針のでき上がりがわかるような感じです。この資料の解説も含めて、そこらあたりのお話を白幡先生からお願いしたいと思います。

白幡　お手元に配りましたが、これは資料の「改ざん」でありまして、Ｂ５で配付されたものです。Ｂ５をＡ４に拡大しています。かつては事務資料はＢ５を基準にして、二枚分をＢ４にしたりしていました。こういう形式も変わったし、それから、きょうなんかの議論ではペーパーレスが主張されています。二五年たつと、本当にいろんなものが変わると思うんですが。

さて、用意した資料ですが、一番最初の基本方針のところにはおもしろいテーマが書かれています。今日また検討し直さなければならないテーマも多々あるかなと思って、用意してみました。

お手元の資料の最初のページは、創立から一ヶ月ぐらい後に、研究資料委員会を開いた時のものです。これより以前、創設の一年前に何を集めるかは、概算要求といいますか、予算要求をしないといけないので、創設準備室ではそれをやっていたんですね。

その方針に基づいて、二ページ目に「研究資料収集計画」というのが出ています。これは亡くなった園田さんが作ったものです。まず最初、「最も基本的な収集図書は、外国語で書かれた日本研究書（以下外書と略す）」と書かれていて、既にもう発足当初からこの方針があったんですね。いつから「外書」という用語を使い始めたのか、この機会にふりかえってみたいと

思っていたのですけど、この前の年にもう「外書」はあらわれています。これは園田さんが言い出したものです。そして、「ＡＮＯの会」でこの言葉を聞いた私は、まだなじみがないので、自分のメモには「外日書」かな（？）と書いています。結局今でも「外書」という言葉が使われている。この資料は、「外書」が委員会で提案されて、その後ずっと使われるようになった最初の公式文書ですね。

しかし、既に最初のところにもう問題点が書いてあります。二枚目に書誌情報だけではいかにも貧弱なので「外書に関連するなんらかの情報を付加する」というふうに書いてあるんです、「研究資料収集計画」の中に。問題点として、みんなで手分けしてやろうということになったので、真剣にやると「個々の教官の負担が重くなり過ぎないか」というぐあいに、園田氏は考えているんですね。

資料収集に関して、理想論はいくらでも言えるけれども、やっぱり基本的には一方で予算というお金のしばりと、他方では我々の能力というか、収集全体への目くばりと収集したものをちゃんと、整頓、分類するなど、能力的・時間的な余裕をもとにした資料整理作業がちゃんとできなかったらいけないということでしょう。もう既に第一回の資料委員会から、こういう問題の検討に入っていたんです。

今も、どの委員会でも、いろんな提案が出てきますけれども、「教官の負担が重くなり過ぎないか」は、わりに日文研では考えて気を遣うテーマで、つまり、それぞれの人たちの研究の時間をいかにより多く確保するか、業務割当で阻害されないようにするかが、資料収集の中でも考えられていたということです。

三枚目、これは亡くなった園田氏が手書きで委員会に提案した図ですが、右上に「外書（外

国人のみた日本）」というのがありまして、「外書」を中心に、例えばこれを収録したような、マイクロフィルムなどを集めることや、左下のほうにある「海外における映像資料」とか、そういうものも集めようということを計画されていました。

ちょっと脱線しますが、「第一回研究資料委員会議事概要」は、今と違って簡単な議事概要。最近、委員会の議事要旨というのがものすごく詳しくなっていって、要旨を読むのも大変で、見終わって大事な点は何だったかなと忘れてしまうような長文の「要旨」があるんですが、概要というものは概要でなければと反省させられます。

で、このとき、おもしろいのは、七月八日にやった委員会の記録ですが、研究部はドナルド・キーン教授、あと助教授だけなんですね。教員メンバーは四人しかいませんでした。そして管理部からは部長、課長二人、係長、そういう方が出ていました。

そのとき議論をやりました結果、決められたのが資料室。まだ集めた資料を置く場所がなかった。資料室の開室。それから、図書館以外に、とにかく自前の建物がないので研究室も含めた建物の基本設計について、これも資料委員会として検討していました。それから三番目「臨時事業資料収集計画」、これは予算がついてきますから、どんな本を買えばいいかというのを緊急に提案しなければならないということで、そういうことも含めて。それから、そのときに一〇ヶ年計画というのを立てようということで、「長期収集計画について」というのが運用されました。上垣外さん、園田さんの配付資料をもとに議論されました。

このとき決まったのが、その後、一〇年続く基本方針ですが、「イ．基本的な参考図書類及び全集類を収集する」、これを「基本図書」と名付ける発想だったんですね。それから「ロ．外国語で書かれた日本研究書を柱として収集する」という外書収集方針もこのときに決まって

おります。

で、「その他」の項目があります。この「その他」では、例えば我々は新たに発足した共同利用研で、国立の研究組織だけれど、実は国立大学の図書館を使えなくなったんです。国立大学の図書館で組織している全国協議会にメンバーとして認めてもらわないと利用できないのです。私も国立大学の出身で同じ国立の日文研に移っただけだと思っていたのですが、元いた京大の資料が使えなくなった。非常に不便になりまして、それで資料課に必要な交渉をしてもらって、国立大学の教員と同じような図書相互利用ができるようになりました。国立大学図書館協議会でしたかに申し入れをして、一～二年後に、図書利用の便宜を図ってもらえるようになったと記憶しています。

設立初期は所蔵研究資料などほとんど何もなくて、そこで資料収集に関して立てるべき方針が多岐にわたっていました。それで、何枚目ですか、「収集文献の全体」という図がありますけれども、この図に従って、外書やその他必要な文献の収集を始めていったということです。

ちょっとここでおもしろいのは、左の隅の四角に書いてある「個人研究に必要とされる研究書」というのが「一人五〇万円」と下に書いてあります。「一人五〇万円程度を限度として自由に選ぶ」と。この五〇万円が当初の「個人研究費」でした。個人研究といっても使えるのは図書購入費に限られていて、個々人が持っている専門性に従って、その専門分野の本については五〇万円を限度として選びなさいと。それが、基本的には本人の研究費であるということになっておりました。

最後のページですが、「メイン・コレクションの構造」として、当初立てられた方針の骨格が書かれています。この方針に基づいて少なくとも一〇年ぐらいで、日文研らしいコレクショ

ンの形を作りたいということで、まず一番目は外国語で書かれた日本研究書、外書を収集すると。それから二番、三番、四番。例えば四番では「映像資料をどのように位置づけるか」ということで、私は、その映像資料収集の方針立案任務に当たることになっており、この日報告しろというふうに決められていたんです。（この日はまだ「外像」という言葉は出てきていません。）外書のほかに、日文研では文字中心の図書以外の資料をぜひ、ほかの研究機関に先駆けて重点的に収集していこうというふうに決まりました。今でも写真、地図、ポスター、絵はがき等、あるいは動画の映画、ビデオというような映像資料を重点的に集めるという方針がありますけれども、それは最初のときから議論されていたものでした。

なぜそういうことを考えたかというと、他の国立大学、歴史ある、由緒ある国立大学というのは何十年、京都大学や東京大学に至っては一〇〇年にも及ぶ収集の歴史を持っているわけですね。そういうところに比べて、ゼロから本を集めるということになります。京都大学、東京大学にあるような本を集めても二番煎じにすぎない。研究に必要なら借りに行けばいいじゃないかと。わざわざそういうものを、あれば便利だからといって図書購入の予算を使うのはよくない。よそがやっていない収集をやってユニークなコレクションをどうやってつくりだすのか、いろいろ考えた末に出てきた一つが外書でした。そしてもう一つが映像資料です。大体、地図や写真というものを図書資料として整頓しながら収集していくというのがなかった。結局この日議論した（園田氏が立てた）方針をもとに、外書、映像資料を中心に収集をしていくことになったわけです。映像資料の収集が提案されるのにあわせて、情報機器といいますか、コンピュータ関連の設備も充実させなければいけないというのが当然出てきて、初期の方針になったわけです。

それが、ほぼこの二五年間、おおむね堅持されてきました。当初も考えていたように、外書だけかという思いは、今また出てきているようですし、一体我々はほかに何か収集すべき大事な資料はないのかと問われていると思います。

それから、映像・画像資料というのも、媒体がどんどん変わっていきますよね。かつては、写真、絵はがき、ポスターというようなものは紙媒体だった。それにビデオや映画というフィルムや磁気テープが入ってきた。今や本当にいろんな多様なデータ形式がある、媒体があるわけですが、それをどう研究に生かすか、どう集めるか、保存するかが議論されていない。

この初期の資料を見ていただいて、ゼロから出発するときにはどんなふうな議論がなされたか、その雰囲気を知ってもらえたらいいかなと思ってこれを出しました。以上です。

松田　ありがとうございます。

私が一二年ほど前に赴任したとき、ちょうど研究資料委員会の委員長が園田先生で、たしかにこういう話を聞いたなあというのを記憶の底から思い出していたところです。

この資料、昭和六二年、一九八八年ですけども、この時点ではまだ、図書館はおろか日文研の建物もまだできていないわけですね。図書館ができて稼働し始めるのは、このさらに二年以上先のことになるんですけども、この時点では計画を立てておいて、予算がつくということが確約されていたのですか。

白幡　いや、大きな方針はあるけれども予算が確約されているわけではなく、毎年概算要求を出して、そのための説明用に作文をする作業の繰り返しでしたね。

それから、収蔵施設の規模を確定するには、一体どういう資料が研究のために必要で、その全体はどれぐらいの量になるのかという計算が必要でした。今回の外書館についても同じよう

にやられたと思うんですけれど。

松田　ありがとうございます。

そういう形で始まった図書収集ですけども、外書あるいはそれ以外にも重要なコレクションというのは幾つかあるわけです。こういうことにかかわった方々、ここにはたくさんいらっしゃいます。早川先生とか、そこらあたりで。

早川　今、白幡さんが言われたように、外書というのは初めから出てきていて、それを中心にしていくと決まっていました。京都外大がそれに近いことをやっていたと思いますが、それを越そうということではじめました。

そして、それだけではということで、映像、画像のデータを集めては、という案が出ました。大体ほかの図書館、大学なんかは、本、テキストの資料が中心で、これはおそらくデータベース化されていくだろう。そのときに日文研としての特色を出すのに、外書の他に映像資料、例えば古地図、古写真、それに図絵類なんかを集めてはどうか。それもハイアート的なイメージ、美術館、博物館が扱うようなイメージじゃなくて、名所図会の中の挿絵とか、ポスター、絵はがき、そういう生活風俗に関係するイメージを大きな柱にしてはどうかということが話し合われました。

ただ、今だと信じられないかもしれませんけれど、一枚の画像をデジタル化するのに、一枚のフロッピーディスクを用いても、ようやく一メガのデータしかとれませんでした。今ではものすごい精密度の高い、データが容易にとれますけれども。

そういう画像をコンピュータで扱うのが非常に難しい頃に、この世界は日進月歩するだろうと予想して、本館ができるときに、情報課というものは必ず設けようと考えていました。その

ときに参考にしたのが民博さんですね。杉田先生には何回も来ていただきました。

ついでに言いますと、その当時は文字データをコンピュータで扱う場合でも、漢字をどう扱うかということが重要な問題だった時期で、日本語ワードプロセッサーがまだ発達してない時期で、一文字一文字打ち込んでいた時代です。画像データに関してはどこともまだ手をつけていない時期だったと思います。

その頃、白幡さんとよく話したのが、ある時間軸で切ったら、その時代に関係するいろんな分野の画像が出て来てその時代が大まかに見られれば面白いなあと語り合ったのを、非常によく覚えています。

今、企画室で「KATSURA—II」でやっている地図の上にそういう画像データを載せようというのは、実はその発想の進歩したものです。文字データと違って画像データで日本研究に新しい発想を生み出すようなデータベースを作りたいというのが、初期の日文研においてみんなでして楽しんでいた空想です。

そういう意味では、初期の夢はだいぶ実現可能になってきたかなというのが、今のところの感想です。

松田　文献及びデータベースも含めて、コレクションの話になっておりますので、コレクション関係に強そうな方のご発言をお願いしたいと思います。光田先生も文庫の創設にかかわられたと思います。

光田　私が日文研へ来ましたのが一九九五年、平成で言うと七年です。このとき、第一回の研究資料委員会が一九八七年ですから、八年たっているわけですが、私はずっと、この昭和六二年の秋、早川さんがちょうど着任なさった前後から、共同研究会が始まりまして、それの第一

回、ドナルド・キーン先生と中西進先生が中心になった「日本文学と『私』」というテーマの研究会に出ておりましたので、初期のことは雰囲気としては知っています。でも、二ヶ月に一遍ぐらい来るだけでしたから、詳しくその裏の舞台まで知っていたわけではないんですが。

着任して非常に驚いたのは、どんどん資料が増えていくということでしたね。ここは国立の機関でしたから、資料というものにかけられるお金は横並びで大体決まっているわけなんです。しかし特例があって、たしかあれは創立されてから一〇年間は、何倍でしたか、普通の基準の五倍とか一〇倍の資料あての予算がおりてくるんだそうです。そうですか、一億ですか。年間一億だそうです。ですから、ちょっと国立大学では想像もつかないような資料が入ってくるわけですね。

あまり内輪のことを言ってはいけないのですが、私は京都大学で助手をしていたので、文学部の国文学研究室の年間資料購入予算というものを知っています。一億に比べるとその一%ぐらいです、多くて二%。ですから、何を買おうなんていうことは、もう相談する余地もないという、そういうところでしたので、こちらへ来て本当に驚きました。

私の関係で言いますと、杉本秀太郎さんという、ここの名誉教授に今なっていらっしゃる方がいらして、その方が、ある資料を買ってくれと資料課のほうに要望して、とてもそんなもの買ってくれるわけがないと心中では思いながら、買ってくれと要望したら、買ってくれた。それがたしか一五〇〇万円。何かと言いますと、それは『平安人物志』という、江戸時代の近世の後期に京都のまちに住んでいた文化人、名士のいわば人物録、「Who's Who」があるんですが、そこに載っている人の書いた短冊です。漢詩、和歌、俳句及び絵画。『平安人物志』に載っている、京都のまちに住んでいた一流の文化人が書いた短冊に限定して収集したものです。

これは、思文閣におられた小笹喜三さんという方が生涯をかけて収集なさったもので、何がおもしろいかというと、ジャンルを超えていろんな人が交際しているわけですが、その交際の手段として短冊があった。俳句を専門にしない人も俳句を書く。和歌を専門にしない人も和歌を書く。もちろん俳人も歌人も絵を描く。そういう交流の証拠として、異文化交流の証拠として短冊というものがある。

もしかすると、日本中で日文研に一点しかないものとして貴重なものに、例えば頼山陽という漢詩人が書いた和歌があります。これ、皆さんはそんなにびっくりしないかもしれませんが、漢詩人は和歌を書かない、日本の仮名文字というものを認めない。それから、日本の神社へ参拝しない。鬼神を避けるというのは儒学の精神ですから、儒者は日本の神社へ参拝しない。お正月にも行かない。初詣しない。徹底しています。ただ、例外があって、北野天満宮とか、ああいう天神様はいいんだそうです。あれは歴史上の人物であったことが確かであるし、何しろ漢文学の神様ですから。中国の関帝廟のようなものだと思えば、北野天満宮には行ってもいいんですが、それ以外の神社には参拝しないんです。

ところが、頼山陽の書いた和歌というのが、実は伊勢神宮へ行って詠んだ和歌なんです。とんでもないことなんです。これ、調べてみますと、お母さんがどうしても伊勢神宮へ行きたいから連れていけと言われて、お母さんの言うことには従ってついていって、仕方なくかどうか知りませんが、そこで詠んだ和歌が短冊になっています。大変なことなんですよね。それ一つだけで、日本の儒者の精神構造みたいなものが、外に対しては非常に固いけれど、家庭内の女性には弱いという精神構造が見えて、日本はやっぱり女の国だなあという感じが、この短冊一つで出ている。中国とはそのあたり違うのではないかと思いますけど。その短冊一枚でエッセ

イとか論文が書けるかもしれないという大変貴重なものなんです。

膨大なものですが、私も着任してすぐその整理に取りかかりまして。杉本先生は私とほぼ入れ替わりでおやめになったので、私がその整理の中心に立たざるを得なくなりまして、今はきちんと整理されています。

そうですね、あれ、私がどんどんそれで論文を書いたほうがよかったんでしょうけど、今、私はちょっとほかのほうへ専門を移していますので、手つかずのままになっています。今、お話したことを含めて、今、聞いていらっしゃる方、どうぞ、もうこのテーマをお譲りしますので、そういうテーマが一〇〇でも二〇〇でも発掘できる資料なんです。日文研の書庫の奥深くにきれいに整理されて眠っています。どうぞ、利用してください。よろしく。

それから、コレクションついでにもう一つ申し上げますと、宗田文庫という文庫があります。これは、宗田一先生という、この方も平成八年、一九九六年、ですから私が着任した翌年に亡くなった方なんですが、この方は日本の民間医療、ちゃんとした専門の医師による治療というよりは、民間による医療の歴史を研究なさった方で、当然そんな資料は全部自前で購入なさって、自分の学問をつくっていかれた方です。日文研の共同研究会のメンバーとして山田慶兒先生のところで随分ご活躍いただいていたのですが、次から次へといろいろ聞いたこともないような資料を持っていらして、それをもとにお話になるので、皆さんが驚いていたようなんです。

その宗田先生がお亡くなりになったときに、そのお持ちの資料を一括して日文研で譲り受けられないかという話が出てきました。ご遺族にお願いすると、寄贈しましょうということだったのだそうです。

これも私が、一九九七年、平成九年から宗田文庫目録編集委員会というのが立ち上がりまして、その委員長になってしまいました。本来は早川さんがなるべきだったんでしょう、なぜか私のほうにお鉢が回ってきまして、それが足かけ五年かかって、仮目録一冊を含めて全部で四冊。これは、日文研でいろんな、コレクションの目録の労作がその後に出ておりますが、その中でも最大でしょうね、仮目録を含めて四分冊というのは。

仮目録のときの前書きというのを私、書いているので、それをちょっと少し読ませてもらいます。これは宗田文庫仮目録、一九九八年に出版されたものです。

宗田文庫と名づけられることになった資料類がセンターに届けられたとき、我々は感動するとともに、呆然とするほかはなかった。その収集は、質において高く、量において膨大であったが、同時に従来の考えではこれをどのように整理し、分類し、利用に供すればよいか戸惑うものも少なくなかった。

平成九年の夏に発足した宗田文庫目録編集委員会は、とりあえず書物の形をなしているもの及びこれに準ずるもので、整理、分類しやすいものをまず仮目録として早急に編集し、一日も早い利用に供することを目標とした。考え方によっては、あるいはそうでないものの中に宗田一氏の収集の神髄があるとさえ言えるかもしれないけれども、それにはまだ長い時間が必要である。

結果として、本になっていない一枚ものはおろか、薬の包み紙の包み方の変遷を示す資料とか、外科手術用の江戸時代のメスであるとか、薬箱であるとか、これはほとんど博物館が扱うもので、図書館にはなじまないのではないかというようなものもたくさんありました。それをどういうふうに目録にするかということが本当に随分かかって、最終的に二〇〇二年の三月、

図版篇の二冊、図版篇のCD―ROMつきですから、二冊をもって終わったわけですね。

ただ、図版はカラーでとったのですが、出版の費用ということがあって、その頃に勃興してきたCD―ROMによれば費用が半分どころか、もう何分の一であるというので、私はちょっと委員長として迷ったんですが、押し切られる形でCD―ROMでいいでしょうという決断をした記憶があります。でも、それはその当時、随分あちこちから恨まれました。「全世界へ送るのに、CD―ROMで図版を見ることができる国が今どれぐらいあるのかわかっていますか」。一部の文明化した国だけでそういうことを決めるのは、やっぱりよくないのではないかというような厳しいご指摘をかなりいただきました。

今はそういうことは、たぶん、世界のかなりの国でもうなくなっているんでしょうけど、私としてはちょっと悔いの残る決断で忘れがたい思い出です。それも今となっては、もう昔話になるのかもしれませんけれども。

以上、簡単に申し上げました。

松田　ありがとうございます。私もよく存じなかった宗田文庫の由来について、とてもよくわかりました。

もう一つ、コレクション通の方として、クレインス先生にお願いしたいのですが、今でも外書の充実にはクレインス先生に大変尽力して頂いております。ちょっとお話しいただければ。

クレインス　まず、私と日文研との出合いなんですが、私の場合はまだベルギー、ルーバン大学にいたときに、*Japan Review* を見たのが初めての日文研との出合いでした。

一回目や二回目の座談会でも日文研のイメージが当初かなり悪かったという話がいろいろと出ていたんですけど、私の場合は *Japan Review* が最初の出合いで、日文研はあこがれの的でし

た。どちらかというと、日本学の総本山みたいな、そういうふうなイメージでした。私は、まだ若かったし、日本学科にいましたので、これはもう最高の研究機関であると思っていました。

その次の出合いというのは、日本に来てから京都大学で研究しているときで、図書館でした。その当時は蘭学の研究をしていて、日文研の図書館に、例えば蘭学者たちが参考にしたブールハーフェの医学書のオランダ語版のような珍しい本がありました。これはおそらく私の恩師の松田清先生が日文研に入れられたと思いますが、彼は日文研で客員教員を務められていたので、たくさんの蘭学資料が日文研にあります。日本のほかのところにないものが日文研にありますので、京都大学にいたときに何度も日文研に足を運んで、ここで調査をしていました。

そのため、私の日文研のイメージというのは専ら図書館のイメージです。二回目の座談会では、共同研究会によって日文研と出合ったという人もわりあい多かったのですが、共同研究というと一九九八年にルーバン大学で国際シンポジウムをやったときに、ルーバン大学側として参加したのが初めての共同研究的な出合いだったんですが、既にその前から図書館をよく利用していました。

そのために、日文研イコール図書館というのが非常に強いイメージで、今でもＯＰＡＣで何か探すときに、例えば京都大学だったら京都大学附属図書館に本があるとか、あるいは東南アジアセンター図書室に本があるんですね。日文研の場合は、「国際日本文化研究センター」しか出てきません。「図書館」ということばは出てこないんですね。つまり、日文研イコール図書館という、ＯＰＡＣで調べるとそうなりますね。

八年前ですが、助手として採用されて、ここで研究するようになってからは、最初は蘭学をやっていたんですが、わりと早く外書の存在を知りました。私はベルギーから日本に来て、日文研の図書館に、オランダ人をはじめヨーロッパ人が日本に来て、日本について書いたものがたくさんあって、懐かしくなって、そういう本ばっかり読むようになり、だんだんと私の研究テーマも外書へシフトしてしまいまして、公式的には医学史、科学史なんですけど、ほとんど九〇％は外書の研究を今やっています。その傍らで収集も行っています。結局、研究すると、これも見たい、あれも見たい、これもない、あれもない。で、その度に古本屋さんで調べたりして、購入願いを出したりしています。

ここで一つわかったのは、まず日文研ほど外書がたくさん集まっている図書館はほかにないことです。ただ、その一方で、世界にある重要な外書の中で、日文研はまだ半分も持っていないですね。まだまだ多くの宝物があちこちに隠れていて、この座談会の最初に掲げられた外書を全部集める、あるいは網羅的に集めるという方針は、これからもたぶん長く続くと思います。

きょう話したいのは、私が外書を使っての将来展望について感じたことなんですが、まず日文研の図書館というのはちょっと特殊な図書館なんですね。普通の大学の図書館とかなり違うと思います。普通の大学の図書館というのは、いろいろな分野のいろいろな学問のための本をできるだけ集めて、いろいろな人が利用できるんですけど、日文研は日本関係の図書しか所蔵していません。これは外書だけではなくて、日本語で書かれた日本についての本も含むと思いますが、そういう非常に特定の分野のいわゆる専門図書館なんですね。だから、日文研の図書館について、ほかの人に話をするときに、「私たち、外書を集めているんですよ」と、一応日本関係図書をできるだけ網羅的に集めようとしているといったところで、大体の反応は「あっ、

そうですか」という、あまりわかってもらえないことが多いんです。

これは、一般の人から見ると、そんなに重要じゃないような気が私はします。ただし、日文研の図書館は一般の人のために建てられたわけではなくて、あくまでも特定の利用者のため、つまり日本学の研究者のために建てられた専門図書館ですので、そこから日文研の図書館の将来展望を考えなければならないと思います。

そこで二点ですが、一つは知識の保管です。いろいろな資料を集めて保管していく、将来のために残していくということなんですが、もう一つは利用者のため、つまり日本学研究者のための情報の伝達、知識の伝達、これも一つ非常に重要なことです。

今、白幡先生が出されたずっと前の収集計画の中に、既にその部分について、園田先生が十分認識されているんですね。どこだったかな、「情報を付加する」と書いてあるんですね。一番に「外書に関連するなんらかの情報を付加する」と。ここで問題点は「教官の負担が重くなり過ぎないか」ということで、確かにそうですね。非常に難しいところで、私もずっと悩んでいるところです。もちろん今はデータベース化が進んで、これも一つの重要な役割で、世界のどこでも日本関係図書を閲覧できますし、かなり進んでいるんです。ただ、それ以上に何か、付加価値をつけることは必要ではないかと私は思います。

そこで、きょうお話をすることをちょっと考えた時に、ふと思ったのは、図書館と共同研究の相乗効果なんですね。実は今、オランダのライデン大学から、フィアレー先生がいらっしゃっていて、オランダ商館日記をはじめ、オランダの文書の権威の先生なんです。これはチャンスと思って、今、週一回、図書館で勉強会を開いています。フィアレー先生と、あと、今私の外書プロジェクトで来て頂いている益満さんと一緒に、三人でいろいろな外書とか、文

書をどんどん見て、いろいろな質問をぶつけたり、調べたりしているところなんです。

とてもおもしろいことばかりが出てきます。特に日本の歴史について、あまり日本の資料に出てこないものを、外国人が見て記録しているものなど、いろいろ出てきているので、今回は一つの試みですが、将来的に、そういう勉強会の記録を何らかの形でインターネットに載せたりして、広く日本学研究者に提供することができないかと思っています。あるいは、まずはレビューのようなものからスタートして、こういう資料にこういうものが書いてある、というような文献紹介をこれから日文研でできるように何とか新しい制度を整備したいです。今すぐではなくても、将来的にそういうことは考えられるのではないかと思います。

以上、考えを述べました。

松田　ありがとうございます。

コレクション関係については、一つのコレクションに一つの教員がおそらく語り尽くせないものを持っていると思います。例えば、日中図書については劉先生にお話しいただいたら、たぶんいろいろ聞けると思うんですが、時間の関係もありますので、代表ということで今の数名の先生にお話しいただきました。

出版の話のほうにそろそろ移ろうかなと思うんですが、クレインス先生が日文研との出合いになった、一つのきっかけである *Japan Review* について、ブリーン先生がお話しくださることになっていますが、とりあえずは出版委員長に敬意を表して、末木先生のほうからまずはお話いただこうと思います。全般的な状況について、思うところとか、端で見ていて随分苦労されているようですので、思いのたけをどうぞ。

末木　苦労していることをわかっていただけて、どうもありがとうございます。

大体、日文研は年寄りをこき使い過ぎ。年寄りも結構元気な方が多くて。次期所長にはぜひ、六〇過ぎぐらいになったらもう一切役職につけないとかいうことをやっていただきたいと希望します。

日文研はいいとこだよとか言われて何も知らないで来て、一年目、サボって、出版委員会も二回ぐらいしか出なかったんですね。それで、様子も全然わからなかったら、いきなり、委員長をやれとか言われて、日文研の出版物は何が何だかよくわからなくて。

実際、正直言って、ここに来るまであまり日文研の出版物って、利用してなかったですね。山折さんの昔の、「日文研叢書」で出したのとか、一、二点ぐらいしか使ったこともなくて。こちらへ来たら、研究室に出版物がどんどん来て、どんどんたまっていく。ろくに見ないで、いずれはゴミになるわけで、もったいないなあというのが、正直なところであります。

ちょうど早川先生が電子化を進めるというので、私はあんまり、電子化とか、新しいのは正直言って好きではない、アナログ人間ですね。井上さんほどではないんですが、極めてそちらにシンパシーを感じる人間です。ですが、これに関しては、ともかく増えるのは嫌ですから、確かになるべく電子化して、もう何も手元にないほうがいいです。そういう時代はもう目に見えています。

いろんな研究所とか大学とか、そういう方向に進めています。どこが先にやるかみたいな問題で。この電子化の問題というのは、また後で早川さんのほうからきっとお話があると思います。

ただ、最初にやると、どうせ苦労しなきゃならないから、ほかのところがやった後でやるほうが得だろうと思うんですけど、早川先生たちが張り切って進めておられるので私も電子出版

派に乗っかるような方向になりました。ただ、これはまだ途中過程でありまして、これからどうなっていくのかわかりませんし、逆に、その過程でいろいろな出版物の問題点みたいなものが出てきたということもあります。おそらくこれがある程度軌道に乗るまでの間で、出版をどういうふうにしていったらいいのかということも、だいぶ変わるだろうと思います。ですから、全く途中状況で、これからどうなっていくのかわからないという感じはしております。

出版物もまた全部出版委員会で扱うのかというと、そうではなくて、広報関係のものもありますし、またシンポジウムなどのものに関しては研究協力委員会のものとかというので、そういう扱いがまた複雑になっていると思いますが、これもおそらく電子化などを通して、もう少し交通整理がなされなければならないだろうと思います。

そういう中で、確かにプラス方向に動いているような問題もあります。例えばこれはこの後ブリーンさんのほうから*Japan Review*のことをお話しになられると思いますし、またフィスターさんのほうから、いわゆるモノグラフのことなどもお話が出ると思いますけど、例えばモノグラフであれば、商業出版社から出版されるようなものが出てきましたし、また日本語の出版物に関しても、「日文研叢書」の商業出版化というふうな方向も進められてきておりまして、そういうものの中には注目を浴びるようなものもぼつぼつ出てきております。まだ完全に順調に行っているというわけではなくて、これからいろいろ検討すべき課題というのは多いながらも、プラス方向が少しずつ出ているのかなという感じはしております。

そんなことで、あんまり大した話ができなくて申しわけありませんが、その後はブリーンさんとかフィスターさんから、具体的なことをお話しいただければと思います。

松田　ありがとうございます。

ブリーン先生、ごめんなさい。今、電子化の話が出たので、むしろ逆の立場というか、先頭に立って引っ張ってこられた宇野先生あたりに、ちょっとお考えをお聞きしたいというところもあるのですけど。

宇野　きょう一番おもしろかったのは白幡先生の資料で、最初の段階からどういうふうに資料を集成するか、それからデータベースをどういうふうに作っていくかという、この二本柱が計画されて、着実に今まで続けられてきたということであります。

私が日文研に赴任しましたのは一九九九年、大体二五年の折り返し地点くらいです。初期を支えられた、非常に活躍された先生方が、十数年の間に、草創期の目標をもとにいろんな蓄積が作られていた頃です。その頃、私が外から見た日文研というのを少しお話しして、それからその電子化というところへまいりたいと思います。

その頃、私なんかが外から見ると、日文研と例えば京都大学人文研などが非常に対照的な研究組織に見えました。旧来の学問のジャンルから言うと、歴史の古い人文研は、図書資料などはるかに充実したものを持っていました。ただ、外から見ると、日文研のほうがはるかに魅力的であり、手前みそかもしれませんけれど、個性的な活動をしているように見えました。それから、情報とかデータベースに非常に積極的に取り組んでいて、一番大事なのは、学問の性質が全然違うというところであります。

外から見て、いろんな先生が活躍されておられたのですが、例えば計量経済学、歴史人口学の速水融先生ですね。初めて数量化の理論を歴史に導入された先生だと思うんですけれど、江戸時代の宗門改帳に基づいた非常にすばらしいデータベースを作られている。今から見ても、あのレベルのものを作るのは非常に難しいというデータベースを作られておられます。

そのほかにも非常に個性的な研究の方が多くて、埴原和郎先生は形質人類学、それから尾本恵市先生はＤＮＡ学。今はＤＮＡなんてちっとも珍らしくないんですけれど、その頃は文系の機関にＤＮＡの分析装置があるなんて考えられないようなことであって、そのお二人が自然科学的な手法に基づいて日本列島多民族論を相互に刺激し合いながら展開をされていました。安田先生もものすごい装置を備えて環境研究をされておられて、赤澤威先生も、やはりＤＮＡに関心を持たれて、ネアンデルタール人とクロマニョン人の関係をＤＮＡから考えておられました。平たく言うと、クロマニョン人とネアンデルタール人のＤＮＡが一致をしたかどうかというような、そういうふうなことを楽しくやっておられて、私にとっては非常に魅力的な研究が多かったということであります。

めぐり合わせでもって、日文研に赴任して一番感心したというか、驚いたことは、大学ではちょっと考えられないほど、情報課が充実したスタッフと設備を持っているということでした。また、これも考えられないことなんですけれど、ＧＩＳ（地理情報システム）という、非常に高価な機器が何とありました。これは使わないといけないということで、それの共同研究を始めて私は今に至っております。ＧＩＳを研究の基礎として、通常の伝統的な方法ではできない研究をＧＩＳを使ってやっていこうということを進められたのは、ひとえに赴任したおかげであるということであります。

それから、何と、資料電子化予算というのがあって、持っているアナログデータを日文研の予算で電子化していただけました。これは本当に助かるといいますか、今や手元にアナログデータは全くなくなってしまう状態になるまで電子化をしていただけました。それで、公開データベースがどんどんと充実されていくことが、私が赴任した頃の日文研の大きな特色の一

つでありました。

それから現在に至りますと、教員のスタッフ構成は少しは変わっているんですが、今、日文研の記録を全部、事務的なものから研究成果まで、すべて電子化をしてデータベースとしていき、出版も電子化をする、ホームページも刷新する、ペーパーレスも進めるというように、やはり日本の中では最先端のことをしています。これはひとえに、初め、日文研を創設したときの構想の延長線上にあるおかげだと考えております。

先ほど私がおもしろかったのは、光田先生がＣＤ－ＲＯＭだと発展途上国では困るということです。今は完全に逆になりまして、情報格差というんじゃなしに、情報ネットワークを使ってくれたら、どんなところでも情報を見ることができるというような時代になっています。おそらく日文研の成果は、すべて電子情報として世界に発信していくことが目前のこととなってきていると考えております。

ただ、私自身はやはりまだ電子化の課題というものがあると思います。私が日文研に赴任した頃の初期の先生方は、情報であるとか、そのための技術を人文的な研究と組み合わせて、非常に個性的な研究をなさっておられました。電子化、情報化というものは、でき上がったあるものを電子的に加工して発信するものではありません。それは一つの役割ですが、電子化する中で、今までになかった方法論を開発して、新しい研究をつくっていくことに電子化の一番の意味があり、それを発展させていく一助、お手伝いができればうれしいというふうに思っております。以上です。

松田　ありがとうございました。

末木先生、宇野先生というちょっと対照的な立場のお二人とも入れることができて、座談会

をした意味がそれだけでもあったというように思います。

ちょっとお待たせしていたんですけども、具体的な出版物の話に行きたいと思います。ブリーン先生、よろしくお願いします。

ブリーン　ありがとうございます。私が日文研に着任したのは、ほぼ三年前になりますけど、日文研での業務は*Japan Review*という超一流の学術雑誌の編集の仕事なんです。僕は編集の資格を持っているわけじゃなくて、編集の経験は過去に結構あるんですけど、日本史研究をやっている傍ら、この雑誌の編集を試行錯誤的にやってきた、そういう感じです。

きょうは*Japan Review*の過去について、二、三、私が気づいたこと、また私が編集長として*Japan Review*の将来について、私が抱いている*Japan Review*の将来像というようなものについて若干話をし、それから最後に、*Japan Review*が今現在直面している問題を二、三、ごく簡単に触れさせていただきたいと思います。

*Japan Review*という学術雑誌は、一九九〇年に創刊を見ました。今年七月に二三号を刊行するわけなんですが、相当長い、さまざまな紆余曲折を経た歴史を持つ学術雑誌です。振り返ってみたときに大きな節目が、大きな画期と言っていいと思うんですけど、それが二つあったように思います。

その一つは、二〇〇〇年、ちょうど鈴木先生が編集長をやっておられた年ですが、一二号が一つの画期をなす。当時は今と違って、所内の教員が持ち回りの二年任期で編集をやっていたわけですけど、その一二号で何が画期的かと言えば、一二号に載った論文は、そのすべてが日本と関係を持つ論文であった。つまり、どういうことかと言えば、それまでの*Japan Review*は、二、三の例外を除いて、日本と全く関係のない論文を掲載していました。例えば中近東の

人類学の研究とか、中国の植物学研究、医学研究、トルコ・シリアの研究、ベトナムの研究などが *Japan Review* に載っていました。

その後、実は一回だけ、私に言わせれば「逆戻り」というのがありまして、先史時代の北ユーラシア大陸の研究が載ったんですけど、一応二〇〇〇年という年を迎えて、*Japan Review* の性格づけがかなり大きく、抜本的に変わったというような見方ができるのではないかと思います。つまり、「アジアレビュー」といいますか、「日文研レビュー」が *Japan Review* になってしまった。そういうような性格づけ、そういうように生まれ変わったのではないか、と言えると思います。

今言いましたのは、トルコ・シリアの研究の質をどうのこうの言っているわけでは決してありません。ただ、日本研究をやっている我々が、*Japan Review* を正直言ってあまり読まなかった、あるいは親しみを持たなかった、なじみを持たなかった理由は、そこにあったのかもしれません。今、クレインス先生のお話で、*Japan Review* が日文研との出合いのきっかけであったとおっしゃって、またそれを読まれて日文研が日本学の総本山みたいな存在だと分かったとおっしゃられたのを聞いて、僕はすごくおもしろいと思っているんですけど、むしろ例外的な経験であったと思います。

第二の画期としては、二〇〇四年に刊行された *Japan Review* の一六号であったと私は思います。この一六号は、私の大先輩に当たるジェームズ・バクスター教授が編集長を務めていた頃のものです。当時はそれまでの持ち回りの二年任期の編集体制をやめまして、編集専門の、しかも母国語が英語の編集長を採用して編集の仕事に当たらせる、という新しい体制が既に導入されていたわけです。

一六号のどこがおもしろいかと言えば、日文研の「紀要」的な性格を*Japan Review*が脱皮した、そういうような見方が成り立つのではないかと思います。それは一六号に載りました募集要項を見れば、よくわかると思います。

英語で読みますが、「*Japan Review* is open to all authors. On occasion, the Editors may invite contributions.」云々とありますが、「*Japan Review* is open to all authors.」という文言が肝心なのです。それまでの募集要項を見てみると「*Japan Review* is open to … research staff, joint researchers」、つまり共同研究会のメンバーですよね。その後「administrative advisors」とありますが、それは果たして何を指して言っているのか、よくわかりません。

一五号までの*Japan Review*は明らかに所内の教員によって作られ、教員のためにある雑誌、そういう性格づけ、色合が非常に強かったのです。一六号はそういった意味では、紀要から、「*Monumenta Nipponica*」とか「*Journal of Japanese Studies*」などのような一流の学術雑誌と肩を並べるような性格のものに初めて生まれ変わった、そういう評価ができると思っています。

ただ、おもしろいことに、そこにはまだ何も査読について書いてないので、僕がかかわった二〇〇九年の二一号に初めて「査読をかけます」という文言を募集要項に入れたんですけど、*Japan Review*でいつ頃から査読を導入したのかについて、僕はまだはっきりわからないので、今日いらっしゃる先生方にぜひ後でおたずねしたいと思います。

この紀要的な性格から学術雑誌的な性格へと移行したことを、僕としてはものすごい肯定的に評価したいんですけど、肯定的にばっかり評価できないところもあると思います。それはどういうことかと言えば、この日文研の所内の専任の先生たちがほとんど*Japan Review*に投稿してくれなくなっちゃったという事実があるからです。もちろん名指しはしませんが、今調べて

みたら、大体三〇人の専任教員がいますが、そのうちの二四人は、論文をまだ投稿したことがありません。編集長の私としては、ぜひぜひ投稿していただきたい。それは教員だけではなくて、外国人研究員もそうなんですけど、どんどん*Japan Review* に論文を寄稿していただくように、ぜひお願いしたいと思います。学術雑誌なので、査読に回します。査読に回すと却下され、修正を依頼されることもありますけど、ぜひとも投稿していただきたいと思います。

あとは、*Japan Review* の過去については、二、三、ごく簡単にちょっと気づいたことを申し上げますと、これもまた「鈴木政権」、鈴木先生が編集長になるところでまた変わったことなんですけど、それまではフランス語とかドイツ語の論文も載っていました。あとは、論文とか研究ノートのほかに、lectures, team research projects, notes, discussions という範疇のものまで*Japan Review* に載っていました。これは制度的にそれを掲載させたわけじゃなくて、何か思いつき的な感じがあって、どれも長続きはしませんでした。それもまた、鈴木先生のときにだいぶ整理されまして、今、論文と研究ノートのみになっています。

これから、*Japan Review* の将来について今考えていることを二、三、話をさせていただきたいんですけど、過去には画期的な節目が二つあったんですけど、僕なんかは全然画期的なことをやろうとは思っていません。

僕の先輩に当たる編集長の方たちが残した実績というか、それを踏襲して若干の軌道修正を行って、新たな方向に、*Japan Review* を引っ張っていきたいと思うんですけど、まず特集をやりたいと思っています。今考えているのは、まだ何も決まってはいませんけど、別冊として特集号を、毎年ではないにしても、定期的に出したいと思います。

過去には、実は、四号、八号、一二号、一四号と特集を組んでいたので、これは決して新た

な展開ではなくて、ただ別冊というのが新しいと。実際に今、陰陽道の特集をやらないかという申し入れがあって、それについて編集委員会の者と相談しているところです。

もう一つ今考えていることは、書評欄を毎号に設けることです。れっきとした学術雑誌、欧米の学術雑誌は、やっぱり書評がないと様になっていないんですよ。*Japan Review* は、世界のすぐれた日本研究に常に目を配っているというか、目を向けていないとだめだと思うので。これから、二四号から書評欄を設けたいと思っています。それも書評を載せるということは、推薦するというわけではなくて、分析的な、批判的な書評にしたいと思っています。

最後に、もっと積極的に *Japan Review* の宣伝をしたいと思っています。過去にはもちろん宣伝はやっています。僕の先輩のジェームズ・バクスター先生は、例えば *Japan Review* が刊行されると、目次までは H-Japan に流してはいるんですけど、僕はもっと積極的にできるところもあるんじゃないかと思って。第一は、名刺がわりに *Japan Review* を配ること。あとは、学会へ行くたびに、事前に *Japan Review* を送ってもらう。私が行っている学会に事前に、出版編集室の白石さんに送ってもらっているので、海外の学会で *Japan Review* を配っています。今考えているのは、来年度のＡＡＳで、*Japan Review* だけではありませんけど、日文研の出版物の展示みたいな、ブースみたいなものを設けたらどうかな、というような話をしているところです。

最後に、*Japan Review* が今直面している課題といいますか問題を二、三、取り上げてみたいと思います。

特に出版関係では、継続性がものすごく大事のように思います。編集長が二年交代じゃなく、そういう編集体制じゃなくて、一人に、僕の場合なんか一〇年近くいさせてもらうかもしれませんので、継続性がものすごく大事なので。編集長もそうなんですけど、編集委員会の交

代もなるべく少なくして、なるべく同じ人材でもっていきたいと思います。同じように、事務のスタッフも、実にすぐれた才能のある編集のスタッフが今、日文研で仕事をしているわけですけど、それもまた、三年交代で手放さなきゃいけなくなるというのは、非常に遺憾のように思います。意見として、ちょっと言わせていただきたいと思います。

あとは全く別の範疇のものとして、*Japan Review* の特徴、*Japan Review* は学際的な雑誌なので、ただ、一つの特徴としては、図版をたくさん載せることができると。フルカラーで、図版、画像をいっぱい載せる。これから僕もどんどん美術史とか、そればっかりではないんですけど、図版をたっぷり *Japan Review* にもっていきたいと思ってはいるんですけど、そこにはいろんな予算の問題もからむので、ここでは細かい話はしませんけど、*Japan Review* の特徴の一つでもある図版、画像をたくさん載せるという、それを持続できるように、それだけの予算をやっぱり組まなければならなくなると思います。

ほかにも言いたいことはたくさんありますけど、長くなってしまったので、この辺でおしまいにしたいと思います。以上です。

松田　ありがとうございます。

確かに *Japan Review*、それから『日本研究』もそうですが、紀要ではないのだ、世界中の日本研究者に開かれていて、ちゃんとレフリーもつく学術雑誌なのだという、そういう改革が目指されてきて、それが実現されつつあるということ、確かにそうだなと思い起こしました。二五年史に残しておいてよい事実だと思います。私も *Japan Review* に投稿していない二四人の教員の一人なので、あまり訳知り顔で語るのは許されないと思いますが。

それでは、フィスター先生に次の話をお願いしたいと思います。英文モノグラフを作るとき

には随分お世話になりました。いろいろ大変なお仕事、いつも感謝しております。

フィスター　ありがとうございます。

和文の出版物に関しては後でいろいろと話が出ると思いますので、日文研モノグラフシリーズについて、簡単に申し上げます。

スタートは一九九八年で、第一集は山田慶兒先生の「The Origins of Acupuncture, Moxibustion, and Decoction」でした。河合隼雄先生が所長をされていた時期だったと思います。日本語を読めない研究者にも日文研専任の先生たちの立派な研究成果を普及するために、特別の予算をいただいて、以来、年に一～二冊を出しています。

私が編集長になったのは二〇〇二年です。先生たちが忙しいこともあり、当時は募集をしても、原稿はなかなか集まりませんでした。そこで、いろいろな先生に相談してみたところ、内容は良いのだけれど、本の装丁があまり魅力的ではなく、海外向けとしては部数も少なすぎるという意見がありました。部数は一〇〇〇部と決まっていますが、とりあえずもう少し立派な本を作りたいと思い、二〇〇六年に刊行した鈴木貞美先生の「The Concept of "Literature" in Japan」以降はハードカバーにしています。

現在までに、海外の出版社と共同で二冊を出しています。山田奨治先生の「Shots in the Dark」をシカゴ大学出版局（University of Chicago Press）と、そして、最近では磯前順一先生の「Japanese Mythology」を英国の Equinox 出版社と共同出版しました。難しい面もあるとは思いますが、今後もできるだけ海外の出版社との共同出版を進め、モノグラフシリーズを世界へ広く普及させていければと思っています。

松田　ありがとうございます。

出版部門というのは、考えてみれば昔は管理部の隅でやっていたものが、今では大きな部屋でやっていて、本当に日文研の事業の柱になっているわけですけれども、そういった機構の改編とか、あるいはお二人が語られなかった日本語の刊行物なんかについても、ちょっと証言をいただければと思うんですけれども、どなたでも。出版関係で補足していただけると。

白幡　教員の皆さんは、それぞれ出版物については関心も強く思い入れも深いと思うんです。出版は大事だ、しかしなぜ大事なのか。創設当初の議論では、研究所であるからには、行われた研究の外部発信が絶対必要であると。この一年何をやってきたのかが問われるから成果を示す必要がある、だから出版物に力を入れるんだという考えが強くありました。名前も存在もほとんど知られていない組織ですから、メンバーの発信こそが大事だった。

なので、初期の考えは、メンバーがどんどん書け、どんどん発信しよう、で、それは内に閉ざされていたからではなく、ここで何が行われているのか世間に知られていないわけで、成果発信のために紀要にもどんどん書け、内部が頑張って書こうと。外部の人に頼らないで、内部のいい研究をどんどん発信していくためにメンバーへのしばりはできるだけ緩くして、紀要的な雑誌を日本語、英語、そしてどんどん商業出版も出そうという感じだったのですね。出版に関しては、最初の五年、一〇年は、性格が違っていたし、違っていて当然だと思います。

きょう話題になっている、資料と情報、それから出版、なんでそんな部門が要るのかを考えておく必要がある。研究所ですから、本来、研究をやって、いい成果を上げるというのが目標です。使うお金は研究のため。そのためには、文系として、余計に資料部分は豊かになければいけない。それから旅費を含む研究費も必要だ。次に、出版を含めて、あるいは情報機器を使った成果発信も必要だ。一体どれぐらいの配分が適当なのか、どれぐらい要求してお金がも

らえるのか、どれぐらい自分たちの研究時間を割いて発信に使っていいのか、いずれも十分な議論が必要です。この二五年間の配分とは違う配分の仕方が今後は必要かもしれないと思っています。

最近は、社会貢献、社会貢献と言われていて、どれぐらい外向けに発信すべきかの物差しをつくろう、という動きがありますね。以前だと、例えば新聞記事にどれぐらい登場しているかとか、テレビに出ているかとか、商業出版でどれぐらい本を出しているかとか、若干の物差しがあった。しかし必ずしもルール化されておらず、社会に向けての発信は重要だという程度だった。

その中で我々が考えるべきなのは、出版という形で、紙媒体の出版、それからもっと違う新しい情報機器での発信、どれぐらいの割合がいいのだろうか。そう簡単に答えは出ないと思いますね。いろいろ現スタッフの中で議論していかなければいけないと思います。

明後日ここで地球研との合同シンポをやるんですが、総合地球環境学研究所、あそこ、名前は研究所なんですよ。日文研は国際日本文化研究センターなんです。この違いは何か。センターというのは、研究だけやっているんじゃなくて、別の業務もある。研究所にすると、それは研究を中心にやるところだと。センターとは、やはり研究以外に、例えば他の研究者の支援だとか、発信だとか、その他もろもろをサポートするような業務もしなければいけない、業務が発生する。それで、初期の日文研構想の時代、梅棹忠夫さんなんかは、「絶対、センターでなければいけない。研究所にしたら、研究者というのは研究しかやらん。人のお世話なんか絶対せん」と。日文研は国費で建てて、なんで国民の税金を使うかというと、日本の文化を、あるいは日本を世界に知ってもらう、そして豊かな交流をするんだと。個々人の研究の成果を上

げることだけに血道を上げるようになってもらったら困るから、センター。で、結局、梅棹さんだけの意見ではないんですけれども、そういうことでセンターになったわけですね。だから、センターというのは外部への発信を考える、それから海外の研究者を支援する、育てる、協力する活動を一生懸命やろうということが義務づけられているわけです。

地球研は何で研究所になったのか。私は、総合地球環境学研究センターになるべきだと思っているんですけど、なぜか名称は研究所になっちゃった。背景として、一つには例えば、理系のほうの研究は実用性の観点から信頼されている。文系はそういう点であまり信用されていなくて、研究だけというと、ほんとに趣味的なものに向かい、自分の関心のあるところだけやる。そういうことがないようにということで、研究センターにされた。

私は研究所になれればいいなあというふうに密かに思うものですが、やっぱりどうしてもやらなければいけない仕事はある。だから、発信の部分での、例えば出版のあり方、それから情報の持ち方と外へ向けての発信の仕方も、その辺を考えて、日文研の任務から考えると、どれぐらいが適当か、どういうことが正しいか、許されるか考えておかなくてはいけないなと思うんですね。そうすると、紀要、雑誌の性格とか、紙媒体と電子発信の割合とか、そういう答えも、そこから出てくるのではと思っております。

松田　ありがとうございました。

瀧井さん、フロアから質問はとるんですか。じゃあ、ちょっと時間も押してきてしまっているんですけども、フロアのほうからご発言あれば、お願いします。

どうぞ、お願いします。

井上　私は、ここでよく、京都大学人文科学研究所の風を吹かせたと思います。きょうも

ちょっと黙りがたかったので、同じいやらしい風を吹かさせてください。

私の先生だった吉田光邦さんという人が、ある研究会を二週間おきにやっていました。そこでは毎回、外書を読んでいました。全員がなんらかの外書を充てられて、ここで言う外書ですよ。当時は外書と呼んでいませんでしたが、外書に当たるものを読んでいました。ことお金の規模は全然違いますが、人文研も外書を集めていました。研究報告の中にも、外書を利用した研究報告、あるいはジョン・マレーの日本ガイドブック、あるいはイギリスやフランスの雑誌・新聞、万国博覧会で開かれた日本に関する情報。韓国や中国、アジアには、当時目がまだ向いていなかったですが、ヨーロッパで受け取られた一九世紀の日本像に関する外書を中心とした共同研究のようなことをやっていました。園田さんもその中にいました。私もその中にいました。白幡さんもその中にいました。

結局、そこを母体にして、そこが母体になったから、外書を収集しようということになったんですね。人文研には気の毒だけれども、予算の規模が全然違う。人文研の吉田光邦研究会で始まったアイデアを私たちはくすねとって、札束で大きく膨らましてしまったという側面は、否応なしにあると思います。にもかかわらず、この国際日本文化研究センターでは、それをめぐる共同研究はあまり、やられてこなかった。そうね、細々とは、あったかな……。クレインスさん、頑張ってください。僕はもう一度あれがよみがえるような、そういう研究所であってほしいなと思っています。

あと一点、図書館のことについて語らせていただきます。よく、ここの図書館が、英国の、イギリスのある図書館を手本にしているというふうに言われます。マスコミでもよくそう伝えられています。これは間違いです。あんなものは手本にしていません。ここが手本にしたの

は、アスプルンドという建築家の、僕、もうそういう勉強をしなくなって、三〇年ぐらいになるんやけど、アスプルンドという建築家のストックホルムに建てた図書館が手本です。内井昭蔵さんも言うてくれました。「みんな、英国英国言うてるけれども、君だけですね、わかってくれるのは」、って。いやらしい話やね、自慢たらしくて。いやらしい話やけれども、これも二五年史の記録にというのでとどめておいてください。

ついでに言うと、今度、ヨーテボリ大学との合同の催しがあるらしいので、ぜひそこの図書館を見に行って、ああ、うちの図書館はストックホルムなんだなと。それを確かめておいていただければうれしいかなと思っています。

以上です。すいません。

松田　ありがとうございます。まさに歴史の証言という感じですが。

ほかにいかがでしょうか。

リュッターマン　色豊かなお話、本当に興味深く伺いました。何よりもありがたいのは、証言とともに資料をいただくことで、お土産をいただいて。ほほえましいと思ったのは、当時はそういう資料委員会でさえ午後五時から開いていたというところで、ああ、そうだな、これも時代かもしれないと思いました。また、あまりほほえましくないと思ったのは、ノートに使ったのが国立民族学博物館という、京都だけじゃなくて大阪からも随分と風が吹いてきたなあというところですね。

最後にお伺いしたいのですけれども、白幡さんの矢印につえ、白幡のしたづき（？）のようなものがあって、字（G？）に見えるんですけれども、それもまた外書を意味しているんですか。いかがですか。（原資料では「白幡『氏』」を「G」と見まちがえられたのでしょう。（松

田）漢字の「氏」です。（白幡）

白幡　外像と今は言っていますけれども、外国人から見た日本イメージ全般、とにかくビジュアル情報を全部集めたいという、そういうレポートを私が出したんですね。そのことです。

それから、民博の用紙が用いられているとの指摘ですが、これは誤解なきように。国立民族学博物館というのは、私は所属しなかったですが、園田さんは一年間、民博の助教授として日文研創設のために動いたんですね。創設準備のためのいろんな機能が、民博に置かれたのです。民博ができるときの創設準備機能は、国文学研究資料館に置かれたのです。既にある組織の中に次の組織のための卵となるような、そういう事務体制ができるんですね。それで、準備室の備品をまだ使っていたということです。

松田　よろしいですか。ほかはいかがですか。

白幡　さっき井上さんが言った図書館設計の話はほぼ当たっているのですが、やっぱりロンドンの大英図書館のリーディングルーム形式のものをつくってくれと何人かの日文研メンバーが言ったいきさつはありますね。

井上　建築家は、施主の依頼によくあっかんべえをするんですよ。表面的には受け入れて、心の中であっかんべえをする。内井さんも、聞き入れたふりはして、アスプルンドでおしきったんでしょう。

白幡　いやいや。図書館の外観は、外から見たらアスプルンドですが…。

井上　いや、中もそうです。

白幡　図書館の中の本の配置は、円形にしか置かないのではなくて、いろんな置き方の注文は、やっぱり日文研のメンバーがああしてくれと内井さんに言った。とはいえこんな風に、最

初に一緒にいたメンバーですら意見が違う。二五年史を書くの、難しいですね。

井上　建築の心得がある人は、ここへくるとみんな言いますよ。アスプルンドやね、って。

白幡　いや、内井さんはそうおっしゃっていましたよ。ただ、内部の図書、棚の配置とか、閲覧用座席の置き方とかこちらの希望を伝えました。図書館を一周するように、壁に本を並べてくれなどと、何人か、少なくとも私はそういうふうに内井さんに頼んだんですね。

井上　内井さんは、英国英国言うてはしゃいでいる人に、話をあわせはったと思います。そのうめあわせでもするつもりやったんかな。私には、アスプルンドの話をよくしたはりました。

白幡　はい。

松田　モデルがいずれにあるのか、実物を見てみたい気がします。ほかはいかがでしょうか。

クレインス　すみません、私からなんですけど。

松田　どうぞ。

クレインス　きょうの井上先生のコメントで初めてわかりましたけど、初期の頃はずっと園田先生が、もっと勉強会やりましょう、外書の勉強会やりましょうとか、よく言われて、奨励してくれましたので、また何かそういう形で考えたいと思います。

早川　よろしいか。

松田　はい、どうぞ。

早川　先ほど、ブリーン先生が言われた*Japan Review*の転換期というのは、そのとおりだと思います。といいますのは、*Japan Review*だけじゃなくて『日本研究』も、初期は白幡さんが言われたように、ここで研究とか活動した成果は、抱え込むんじゃなくて発信して、外に知ってもらわなきゃだめ。そのためには商業出版も積極的に、それからいろんなタイプのものを、早

く出していくということでした。そして、ちょうど一〇周年のとき、スタンフォード大学のベフ先生が見えて、そろそろ日本語の『日本研究』も英文の*Japan Review*も、国際的な日本研究の学術的なものにしてほしい。アメリカにもヨーロッパにも日本学会がありますし、そういうところと組んで、国際的な日本研究の学術誌にしてほしい、その旗振りというか、中心に日文研がなってほしいと言われたのをよく覚えています。

そのとき、園田さんたちと議論したのが、そうした国際的な日本研究の学術誌を出してゆくには、先ほどブリーンさんが言われたように、編集長も含めて、ある時期、スタッフがずっと恒常性を持って見渡している必要がある。そういうスタッフのいろいろなノウハウを蓄積してゆく必要がある。しかしあの時代にまだできなかった。一〇年目のときにはたしか状況的にそれはまだ難しかった。

本格的な出版というのは、事務所の片隅で出来るものではないのですね。ちゃんと出版室みたいなものを設けて、出版専門のスタッフを抱えてやらないといい出版はできない。

これも鈴木さん、園田さんたちが、出版物をいいものにするには、その担当が二〜三年で交代していくような体制では無理で、恒常的に優秀なスタッフを育てていかなきゃならないと考えるようになり、そのきっかけが、ベフ先生が講演で言われたちょうど一〇周年のとき。あの頃からを境にして、鈴木さんが本格的なものにしなきゃだめだということで、査読を付けたり、デザインを工夫するようになった。

実は*Japan Review*は一〇号まで、ものすごくデザインに凝ったんです。一〇号までの表紙デザインは一流のカメラマンの珍しい写真を使ってやったんです。ただもう一つ流れとして、大学とか研究所の紀要は、ハードカバーとか、デザインに凝ったりするのは止めて、中身が勝負

だという考えが出て来て、一一号からは、非常にさっぱりしたものに変わっています。そして今、ブリーン先生が一号一号考えて表現を工夫しておられます。それもいいことだと思います。

松田　ありがとうございます。

ちなみに、手元にある日文研二五年史の原稿では、*Japan Review* も『日本研究』も「紀要」というふうに書かれていて、ここはちょっと、どういうふうに書いたらいいのか、考える必要があるかなという感じです。

そろそろ時間もいっぱいになりましたので、マイクを司会の瀧井先生にお返しして、締めていただきたいと思います。

瀧井　長時間、興味深い話をありがとうございました。

四回にわたって続けてきた二五年史の座談会、ひとまずこれで締めということになります。急病とか海外出張とかで参加していただけなかった先生方、残念ながら若干名おられましたけれども、新旧取りまぜて、非常に多角的に興味深いお話がこの問聞けて、二五年史の編纂事業にも大きな弾みになったのではないかと思っております。

きょうはどうもありがとうございました。

パネリスト

宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授）

フレデリック・クレインス（国際日本文化研究センター准教授）

白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）

末木文美士（国際日本文化研究センター教授）
早川聞多（国際日本文化研究センター教授）
パトリシア・フィスター（国際日本文化研究センター教授）
ジョン・ブリーン（国際日本文化研究センター教授）
光田和伸（国際日本文化研究センター准教授）

司会

松田利彦（国際日本文化研究センター准教授）

フロアーからの発言者

井上章一（国際日本文化研究センター教授）
マルクス・リュッターマン（国際日本文化研究センター准教授）

第１回研究資料委員会議事概要

日　　時：昭和６２年７月８日　　１７：２０～１８：３５
場　　所：研究部会議室
出　席　者：研究部
　　キーン教授，園田助教授，上垣外助教授，白幡助教授，
　　井上助教授
　　管理部
　　泰部長，黒田課長，山本課長，水野係長

委員会は山本課長より，議題及び配布資料の説明があり，次の諸点について審議された。

１．資料室（仮称）の開室について
当面緊急を要しない事項であり，次回までに配布資料を検討することとなった。

２．基本設計について－情報管理施設系－
明日７月９日午後より内井氏、大阪工事事務所長等と打合せがあり，その場で検討することとなった。

３．臨時事業資料収集計画について
次項と合同審議となる。

資料 3–1

研究資料収集計画

国際日本文化研究センターの最も基本的な収集図書は，外国語で書かれた日本研究書（以下外書と略す）である。これらは，日本研究の国際化あるいは国際的な日本研究を推進するために必要な研究資料である。１０年後には，この種のものとしては世界で最大のコレクションになることは確実だと思われる。

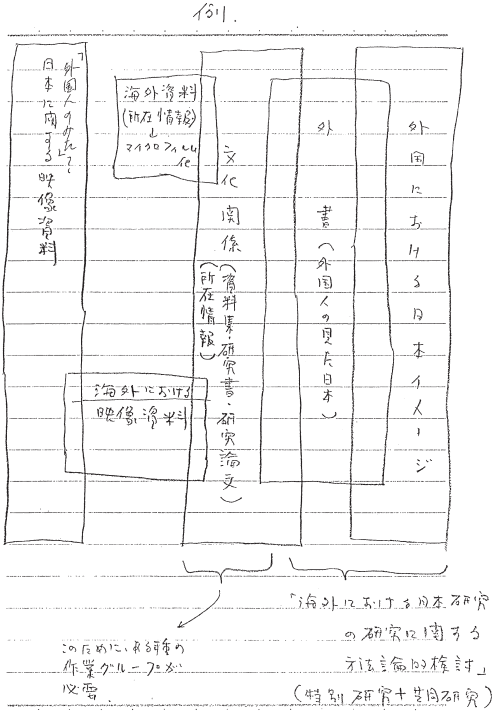
さて問題は，このようにして収集されてきた外書をデータベース化して内外の日本研究者に書誌情報を提供するだけでは，いかにも貧弱過ぎるという点である。したがって，世界における日本研究の情報センターとしての役割を果たすためには以下の可能性について検討すべきではなかろうか。

１．外書に関連するなんらかの情報を付加する。例えば，外書の著者に関する一次資料の所在をリストやその資料の国内におけるマイクロフィルムなどの所在情報を結合させる。さらに，著者に関する研究書あるいは研究論文をリストアップしてデターベース化する。これを図示すると別紙のようになる。
　問題点：教官の負担が重くなり過ぎないか。

２．１つ大きなテーマを決めて，外書以外のコレクションを作る。例えば，文化関係で古代から現代までの文化交渉（広い意味の）に関係する文献と研究情報のデータベースを作成する。外書の著者は日本との文化交渉上の人物である。

３．日本に関する映像資料（絵画・写真・ポスター・日本特集ビデオ・地図・都市図ｅｔｃ）の体系的収集。

資料 1



国立民族学博物館

資料 2

2.

メイン・コレクションの構成

1. 外国語で書かれた日本研究書を、外国人の見た日本（の成果報告）と見なす。

2. このコレクションを一応充実した研究資料群にするために、それに関係するサブ・コレクションを付加する。

3. このようにして収集された資料を「海外における日本研究の動向調査」や、研究協力活動に利用できるように工夫する。

4. 映像資料をどのように位置づけるか問題。

→ 白幡 report.

国立民族学博物館

資料 4

4．長期収集計画について－１０ケ年計画－

上述外、園田氏が配布の資料をもとに、見解を述べられた。種々意見交換ののち、当面の基本的な収集計画は、おおむね次の項目を基本とすることが了承された。

イ．基本的な参考図書類及び全集類を収集する。

ロ．外国語で書かれた日本研究書を柱として収集する。

これらをもとに次回以降継続審議していくこととなった。

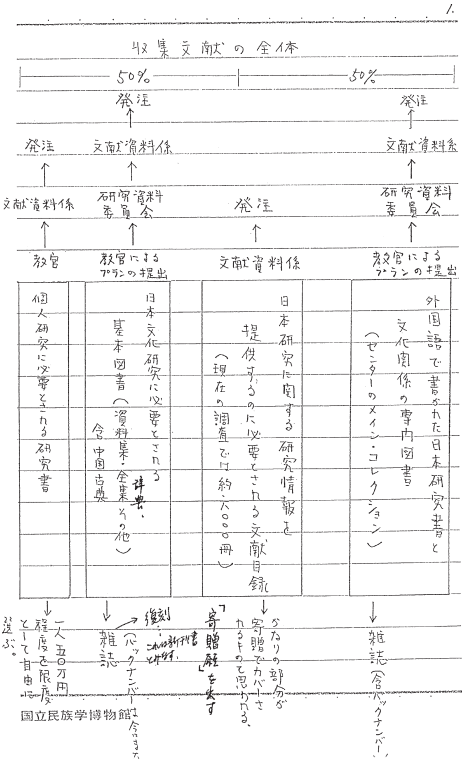
5．その他

当センターの教官が利用する近隣の大学、公共図書館等の利用条件を調査し、利用の便宜をはかることとなった。

次回委員会は、７月２２日（水）午後３時３０分より開催することとなった。

以上

資料 3–2



資料 5

共同研究

（二〇一一年一〇月一日～二〇一二年三月三一日）

文明と身体

（研究代表者　牛村　圭、幹事　劉　建輝）

〔共同研究員名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川本玲子、小堀馨子、佐伯順子、竹村民郎、永井久美子、西原大輔、平松隆円、古川優貴、山中由里子、古田島洋介、白幡洋三郎、稲賀繁美、井上章一、フレデリック・クレインス、郭南燕、堀まどか、楊爽

〔海外共同研究員名〕

眞嶋亜有

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一二年一月六日

稲賀繁美「ブリコラージュとスクラプチャー」

劉　建輝「考える『身体』―日本文化小論」

井上章一、劉　建輝「外から見る日本人の『身体』認識：日中比較文化論の視点から」

井上章一「ヌードとパンツと家父長制　上野千鶴子のおっさん観をめぐって」

討論

〈第三回研究会〉

二〇一二年三月三〇日

岩崎　徹「オペラ『ミカド』の日本での上演史をめぐる一考察」

古川優貴「博士論文『うねる、とけあう：ケニア、初等聾学校の子供の体の動きを事例とした〝共在〟をめぐる

人類学的研究』の概要とケニアフィールドワーク報告」

討論

仏教からみた前近代と近代

（研究代表者　末木文美士、幹事　井上章一）

〔共同研究員名〕

阿部仲麻呂、新井菜穂子、池内恵、大谷栄一、吉永進一、金泰勲、田中悟、陳継東、中島岳志、西村玲、ジェームズ・バスキンド、シルヴィオ・ヴィータ、藤井淳、藤本龍児、前川健一、米田真理子、Orion KLAUTAU、林淳、山田奨治、稲賀繁美、小松和彦、徳永誓子

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一一年一一月二六日

討論「『妙貞問答』出版について」「国際研究集会報告と反省」「論文集編纂・出版について」

怪異・妖怪文化の伝統と創造―研究のさらなる飛躍に向けて―

（研究代表者　小松和彦、幹事　山田奨治）

〔共同研究員名〕

アダム・カバット、今井秀和、香川雅信、木場貴俊、小林健二、近藤瑞木、齋藤真麻理、清水潤、志村三代子、佐々木高弘、高橋明彦、堤邦彦、常光徹、徳田和夫、永原順子、安井眞奈美、正木晃、横山泰子、飯倉義之、プラットゥ・アブラハム・ジョージ、中野洋平、徳永誓子

〔海外共同研究員名〕

マーク・オンブレロ、魯成煥、朴銓烈、マティアス・ハイエク

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一一年一二月一七日

木場貴俊「一七世紀の『怪異』認識について」

常光　徹「風説と怪異・妖怪―流行病と予言獣―」

〈第五回研究会〉

二〇一二年二月二五日

東映京都撮影所にて東映怪談映画資料見学

鷲谷　花「戦後内田吐夢作品における〈甘粕正彦〉の亡霊」

志村三代子「東映の異端・石井輝男―『恐怖奇形人間』（一九六九年）を中心に―」

生命文明の時代を創造する

（研究代表者　安田喜憲、幹事　フレデリック・クレインス）

〔共同研究員名〕

赤池学、石田秀輝、石原三千代、岩田泰、上野景文、上田善隆、戎晃司、大塚邦明、大橋力、小佐野峰忠、加藤忠哉、神谷昌岳、河合徳枝、岸本吉生、北島正一、熊野英介、河野博子、小林俊安、佐藤文一、佐藤真弓、塩谷崇之、塩谷治子、椎川忍、篠上雄彦、清水昭、下原勝憲、秦陽一、杉田定大、菅節子、園部信幸、竹林征三、竹林征雄、田中章義、田中克、谷口正次、鵜謙一、十市勉、中井徳太郎、中山厚、永里善彦、永野博、長野麻子、名越万里子、新妻弘明、仁科エミ、畠山重篤、羽田肇、平川新、平野秀樹、藤崎憲治、古沢広祐、本田学、前田泰宏、眞下正樹、松田美夜子、南敦資、三宅曜子、宮内博美、宮本昌宏、村田泰夫、村山茂樹、森勇介、森鐘一、森勇一、森本英香、山根正義、吉澤保幸、吉田小百合、笠谷和比古

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一一年一〇月八日

安田喜憲、中村時広、野志克仁　開会挨拶

畠山重篤「東日本大震災と森・里・海連環」

菅　康弘『『坂の上の雲』と明治を生きた主人公たち」

パネルディスカッション一「坂の上の雲とこれからの幸福のかたち」

進行：石田秀輝

パネリスト：鈴木一義、中井徳太郎、畠山重篤

パネルディスカッション二「これからの幸福論〜明治維新から東日本大震災までとこれからの日本〜」

進行：吉澤保幸

パネリスト：田中章義、丹治富美子、吉岡幸雄、太田浩史、若松進一

二〇一一年一〇月九日

三好幹二　開会挨拶

畠山重篤　講演

畠山重篤、安田喜憲、若松進一　鼎談「森里海で生きる」

南予の中高生と語る—南予のくらしに確かな未来がある—

進行：長野麻子

パネリスト：後藤健市、斉藤碌、和田てつ子、高橋司

二〇一一年一〇月一〇日

視察

〈第四回研究会〉

二〇一一年一一月五日

安田喜憲　挨拶

竹林征三「福島原発事故からの教訓―環境防災と風土工学―」

篠上雄彦「東日本大震災と鉄鋼業の取り組み～ものづくりとエネルギー問題を考える」

宮本昌宏「復興支援ボランティア活動～企業の取り組みの一例～」

戸田順博「自然界の法則に学ぶ三つの浄化～自分の健康は自分で守る　自分の病気は自分で治す～」

二〇一一年一一月六日

清水　昭「健やかに暮らすために―糖尿病と脳梗塞、生活習慣病との深い関係」

安永大三郎「二一世紀養蚕と山間地の活性化」

テーマ：養蚕と山間地・農村の活性化

一．蚕は伝統産業でしたが、二一世紀最先端の産業となり得ることです。

二．豊かな農村づくり：農村は豊かになれる

三．新しい健康社会の実現

村田泰夫「TPPと日本農業　市場開放と国内農業の両立」

総合討論

〈第五回研究会〉

二〇一二年一月八日

安田喜憲　挨拶

秦　陽一「『まほろばの夢』森林文化協会誌（グリーンパワー）森林文化二〇〇四年五月～〇五年四月号、連載随筆一二回を発表」

永里善彦「国際競争力強化に高度人材育成を」

菅　節子「地方でこそ出来る若者の人間力教育～原点回帰～」

北島正一「森里海連環と地球的課題を三世代にどう伝えるか～九州地域からの報告」

二〇一二年一月九日

田中　克「森里海連環学の原点を稚魚の生態に学ぶ―汽水・干潟域再生の今日的意義―」

藤崎憲治「バイオミミクリー革命と昆虫」

古沢広祐「地球サミット二〇年のいま～リオ＋二〇と生命文明転換への道」

岩田　泰「二〇一二年韓国・麗水（ヨス）万博日本館について」

〈第六回研究会〉

二〇一二年三月二四日

安田喜憲　挨拶

司会：仁科エミ

森　勇一「ムシの考古学―安田先生の環境考古学に学ぶ―」

戎　晃司「巨木・銘木の救済活動についての提案」

竹林征三「風土工学震災復興論」

司会：小佐野峰忠

上野景文「小さなカミ、大きな神」

塩谷崇之「日本人の信仰と森里海の繋がり」

安田喜憲「研究成果のとりまとめについて」

夢と表象―メディア・歴史・文化

（研究代表者　荒木　浩、幹事　マルクス・リュッターマン）

〔共同研究員名〕

安東民兒、池田忍、入口敦志、上野勝之、河東仁、加藤悦子、高橋文治、丹下暖子、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀子、松薗斉、松本郁代、室城秀之、木村朗子、倉本一宏、早川聞多、伊東貴之、郭南燕、榎本渉、楊暁捷、箕浦尚美、中川真弓

〔海外共同研究員名〕

Jorg B. QUENZER、李育娟、Ive COVACI

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一一年一二月三日

荒木　浩「所外研究会開催の趣旨について」

松薗　斉「中世の日記と夢―『看聞日記』を中心に」

小林あづみ「『明恵上人夢記』目録作成を通して

二〇一一年一二月四日

加藤悦子「『春日権現験記絵』にみられる夢の造形について」

研究講演

奥田　勲「明恵上人夢記をめぐって―何を書き、何を書かなかったか―」

〈第五回研究会〉

二〇一二年一月二一日

丹下暖子「女房日記における〈夢〉の諸相」
箕浦尚美「本地物語における申し子譚の位相」
二〇一二年一月二二日
室城秀之「夢の描きかた」
ディスカッション及び本年度研究会のまとめと来年度計画について

デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代

（研究代表者　楊　暁捷、幹事　小松和彦）
〔共同研究員名〕
赤間亮、石川透、海野圭介、大谷節子、大向一輝、大場利康、小峯和明、千本英史、田良島哲、藤原重雄、荒木浩、山田奨治、早川聞多、ギャリー・ジェームズ・ヒッキー、森洋久
〔研究発表〕
〈第二回研究会〉
二〇一一年一一月二六日
山田奨治「文化財デジタル複製の動向と概念」
大場利康「国立国会図書館における古典籍資料デジタル化」

二〇一一年一一月二七日
赤間　亮「古典籍におけるデジタル『画像』時代のメタデータ」
情報交換
〈第三回研究会〉
二〇一二年二月四日
Lawrence MARCEAU
ギャリー・ジェームズ・ヒッキー「展示会とコンピューターヴァーチャル美術館―二〇〇六年メルボルン大学での実例学習」
大向一輝「Linked Open Data と美術館・博物館メタデータ」
二〇一二年二月五日
海野圭介「電子資料館事業の現状と課題」
情報交換、今後の予定

仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論

（研究代表者　フィリップ・ボナン、幹事　稲賀繁美）
〔共同研究員名〕
Cécile ASANUMA-BRICE、阿部順子、江口久美、加藤邦男、

Benoît JACQUET、千代章一郎、Manuel TARDITS、田路貴浩、土居義岳、西田雅嗣、波嵯栄ジェニファしょう子、Sylvie BROSSEAU、Christine VENDREDI-AUZANNEAU、Jacques PEZEU-MASSABUAU、松原康介、松本裕、三宅理一、渡邊一正、朴美貞

〔海外共同研究員名〕

Marc BOURDIER、Nicolas FIEVE、Corinne TIRY-ONO

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一一年一〇月二九日

ミュリエル・ラディック「日本空間に関する美的語彙若干：序破急、廃墟、無常」

ディスカッション

セシル・ビリース「ふたつの語彙注釈検討『長屋』」

西田雅嗣「ふたつの語彙注釈検討『母屋、庇』」

フィリップ・ボナン「日本空間性の語彙とは何か：第二部：『空間性』とは何か？」

ディスカッション

〈第四回研究会〉

二〇一一年一二月一七日

Benoît JACQUET「参道」

江口久美

オーギュスタン・ベルク「日本的空間性の語彙要素：場、縁、風土」

千代章一郎「語彙集収録予定注記に関する報告『復興』」

松原康介「語彙集収録予定注記に関する報告『a preciser』」

西田雅嗣「語彙集収録予定注記に関する報告『家』」

〈第五回研究会〉

二〇一二年二月一一日

Marc BOURDIER「日本的空間性の語彙要素」

松原康介「防災（危機管理）」

渡邊一正「農家」

Manuel TARDITS「地区」

阿部順子「団地」

Marie-Elisabeth FAUROUX「吹き抜け屋台」

近代日本における指導者像と指導者論

（研究代表者　戸部良一、幹事　瀧井一博）

〔共同研究員名〕

五百旗頭薫、河野仁、楠綾子、黒澤文貴、佐古丞、佐藤卓

己、庄司潤一郎、武田知己、中西寛、奈良岡聡智、野中郁次郎、畑野勇、波多野澄雄、小川原正道、猪木武徳、牛村圭、鈴木貞美、松田利彦、フレデリック・ディキンソン

〔海外共同研究員名〕

黄自進

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一一年一〇月一五日

瀧井一博「知の政治家の系譜―伊藤博文と原敬をつなぐもの―」

フレデリック・ディキンソン「戦間期世界における政治指導の課題―浜口雄幸を中心に―」

二〇一一年一〇月一六日

ロー・ダニエル「韓国の大統領制―共和政治の渦巻きと指導者像の追求―」

畑野　勇「陸海統合における軍部大臣のリーダーシップの日米比較」

〈第四回研究会〉

二〇一二年一月二八日

黄　自進「蔣介石のリーダーシップ―満州事変前後の対日政策を中心として―」

武田知己「日本の対英工作一九三六～一九四一―日英開戦前の重光葵と加納久朗―～吉田茂・重光葵・加納久朗を中心に～」

二〇一二年一月二九日

佐藤卓己「論壇における指導力の研究―『世界』と岩波文化を中心に―」

楠　綾子「冷戦と知的コミュニティー」

徳川社会と日本の近代化―一七～一九世紀における日本の文化状況と国際環境―

（研究代表者　笠谷和比古、幹事　佐野真由子）

〔共同研究員名〕

芳賀徹、脇田修、上村敏文、磯田道史、岩下哲典、伊藤奈保子、魚住孝至、大川真、加藤善朗、上垣外憲一、郡司健、小林龍彦、小林善帆、武内恵美子、竹村英二、高橋博巳、谷口昭、長谷川成一、原道生、平井晶子、平木實、平松隆円、藤實久美子、前田勉、真栄平房昭、宮田純、宮崎修多、森田登代子、横谷一子、横山輝樹、和田光俊、辻垣晃一、フレデリック・クレインス、瀧井一博

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一一年一〇月二二日

宮田　純「本多利明の経済政策思想」

長谷川成一「藩領における植生の復元と森林利用」

二〇一一年一〇月二三日

辻垣晃一「森幸安地図の継承について」

和田光俊「日本における西洋天文学の受容と改暦―寛政の改暦について―」

横山輝樹「惣領番入制度、その成立と意義―吉宗期の武芸奨励と関連して―」

総合討論

〈第五回研究会〉

二〇一一年一二月一〇日

平井晶子「東北農村における家の変容」

劉　岳兵「勝海舟の中国認識について」

二〇一一年一二月一一日

横谷一子「徳川時代における高齢者の健康管理について―香月牛山著『老人必用養草』に見る高齢者の健康について」

佐野真由子「米国総領事ハリスの将軍拝謁と『体食』問題をめぐって」

菅　良樹「大阪定番就任者の基礎的考察」

総合討論

〈第六回研究会〉

二〇一二年二月四日

門脇朋裕「法令伝達から見た幕藩関係―盛岡藩を中心に」

高橋博己「文人の京都、十八世紀京都の知と感性―皆川淇園の場合」

二〇一二年二月五日

竹村英二「儒学／漢学と明治初期の知識人」

伊東貴之「明清交替と東アジア世界―清朝の王権理論と朝鮮・日本におけるプロト・ナショナリズムの生成」

芳賀　徹「十八世紀京都の詩と絵画」

総合討論

「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題

（研究代表者　稲賀繁美、幹事　瀧井一博）

〔共同研究員名〕

足立元、伊藤奈保子、今井祐子、鵜飼敦子、大嶋仁、小田部胤久、金田晉、河田明久、衣笠正晃、木下長宏、金惠信、クリシャー・オリヴィエ、呉孟晋、酒井順一郎、佐々木健一、島本浣、鈴木禎宏、戦暁梅、千葉慶、テレング・アイトル、礪波護、西原大輔、西槇偉、芳賀徹、畠山香織、濱下昌宏、林洋子、範麗雅、平川祐弘、平野共余子、平松秀樹、藤原貞朗、松原知生、マリア＝ヘス・デ・プラダ＝ビセンテ、ミシェル・ダルシエ、武藤秀太郎、村井則子、安松みゆき、李建志、陸偉榮、劉岸偉、古田島洋介、橋本順光、劉建輝、パトリシア・フィスター、佐野真由子、井上章一、牛村圭、鈴木貞美、細川周平、磯前順一、山田奨治、マルクス・リュッターマン、堀まどか、小山周子、長門洋平、陳凌虹、吉本弥生、李偉、朴美貞、岡本貴久子

〔海外共同研究員名〕

大橋良介

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一二年一月二〇日

下川耿史「混浴禁止令のさまざまと混浴絵ハガキの流行」

討論

彬子女王「英国における日本美術研究の萌芽—古筆了任を中心に」

討論

前崎信也「近代日本の窯業技術がスタジオ・ポタリー運動に与えた影響について」

討論

帝国と高等教育—東アジアの文脈

（研究代表者　酒井哲哉、幹事　松田利彦）

〔共同研究員名〕

浅野豊美、飯島渉、石川健治、石川裕之、片岡龍、川尻文彦、通堂あゆみ、中生勝美、松田吉郎、米谷匡史、瀧井一博

〔海外共同研究員名〕

呉密察、白永瑞、金昌祿、崔鍾庫、劉書彦

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一一年一〇月一日

松田利彦「京城帝国大学の創設—教員人事を中心として—」

通堂あゆみ「京城帝国大学医学部の『植民地的』特徴」
総合討論
瀧井一博「幣原坦研究の課題と可能性」
石川健治「『京城』の清宮四郎―戦後憲法学の修業時代―」
〈第五回研究会〉
二〇一一年一二月三日
鈴木貞美「創設期帝国大学の学部編制の特徴―その諸問題と東アジアへの拡大をめぐって」
酒井哲哉「研究所という装置―学知における戦争と脱植民地化」
松田吉郎「台北帝国大学文政学部南洋史学の成立と展開」
石川裕之「国立ソウル大学校医科大学に見る植民地高等教育経験者の役割と『遺産』」
浅野豊美「京城帝国大学からソウル大学へ―ミネソタ大学とアメリカの官民経済技術協力の思想的起源」
〈第六回研究会〉
第四二回国際研究集会「帝国と高等教育―東アジアの文脈から」
二〇一二年二月一一日
猪木武徳　挨拶

松田利彦「比較植民地大学史の可能性／不可能性」
セッション一　植民地大学の制度
歐　素瑛「台北帝国大学と台湾学研究」
鈴木貞美「創設期帝国大学の学部編成の特徴―その諸問題と東アジアへの拡大をめぐって」
通堂あゆみ「京城帝国大医学部の機能と構造―医局講座制について」
討論：松田利彦
セッション二　植民地大学の学知
金　昌禄「尾高朝雄と植民地朝鮮」
全　京秀「京城学派の人骨研究と戦時人類学：今村豊の南柯一夢（？）」
中生勝美「台北帝国大学文政学部の土俗・人種学教室におけるフィールドワーク」
討論：酒井哲哉
セッション三　植民地大学の機能
鄭　肯植「韓国における近代法学図書館の形成と京城帝大東洋法学書の特徴」
鄭　駿永「血の人種主義と植民地医学―京城帝大法医学教室の血液型研究」

鄭　麗玲「戦時期台北帝国大学の『学生生活調査』」
王　泰升「植民地近代性の法学：日本植民地統治下台湾の近代法学知識の発展（一八九五―一九四五）」
討論：瀧井一博
二〇一二年二月一二日
セッション四　植民地大学の遺産
崔　鍾庫「ソウル大学における京城帝大法学の遺産」
石川裕之「国立ソウル大学校の発展過程にみる植民地高等教育の『遺産』―医科大学における教員組織の変化に注目して―」
松平徳仁「植民地主義と立憲主義のはざまで」
大浜郁子「琉球大学における『日本復帰』への道程」
討論：浅野豊美
総合討論：有馬　学、飯島　渉、劉　建輝
総括：酒井哲哉

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―

（研究代表者　伊東貴之、幹事　榎本　渉）
〔共同研究員名〕
恩田裕正、小島毅、林文孝、松下道信、水口拓寿、青木隆、垣内景子、片岡龍、黒住真、桑子敏雄、河野哲也、関智英、銭国紅、高橋博巳、田尻祐一郎、陳継東、土田健次郎、手島崇裕、永冨青地、西澤治彦、長谷部英一、横手裕、李梁、末木文美士、鈴木貞美、ジョン・ブリーン、劉建輝
〔海外共同研究員名〕
張翔、陳健成、フレデリック・ジラール
〔研究発表〕
〈第四回研究会〉
二〇一一年一一月一九日
長谷部英一「中国医学における身体と精神」
徐　興慶「日中の思想文化の比較研究を考える―一七～一九世紀に越境した知識人を中心に―」
〈第五回研究会〉
二〇一二年一月二一日
西澤治彦「跪拝の誕生とその変遷」
高橋博巳「東アジアの学芸共和国―発端・興隆（交流）・成熟―」
打ち合わせ

東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に

（研究代表者　鈴木貞美、幹事　伊東貴之）

〔共同研究員名〕

浅岡邦雄、阿毛久芳、荒川清秀、荒木正純、有馬学、磯部敦、井上健、今村忠純、岩月純一、王暁葵、岡田建志、梶山雅史、金子務、上垣外憲一、川島真、川尻文彦、衣笠正晃、木村直恵、権藤愛順、佐藤一樹、佐藤バーバラ、澤田晴美、全美星、須藤遙子、孫安石、孫江、高柳信夫、竹村民郎、竹本寛秋、田中比呂志、陳継東、陳捷、陳力衛、寺澤行忠、十重田裕一、中川成美、中嶋隆、野網摩利子、橋本行洋、林正子、兵藤裕己、平野健一郎、福井純子、増田周子、松田清、真鍋昌賢、村田雄二郎、目野由希、リース・モートン、茂木敏夫、安田敏朗、安野一之、八耳俊文、山本美紀、吉岡亮、李梁、多田伊織、依岡隆児、稲賀繁美、劉建輝、小松和彦、磯前順一、フレデリック・クレインス、郭南燕、堀まどか、金哲、韓東育

〔海外共同研究員名〕

馮天瑜、黄克武、麻国慶、章清、王中忱

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一一年一一月一九日

多田伊織「現代印度学における『日本語表現』の獲得―概念規定をめぐって―」

目野由希「文化外交と社交の概念の相関・編成―戦前期国際ペンクラブにおける矢代幸雄・野口米次郎―」

〈第五回研究会〉

二〇一二年一月二一日

平川祐弘「大和魂の概念」

ジョン・ブリーン「神道という物語：吉田神道から神社本庁まで」

二〇一二年一月二二日

根川幸男「移民子弟教育と『日本精神』―ブラジル日系移民を事例として」

秋山かおり「ハワイの日系人史における『祝い』の概念の変容：ボン・ダンスを中心に」

〈第六回研究会〉

二〇一二年三月一七日

山田有希子「ヘーゲル哲学における生（Leben）と死（Tod）の概念について」

鈴木貞美「エネルギー概念と二〇世紀への転換期の生命

観」

二〇一二年三月一八日

依岡隆児「旧制高校はなぜ『アルト・ハイデルベルク』になったのか～『青春』と『郷愁』の概念をめぐって～」

新大陸の日系移民の歴史と文化

（研究代表者　細川周平、幹事　瀧井一博）

〔共同研究員名〕

赤木妙子、アンジェロ・イシ、粂井輝子、栗山新也、小嶋茂、佐々木剛二、滝田祥子、日比嘉高、松岡秀明、物部ひろみ、森本豊富、守屋友江、柳田利夫、渡会環、根川幸男

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一一年一一月二六日

小嶋　茂「海外移住と移民・邦人・日系人」

栗山新也「戦前における沖縄移民の芸能社会史―移動・生活・芸能」

自由討論

日記の総合的研究

（研究代表者　倉本一宏、幹事　佐野真由子）

〔共同研究員名〕

蘭香代子、有富純也、池田節子、石田俊、板倉則衣、井原今朝男、今谷明、磐下徹、上島享、上野勝之、小倉久美子、小倉慈司、尾上陽介、久冨木原玲、小嶋菜温子、佐藤全敏、佐藤泰弘、古藤真平、下郡剛、シャバリナ・マリア、末松剛、菅原昭英、瀬田勝哉、曽我良成、富田隆、中町美香子、中村康夫、中西和子、名和修、西村さとみ、畑中彩子、藤本孝一、堀井佳代子、カレル・フィアラ、松薗斉、松田泰代、三橋順子、三橋正、森公章、山下克明、横山輝樹、吉川真司、吉川敏子、吉田小百合、近藤好和、荒木浩、稲賀繁美、井上章一、笠谷和比古、鈴木貞美、榎本渉、瀧井一博、マルクス・リュッターマン、門脇朋裕

〔海外共同研究員名〕

呉海航

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一一年一〇月二八日

特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」

展覧
名和　修「御堂関白記」
討議
〈第四回研究会〉
二〇一一年一二月一七日
打ち合わせ
呉　海航「『翁同龢日記』からみた清末大臣の政治的運命について」
堀井佳代子「儀式書における日記の利用―『西宮記』相撲勘物の検討―」
二〇一一年一二月一八日
多田伊織「地震・黒船・明治維新―幕末の若き漢方医学生小島尚絅の日記『日新録』」
上野勝之「古記録における宗教習俗の記載」
三橋　正「古記録の書写と活用―古記録文化を理解するためにー」
〈第五回研究会〉
二〇一二年二月一八日
打ち合わせ
加藤友康「平安貴族による日記利用の諸形態」
二〇一二年二月一九日
佐藤　信「出土した古代の暦史料をめぐって」
松田泰代「日本十進分類法における『日記』という言葉の概念受容史」

基礎領域研究

韓国語運用の基礎／応用（継続）
代表者　松田利彦
概　要　研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

近世風俗未公刊資料解読（継続）
代表者　早川聞多
概　要　センター所蔵の近世風俗資料の解読および変体仮名の解読演習を行う。

古文書研究（継続）
代表者　笠谷和比古
概　要　前近代の草書文字で記された古文書や日記・記録などの読解を行う。

フランス語運用の基礎／応用（継続）

代表者　稲賀繁美

概　要　フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせて必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

比較日本文化研究基礎論（継続）

代表者　小松和彦

概　要　比較論の立場から、日本文化を解明する上で重要な意味を持つ宗教の信仰形態、儀礼、美術、等の諸現象の分析を行い、日本人の精神構造のあり方を明らかにする。

文化論の基礎概念と方法（継続）

代表者　鈴木貞美

概　要　日本文化に関する国際的、学際的研究法の基本について、とりわけ、基礎概念および概念編成について研究を行う。

中国語運用の基礎／応用（継続）

代表者　郭　南燕

概　要　研究その他の業務で中国語を必要とする人に対して、中国語運用の基礎を実践的に訓練し、会話、読解、聴解の習得を目的とする。

日本宗教史基礎研究（継続）

代表者　末木文美士

概　要　日本宗教史に関する基礎的な問題に関して討議し、必要に応じて重要な文献の講読を行う。

彙　報

（平成二三年一〇月一日～
平成二四年三月三一日）

人事異動

◉平成二三年一〇月　一日　就任
（客員）
外国人研究員　劉　克申（上海対外貿易学院教授）
外国人研究員　徐　興慶（台湾大学日本語文学系・日本語文学研究所教授）
◉平成二三年一〇月三一日　契約満了
（客員）
外国人研究員　グエン・ティ・タン・タム（ベトナム科学技術協会技術開発研究所副所長）
◉平成二三年一一月　一日　就任
（客員）
外国人研究員　刘　岳兵（南開大学日本研究院教授）
◉平成二四年　二月二九日　契約満了
（客員）
外国人研究員　金　哲（延世大学校教授）
外国人研究員　朴　賛勝（漢陽大学校東アジア文化研究所所長）
◉平成二四年　三月三一日　契約満了
（客員）
外国人研究員　ロー・ダニエル（財団法人未来工学研究所研究参与）
外国人研究員　王　确（東北師範大学文学院院長）
外国人研究員　フレドリック・リチャード・ディキンソン（ペンシルベニア大学准教授）
◉平成二四年　三月三一日　定年退職
（専任）
研究部教授　安田喜憲
◉平成二四年　三月三一日　任期満了退職
（専任）
所長　猪木武徳
◉平成二四年　三月三一日　任期満了（再任は除く）
（運営会議委員）
竹内　洋（関西大学文学部教授）
錦　仁（新潟大学大学院現代社会文化研究科教授）
宮　一穂（京都精華大学デザイン学部教授）
宮本又郎（関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授）
小松和彦（研究部教授）
鈴木貞美（研究部教授）
（客員）
教授　古田島洋介（明星大学日本文化学部教授）
教授　酒井哲哉（東京大学総合文化研究科教授）
教授　高橋伸彰（立命館大学国際関係学部教授）
准教授　片山杜秀（慶應義塾大学法学部准教授）
准教授　橋本順光（大阪大学大学院文学研究科准教授）

准教授　森　勇一（金城学院大学薬学部講師）
特別客員准教授　齊藤俊文（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

日文研フォーラム

第二四九回［平成二三年一〇月一一日（火）］
発表者　王　确（東北師範大学文学院教授（院長）／日文研外国人研究員）
コメンテーター　劉　建輝准教授
テーマ　美術とコロニアリズムの掛け合い―国策としての偽満州国第一回美術展覧会について―
第二五〇回［平成二三年一一月　八日（火）］
発表者　フレデリック・リチャード・ディキンソン（ペンシルベニア大学准教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　戸部良一教授
テーマ　近代日本の最盛期：明宮嘉仁（のち大正天皇）の生涯を通して
第二五一回［平成二三年一二月一三日（火）］
発表者　金　哲（延世大学校教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　鈴木貞美教授
テーマ　韓国における〈親日派〉言説に関する一つの考察
第二五二回［平成二四年　一月一七日（火）］
発表者　グエン・ティ・オワイン（ベトナム社会科学院准教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　小松和彦副所長
テーマ　ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る
第二五三回［平成二四年　二月一四日（火）］
発表者　劉　克申（上海対外貿易学院日本語学部教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　稲賀繁美教授
テーマ　天寿の域にいたる道―貝原益軒の『養生訓』を中心に―
第二五四回［平成二四年　三月一三日（火）］
発表者　楊　暁捷（カルガリー大学教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　荒木　浩教授
テーマ　帝誅（ころ）しと帝諫（いさ）めの物語―狩野重信筆「帝鑑図・咸陽宮図屏風」を読む―

木曜セミナー

第一八二回［平成二三年一一月一七日（木）］
話　者　山田奨治教授
コメンテーター　細川周平教授、郭　南燕准教授
テーマ　書評「山田奨治著『日本の著作権はなぜこんなに厳しいのか』（人文書院、二〇一一年九月）」
第一八三回［平成二三年一二月二二日（木）］
話　者　ジョン・ブリーン教授
コメンテーター　伊東貴之教授、笠谷和比古教授
テーマ　書評「ジョンブリーン著『儀礼と権力　天皇の明治維新』（平凡社、二〇一一年八月）」
第一八四回［平成二四年　一月一九日（木）］
話　者　小松和彦副所長

コメンテーター　荒木　浩教授、宇野隆夫教授、末木文美士教授
テーマ　書評「小松和彦著『いざなぎ流の研究：歴史のなかのいざなぎ流太夫』（角川学芸出版、二〇一一年九月）」
第一八五回［平成二四年　二月一六日（木）］
話　者　磯前順一准教授
コメンテーター　稲賀繁美教授、マルクス・リュッターマン准教授
テーマ　世界を旅する学問―トランスナショナルな日本研究に向けて―

Nichibunken Evening Seminar

第一六一回［平成二三年一〇月　六日（木）］
発表者　パオラ・ヴォチ（オタゴ大学シニアレクチャラー／日文研外来研究員）
テーマ　Chinese Portable Movies
第一六二回［平成二三年一一月一〇日（木）］
発表者　金　哲（延世大学校教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Resistance and Despair: A Speculation on "Pro-Japanese" Discourse in Korea
第一六三回［平成二三年一二月　八日（木）］
発表者　ヘレナ・グリンシプン（エルサレム・ヘブライ大学付属トルーマン平和研究所博士研究員／日文研外国人来訪研究員）
テーマ　Chain and the City: Conceptualizing Public Space in Japan
第一六四回［平成二四年　二月　二日（木）］
発表者　ギータ・A・キニ（ヴィシュヴァ・バーラティ大学准教授／日文研外来研究員）
テーマ　Japanese Women through the Prism of Proverbs
第一六五回［平成二四年　三月　八日（木）］
発表者　ギャリー・ジェイムズ・ヒッキー（クイーンズランド大学英語・メディア研究・美術史学科美術館研究主査／日文研外国人研究員）
テーマ　Masterworks of *Ukiyo-e* in an Australian Collection

レクチャー

第一三二回［平成二三年一〇月　七日］
発表者　與那覇潤（愛知県立大学准教授）
テーマ　日本帝国における植民地化―朝鮮半島と琉球
第一三三回［平成二四年　二月　一日］
発表者　朴　裕河（世宗大学日本文学科教授）
テーマ　引揚げ―帝国と冷戦のはざまで

学術講演会

第五〇回［平成二四年　三月二三日（金）］
【安田喜憲教授退任記念講演会】
講演者　ジョン・ブリーン教授
テーマ　『神都』物語：明治期の伊勢について
講演者　安田喜憲教授
テーマ　環境考古学への道
司　会　井上章一教授

一般公開

［平成二三年一〇月二七日］

【セミナー】

テーマ　地震と生きる日本人

話　者　小松和彦副所長、安田喜憲教授

司　会　細川周平教授

【日文研の海外活動紹介】

話　者　郭　南燕准教授、佐野真由子准教授、松田利彦准教授

司　会　細川周平教授

【日文研木曜セミナー特別企画】

テーマ　私の日本研究

発表者　荒木　浩教授、稲賀繁美教授、宇野隆夫教授、マルクス・リュッターマン准教授

司　会　瀧井一博准教授

公開講演会

【第四一回国際研究集会】［平成二三年一〇月一五日（土）］

テーマ　仏教と平和

講　演　平和主義と仏教の社会参加

講演者　ランジャナ・ムコパディヤーヤ（デリー大学准教授）

講　演　仏教と平和：再生への道

講演者　ブライアン・ヴィクトリア（アンティオク大学教授）

司　会　末木文美士教授

講　評　井上章一教授

伝統文化芸術総合研究プロジェクト

【伝統文化プロジェクト公演会】［平成二四年二月一七日（金）］

新作能『ルター』（試作）

趣旨説明　笠谷和比古教授

解　説　新作能『ルター』をめぐって

解説者　上村敏文（ルーテル学院大学准教授／日文研共同研究員）

実　演　新作能『ルター』（試演）

ルター　上田公威（シテ方観世流）、キチカエ　上田拓司（シテ方観世流）、笛　竹市学（笛方藤田流）、地謡　上田大介／藤谷音彌／上田宜照／上田彰敏／上田顕崇（シテ方観世流）、創案　上村敏文、監修　大倉源次郎（小鼓方大倉流十六世宗家）、コーディネーター　笠谷和比古教授

その他の講演会

【猪木所長退任記念講演会】

［平成二四年　三月二九日（木）］

講演者　猪木武徳所長

テーマ　日文研で感じたこと、考えたこと

シンポジウム

第一〇四回［平成二三年一一月二五日（金）］

主宰者　劉　建輝准教授

テーマ　生態、環境、資源から見る近代『満洲』：前近代からの連続・非連続を中心に

参加者　三九名

第一〇五回［平成二四年　一月二一日（土）］

主宰者　劉　建輝准教授

テーマ　『外地』文学の言説的ネットワーク

―台湾と『満洲』の対話―
参加者　二七名（国内二三名、国外四名）
第一〇六回［平成二四年　二月　三日（金）～四日（土）］
主宰者　磯前順一准教授
テーマ　植民地朝鮮と宗教―トランスナショナルな帝国史の叙述にむけて
参加者　四二名（国内三六名、国外六名）
第一〇七回［平成二四年二月一三日（月）］
主宰者　松田利彦准教授
テーマ　植民地裁判資料の活用―韓国大法院所蔵民事判決文を中心に
参加者　一七名（国内一四名、国外三名）

海外研究交流シンポジウム

［平成二四年　二月二二日（水）～二三日（木）］
テーマ　私の研究アプローチ
場所　ホテル・アルマダ・ペタリンジャヤ（マレーシア）
代表者　山田奨治教授
参加者　三七名（日本側六名、現地三一名）

国際研究集会

第四一回［平成二三年一〇月一二日（水）～一五日（土）］
テーマ　近代と仏教
研究代表者　末木文美士教授
参加者　九八名（国内九〇名、国外八名）
第四二回［平成二四年　二月一〇日（金）～一二日（日）］
テーマ　帝国と高等教育―東アジアの文脈から
研究代表者　酒井哲哉客員教授
参加者　五七名（国内四九名、国外八名）

会議

運営会議

第二六回　平成二三年一二月　九日（金）
第二七回　平成二四年　三月　九日（金）

調整会議

第一五三回　平成二三年一〇月　五日（水）
第一五四回　平成二三年一〇月一九日（水）
第一五五回　平成二三年一一月　一日（火）
第一五六回　平成二三年一一月一五日（火）
第一五七回　平成二三年一二月　七日（水）
第一五八回　平成二三年一二月二一日（水）
第一五九回　平成二四年　一月　五日（木）
第一六〇回　平成二四年　一月一八日（水）
第一六一回　平成二四年　二月　一日（水）
第一六二回　平成二四年　二月一五日（水）
第一六三回　平成二四年　三月　七日（水）
第一六四回　平成二四年　三月二一日（水）

センター会議

第一五三回　平成二三年一〇月　六日（木）
第一五四回　平成二三年一〇月二〇日（木）
第一五五回　平成二三年一一月　二日（水）
第一五六回　平成二三年一一月一七日（木）
第一五七回　平成二三年一二月　八日（木）
第一五八回　平成二三年一二月二二日（木）
第一五九回　平成二四年　一月　五日（木）
第一六〇回　平成二四年　一月一九日（木）
第一六一回　平成二四年　二月　二日（木）

第一六二回　平成二四年　二月一六日（木）
第一六三回　平成二四年　三月　八日（木）
第一六四回　平成二四年　三月二二日（木）

外国人来訪者

一二月八日　周　宪（南京大学人文社会科学高等研究院院長）計八名
平成二四年
二月七日　李　鐘徹（韓国学中央研究院教授）計二名
二月七日　Amridin Berdimurodov（ウズベキスタン共和国科学アカデミーサマルカンド考古学研究所所長）計三名
二月二八日　Chung-Kil Chung（韓国学中央研究院院長）計三名

海外渡航

佐野真由子　准教授
目　的　メルボルンコンベンション・エキシビジョンセンターにて会議出席
目的国　オーストラリア
期　間　平成二三年一〇月二日～七日

郭　南燕　准教授
目　的　中央研究院にてシンポジム出席、発表及び資料調査
目的国　台湾
期　間　平成二三年一〇月六日～一一日

ジョン・ブリーン　教授
目　的　アートワーカーズギルドにて学会出席及び発表、英国公文書館にて資料調査
目的国　イギリス
期　間　平成二三年一〇月六日～一八日

稲賀繁美　教授
目　的　ベルリン日独センターにてシンポジウム出席及び講演
目的国　ドイツ
期　間　平成二三年一〇月一二日～一七日

鈴木貞美　教授
目　的　復旦大学等にて講演
目的国　中国
期　間　平成二三年一〇月一八日～二八日

ジョン・ブリーン　教授
目　的　南開大学日本研究院にて講演、中国社会科学院日本研究所にて講演及び会談
目的国　中国
期　間　平成二三年一〇月二六日～三〇日

佐野真由子　准教授
目　的　フィンランド国際問題研究所にて面談及び打ち合わせ
目的国　フィンランド等
期　間　平成二三年一〇月二八日～一一月七日

白幡洋三郎　教授
目　的　ヘルシンキ市にて史跡調査、ストックホルム市にて資料調査及びヒアリング
目的国　フィンランド、スウェーデン
期　間　平成二三年一〇月三一日～一一月六日

鈴木貞美　教授
目　的　南京郵電大学にて講演及び情報収集、南京大学にて学会出席及び情報収集
目的国　中国

期　間　平成二三年一一月二日～七日

磯前順一　准教授

目　的　チューリッヒ大学にてワークショップ開催、公開講義

目的国　スイス

期　間　平成二三年一一月九日～平成二四年一月一一日

笠谷和比古　教授

目　的　香港大学にて史跡見学、学会出席及び講演

目的国　中国

期　間　平成二三年一一月一五日～一九日

瀧井一博　准教授

目　的　成均館大学にてシンポジウム出席、発表及び意見交換

目的国　韓国

期　間　平成二三年一一月二四日～二七日

松田利彦　准教授

目　的　中央研究院等にて講演及び資料調査

目的国　台湾

期　間　平成二三年一一月二四日～三〇日

佐野真由子　准教授

目　的　財団法人交流協会台北事務所にて会議出席

目的国　台湾

期　間　平成二三年一一月二六日～二八日

山田奨治　教授

目　的　ハーバード大学イェンチン図書館にて資料調査

目的国　アメリカ

期　間　平成二三年一一月二九日～一二月五日

パトリシア・フィスター　教授

目　的　ピッツバーグ大学にて資料調査、面会、情報提供及びセミナーにて発表、フリックアート&ヒストリカルセンターにて見学及び資料調査

目的国　アメリカ

期　間　平成二三年一二月二日～八日

荒木　浩　教授

目　的　ホーチミン市社会科学大学等にてシンポジウム出席、発表、情報収集及び研究打ち合わせ

目的国　ベトナム

期　間　平成二三年一二月五日～一三日

戸部良一　教授

目　的　ロシア科学アカデミー東洋研究所にて会議出席及び報告

目的国　ロシア

期　間　平成二三年一二月七日～一〇日

稲賀繁美　教授

目　的　香港中文大学にて会議出席及び発表

目的国　中国

期　間　平成二三年一二月九日～一二日

榎本　渉　准教授

目　的　寧波博物館にて学会出席及び発表

目的国　中国

期　間　平成二三年一二月九日～一二日

郭　南燕　准教授

目　的　上海図書館にて資料調査

目的国　中国

期　間　平成二三年一二月一四日～二〇日

瀧井一博　准教授
目　的　台湾大学、国家図書館台湾分館にて資料調査、国立中山大学にてセミナー出席及び広報活動
目的国　台湾
期　間　平成二四年一月九日～一三日
戸部良一　教授
目　的　中国社会科学院等にて視察及び意見交換
目的国　中国
期　間　平成二四年一月一一日～一五日
宇野隆夫　教授
目　的　胡朝城にて史跡調査
目的国　ベトナム
期　間　平成二四年一月一一日～一八日
白幡洋三郎　教授
目　的　都市史研究所、ニュルンベルク市立文書館にて資料調査
目的国　ドイツ
期　間　平成二四年一月二〇日～二六日

佐野真由子　准教授
目　的　ホテルウェストミンスター・ニースにてシンポジウム出席、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館にて資料調査、シンポジウム出席及び発表
目的国　フランス、イギリス
期　間　平成二四年一月一八日～二月五日
安田喜憲　教授
目　的　在コロンビア日本国大使館等にて資料調査及び史跡調査、ゲーテ資料館にて資料収集、ドイツポツダム地球学研究所にて試料解析
目的国　コロンビア、ドイツ
期　間　平成二四年二月一二日～二八日
劉　建輝　准教授
目　的　台湾大学にてシンポジウム出席及び発表
目的国　台湾
期　間　平成二四年二月一五日～一八日
山田奨治　教授
目　的　ホテル・アルマダ・ペタリンジャヤにてワークショップ開催及びシンポジウム出席
目的国　マレーシア
期　間　平成二四年二月二〇日～二四日
戸部良一　教授
目　的　ホテル・アルマダ・ペタリンジャヤにてワークショップ開催及びシンポジウム出席
目的国　マレーシア
期　間　平成二四年二月二〇日～二四日
荒木　浩　教授
目　的　ホテル・アルマダ・ペタリンジャヤにてワークショップ開催及びシンポジウム出席
目的国　マレーシア
期　間　平成二四年二月二〇日～二四日
榎本　渉　准教授
目　的　ホテル・アルマダ・ペタリンジャヤにてワークショップ開催及びシンポジウム出席
目的国　マレーシア

期　間　平成二四年二月二〇日～二四日

郭　南燕　准教授

目　的　ホテル・アルマダ・ペタリンジャヤにてワークショップ開催及びシンポジウム出席

目的国　マレーシア

期　間　平成二四年二月二〇日～二四日

パトリシア・フィスター　教授

目　的　クシナガラ村等にて史跡調査、ルンビニ園等にて史跡調査

目的国　インド、ネパール

期　間　平成二四年二月二一日～三月一日

荒木　浩　教授

目　的　中国人民大学にて学会出席及び発表、情報資料収集

目的国　中国

期　間　平成二四年二月二五日～二九日

末木文美士　教授

目　的　コレージュ・ド・フランスにてシンポジウム出席及び発表

目的国　フランス

期　間　平成二四年二月二八日～三月四日

小松和彦　副所長

目　的　ブカレスト大学にて情報収集、シンポジウム出席及び発表

目的国　ルーマニア

期　間　平成二四年二月二九日～三月七日

郭　南燕　准教授

目　的　ブカレスト大学にて情報収集、シンポジウム出席

目的国　ルーマニア

期　間　平成二四年二月二九日～三月七日

郭　南燕　准教授

目　的　国立中興大学にてワークショップ出席及び発表

目的国　台湾

期　間　平成二四年三月七日～一二日

ジョン・ブリーン　教授

目　的　英国公文書館にて資料収集、トロントホテル・シェラトンセンターにて開催される学会でのブース出展

目的国　イギリス、カナダ

期　間　平成二四年三月一〇日～二〇日

山田奨治　教授

目　的　シェラトンセンタートロントホテルにて開催される学会でのブース出展

目的国　カナダ

期　間　平成二四年三月一三日～二〇日

安田喜憲　教授

目　的　カンボジア文化芸術省にて調査整理、成果報告書取りまとめ及び打ち合わせ、プンスナイ遺跡博物館にて視察及び史料整理、シンガポール応用地質株式会社にて研究打ち合わせ

目的国　カンボジア、シンガポール

期　間　平成二四年三月一四日～一八日

磯前順一　准教授

目　的　トロントホテル・シェラトンセンターにて学会出席及び発表、スクエアサウスホテル・トリップタイムズにて打ち合わせ

目的国　カナダ、アメリカ

期　間　平成二四年三月一四日～二〇日

荒木　浩　教授
目　的　トロントホテル・シェラトンセンターにて学会出席及び発表、情報資料収集
目的国　カナダ
期　間　平成二四年三月一四日～二一日

稲賀繁美　教授
目　的　トロントホテル・シェラトンセンターにて学会出席及び発表、情報収集、The Power Institute Foundation for Art and Visual Cultureにて学会出席及び発表、情報収集
目的国　カナダ、オーストラリア
期　間　平成二四年三月一四日～二五日

佐野真由子　准教授
目　的　英国公文書館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館にて資料調査
目的国　イギリス
期　間　平成二四年三月一四日～三一日

瀧井一博　准教授
目　的　復旦大学にて講義
目的国　中国
期　間　平成二四年三月一八日～二五日

郭　南燕　准教授
目　的　上海図書館等にて資料調査
目的国　中国
期　間　平成二四年三月二三日～三一日

劉　建輝　准教授
目　的　東北師範大学、清華大学にて打ち合わせ及び資料調査、資料収集
目的国　台湾
期　間　平成二四年三月二六日～三一日

山田奨治　教授
目　的　ハーバード大学ライシャワー研究所にて資料調査
目的国　アメリカ
期　間　平成二四年三月三〇日～五月一九日

所員活動一覧（二〇一一年一〇月一日～二〇一二年三月三一日）

荒木　浩

●論文

"A New Approach to the Lost Book *Uji Dainagon Monogatari* as a Crucial Prehistory of the Birth of the Konjuku Tales"、『国際会議　日本とベトナム文学―東アジアの視点から』ホーチミン市社会科学大学、国際交流基金　二〇一一年一二月

"The Time-Space Continuum of Commentaries: From the Perspective of Medieval Literature and the Study of Narrative Tales"、*TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONA CONFERENCE OF EASTERN STUDIES* No. LVI 2011（『國際東方學者會議紀要』第五六冊）財團法人東方學會　二〇一二年一月

「『方丈記』の文体と思想―その結構をめぐって―」『文学《特集》方丈記八〇〇年』隔月刊　第一三巻・第二号、二〇一二年三・四月号　二〇一二年三月

「釈教歌と石鹸―宮澤賢治の〈有明〉再読―」プラット・アブラハム・ジョージ、小松和彦編『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』法蔵館　二〇一二年三月

「月はどんな顔をしている?―譬喩と擬人化のローカリズム」三谷研爾編『Between "National and Regional" Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures』大阪大学文学研究科　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「方丈記を味わう」（連載二五回）『京都新聞』日曜版ジュニアタイムズ　二〇一一年一〇月二日～二〇一二年三月二五日

伊東貴之

●著書

溝口雄三著『中国思想のエッセンスⅠ―異と同のあいだ』『中国思想のエッセンスⅡ―東往西来』（編集）岩波書店　二〇一一年一一月二二日

●論文

「（解説）伝統中国の復権、そして中国的近代を尋ねて」溝口雄三著『中国思想のエッセンスⅡ—東往西来』岩波書店　二〇一一年一一月二二日

「日本における東アジア海域交流史研究の現状と動向」『第一八回海外シンポジウム「江南文化と日本」〔復旦大学〕報告書』国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「編者注」溝口雄三著『中国思想のエッセンスⅠ—異と同のあいだ』岩波書店　二〇一一年一一月二二日

「編者注、年譜、著作目録」溝口雄三著『中国思想のエッセンスⅡ—東往西来』岩波書店　二〇一一年一一月二二日

「辛亥革命一〇〇年の節目の年——中国の『現代思想』、翻訳・紹介に新たな局面　海外文学・文化回顧：中国」『図書新聞』第三〇四三号　二〇一一年一二月二四日

「書評　『逆説』の『東アジア』史—一読三嘆、チャート式・よく分かる：與那覇潤『中国化する日本—日中「文明の衝突」一千年史』」『週刊読書人』二〇一二年二月一七日号

磯前順一

●論文

"Japanese Modernity as Postcolonial Experience," *Asia & Europe Bulletin* No. 1, University of Zurich, February 2012. (English)

"Fukushima hat den Kaiserkult noch verstärt," *Tages Anzeiger*, 25 Januar. (German)

●その他の執筆活動

「ムハンマド・アサドの回想より—震災後の社会の政治と宗教」（タラル・アサドと共著）『みすず』二〇一一年一〇月号（No. 598）

「フォーラム京　タイガースにみる『和解』の物語」『京都新聞』二〇一一年一一月二五日

「世界の宗教研究はいま—ドイツ・ボッフムより」（フォルクハルト・クレヒと共著）『CISMOR VOICE』Vol. 14　同志社大学一神教学際研究センター　二〇一一年一一月

「時感断想　日々の祈り―自我を包み込む大我」「時感断想　表現への闘い―語り得ない出来事を前に」「宗教研究の責任―精神の暗部を見つめる」「苦を分かち合う―かけがえのないあなたへ」『中外日報』　二〇一二年二月二一日～三月一三日
「論壇　ベルリン・ユダヤ博物館より」『中外日報』　二〇一二年一月二四日
「ときめく力を今一度・・・沢田研二・武道館コンサートより」『中外日報』　二〇一二年二月七日

稲賀繁美

●論文

「일본　미술　표현으로　보는　뱀」『문화로　읽는　십이지신　이야기　뱀』서울・도서출판　열림원，2011년　10월（韓国語訳）「日本の美術表現にみる蛇」『文化で読む十二支神物語　蛇』ソウル・図書出版　ヨルリムウォン　二〇一一年一〇月
「일본　미술에서의　말」『문화로　읽는　십이지신　이야기　말』서울・도서출판　열림원，2011년　11월（韓国語訳）「日本の美術表現にみる馬」『文化で読む十二支神物語　馬』ソウル・図書出版　ヨルリムウォン　二〇一一年一一月
「華厳経と現代美術：相互照射の試み」黄自進編『日本の伝統と現代』中央研究院人社中心亜太区域研究専題中心　二〇一一年一二月
「ハリーコ・アダッチオの夢世界：あるアマチュア日曜陶藝家の生活と意見」『あいだ』一八九号（連載第八四回）　二〇一二年一月
「日本美術の中の『龍』：旧暦『辰』年にちなみ」『あいだ』一九〇号（連載第八五回）　二〇一二年二月
«La Pensée plastique et le statut social des arts et métiers au Japon face à la modernité (1900–1927)»「二十世紀第一・四半世紀日本における工藝の社会的地位と工藝的思考」京都国立近代美術館研究論集『CROSS SECTIONS』Vol. 4 (2011)　京都国立近代美術館　二〇一二年二月
「宮澤賢治とファン・ゴッホ」『比較日本学教育研究センター研究年報』第八号　お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター　二〇一二年三月
「星と修羅と自己犠牲―宮澤賢治の心象へのいくつかの補助線」プラット・アブラハム・ジョージ・小松和彦編『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』法蔵館　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「〈2・1・0〉は東アジア社会の相互依存と相互不信とを読み解く普遍的鍵となるか（上）—小倉紀蔵著『創造する東アジア—文明・文化・ニヒリズム』（春秋社、本体四〇〇〇円）を読む」『図書新聞』第三〇三三号　二〇一一年一〇月八日、（中）『図書新聞』第三〇三四号　二〇一一年一〇月一五日、（下）『図書新聞』第三〇三五号　二〇一一年一〇月二九日

「ブリコラージュとスクラプチャー（Bricolage and Scrapture）」『彫刻家エル・アナツイのアフリカ展記念シンポジウム「異文化の表象と展示空間の政治学」報告書』*Summary Papers of Symposium "The Politics of Exhibition Space: A Case of the Exhibition A Fateful Journey: Africa in the Works of El Anatsui*　二〇一一年一〇月

「行間の襞にこめられた沈黙のメッセージ：劉岸偉著『周作人伝：ある知日派文人の精神史』を読む」『図書新聞』第三〇五二号（連載一二九回）二〇一二年三月

「布と織物の現代的可能性—世界を装飾することの意味」「パネルディスカッション」『シンポジウム「KIMONO の影響力—ジャポニスムを背景として」報告書』公益財団法人京都服飾文化研究財団　二〇一二年三月

井上章一

●著書

『京都洋館ウォッチング』新潮社　二〇一一年一一月二五日

●その他の執筆活動

「古墳の形だけで大和の覇権は語れない」『中央公論』二〇一一年一〇月号

「書評　中川右介著『二十世紀の一〇大ピアニスト』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一一年一〇月一九日

「歴史の書きかえにも挑んだ詐欺の顛末」『中央公論』二〇一一年一一月号

「近・現代『洋風建築』の粋を探訪する」『サライ』二〇一一年一一月号

「書評　田中純著『建築のエロティシズム』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一一年一一月九日

「書評　アルノ・ブレーカー著『パリとヒトラーと私』」『週刊ポスト』二〇一一年一一月一一日号

「書評　錦仁著『なぜ和歌（うた）を詠むのか　菅江真澄の旅と地誌』（再録）『リポート笠間』五二号　二〇一一年一一月二〇日
“The Roots of Ise Shrine and the Folk Architecture of Sulawesi,” John Breen and Yamada Shōji eds. *Understanding Contemporary Japan, International Symposium in Indonesia 2010*, International Research Center for Japanese Studies, Nov. 2011.
「現代の建築家・四　渡辺仁―様式の黄昏をのりこえて―」『GA　JAPAN』113　二〇一一年一一月
「てい談　しろうと」（俵越山、木村英輝と）木村英輝著『LIVE―飛ぶ、笑う、踊る、唄う　すべては、成りゆき』青幻舎　二〇一一年一一月
「男の絆とミス日本」『文藝春秋』二〇一一年一二月臨時増刊号
「一〇〇〇年を見渡した東アジアの貿易史」『中央公論』二〇一一年一二月号
「ヌードとパンツと家父長制　上野千鶴子のおっさん観をめぐって」『現代思想』二〇一一年一二月臨時増刊号
「私のモテキ」『文藝春秋』二〇一一年一二月号
「建築は誰のものか」『建築と日常』No. 2　二〇一一年一二月
「日本に古代はあったのか」『経済人』二〇一一年一二月号
「わたしの二〇一二年」『朝日21　関西スクエア』会報一四〇号　二〇一一年一二月
「書評　中村武生著『池田屋事件の研究』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一一年一二月七日
「座談　街つなぐ歴史と個性」（園城三花、岩中祥史、藤本順子と）『中国新聞』　二〇一一年一二月八日
「美貌はキッチュをのりこえて」府中市美術館『石子順造的世界』　二〇一一年一二月一〇日
「『スカートめくり』の文化史――日本の男はいつからめくっていたのか」『週刊現代』二〇一一年一二月一七日号
「楽浪の志賀津の児らが…」『ＮＨＫ　日めくり万葉集』Vol. 22　二〇一一年一二月一九日
「二〇一一　私の三冊」『日本経済新聞社』　二〇一一年一二月二五日
「書評　ダニエル・ドナヒュー著『貴婦人ゴディヴァ』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一一年一二月二八日
「年賀状に書き添えたい一言　さくさくふるまうのも、たいへんです」『文藝春秋』二〇一二年新年特別号
「歴史はどこまで学統・学閥に左右されるのか」『中央公論』二〇一二年一月号

「『名古屋美人』気立てよし」『中日新聞』　二〇一二年一月一日
「書評　鹿島茂著『蕩尽王、パリをゆく』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年一月一八日
「書評　井上理津子著『さいごの色街　飛田』」『週刊ポスト』二〇一二年一月二〇日号
「勝鹿の真間の手児名が…」『ＮＨＫ　日めくり万葉集』Vol. 23　二〇一二年一月二〇日
「書評　『今和次郎 採集講義』（青幻舎）」『週刊読書人』二〇一二年一月二〇日号
「現代の建築家・五　松室重光―コロニアリズムと建築家―」『GA　JAPAN』114　二〇一二年一月
「書評　古屋晋一著『ピアニストの脳を科学する』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年二月八日
「書評　仁藤敦史著『都はなぜ移るのか』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年二月二九日
「歩道橋から見えること」『暮らしの手帖』二〇一二年二月―三月号
「書評　中川右介著『第九』」『週刊ポスト』二〇一二年三月二日号
「書評　サルヴァトーレ・セッティス著『〈古典的なるもの〉の未来』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年三月二一日
「『干蘭』か『高床』か―日中建築比較論のこころみ」山田奨治・郭南燕編『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘』国際日本文化研究センター　二〇一二年三月
「現代の建築家・六　妻木頼黄―オリエンタリストたちの夢の跡―」『GA　JAPAN』115　二〇一二年三月

牛村　圭

●その他の執筆活動
「うさぎのつきみ小考」『日文研』四八号　二〇一二年三月
「言葉のきれいは七難隠す」『京都新聞』（夕刊）　二〇一一年一一月一四日
「異文化としての京都ドライバー」『京都新聞』（夕刊）　二〇一二年一月一八日
「女には『かわいい』、男には『オトナの』を」『京都新聞』（夕刊）　二〇一二年三月九日

宇野隆夫

●論文

「一九八〇年代前後の中世土器研究」『第三〇回中世土器研究会　新世紀の土器・陶磁器研究―二〇〇〇年代の成果と今後の展望―』日本中世土器研究会　二〇一一年一二月

「ＧＩＳを用いた古代北陸道の復元研究」『「加茂遺跡」詳細分布調査（第一～二一調査区）発掘調査報告書』　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「考古学」『imidas』（電子版）集英社　二〇一二年三月

「考古学」『ブリタニカ国際年鑑』　二〇一二年三月

笠谷和比古

●著書

『武家政治の源流と展開―近世武家社会研究論考―』清文堂出版　二〇一一年一一月

郭　南燕

●著書

『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―』（山田奨治と共編）国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「世界自然遺産に登録された小笠原諸島」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』No. 84　二〇一二年三月

「標準語の普及によって消えゆく上海語」『人と自然』第三号

フレデリック・クレインス

●論文

"Un Japonais naturalisé? Identité et rôle historique de William Adams," *Devenir l'autre. Expérience et récit du changement de culture entre le Japon et l'Occident. Arles*, Éditions Philippe Picquier, 2012.

倉本一宏

●著書

『藤原行成「権記」全現代語訳』（上・中・下）（単著）講談社　二〇一一年一二月、二〇一二年一月、二〇一二年二月

『歴史文化セレクション　古代を考える　蘇我氏と古代国家』（共著）吉川弘文館　二〇一二年二月

●論文

「史料紹介　『御堂関白記』自筆本の裏に写された『後深心院関白記』」『日本研究』第四四集　国際日本文化研究センター　二〇一一年一〇月

「藤原行成『権記』に見える配偶者表記について」『日本歴史』二〇一一年一二月号（七六三）吉川弘文館

●その他の執筆活動

「『日記の総合的研究"The Synthetic Researches of Japanese Diaries"』に向けて」『日本研究』第四四集　国際日本文化研究センター　二〇一一年一〇月

「一〇〇五年、伊勢勅使の旅」『まほら』六九号　二〇一一年一〇月

「御堂関白記」「小右記」「後二条師通記」「栄花物語」『特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化千年の伝承」図録解題』国文学研究資料館　二〇一一年一〇月

「御堂関白記」「小右記」「後二条師通記」「栄花物語」国文学研究資料館編『陽明文庫　王朝和歌集影』勉誠出版　二〇一一年一二月

「平安時代理解のあたらしい地平へ―古記録の現代語訳は何故に必要か―」『本』第三七巻第一号　二〇一二年一月

小松和彦

●著書

鈴木晃仁編『【対話】異形　生命の教養学Ⅶ』（上野直人と共著）慶應義塾大学出版会　二〇一一年一〇月

『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』（ブラット・アブラハム・ジョージと共編）法蔵館　二〇一二年三月

●論文

「入らずの山と鎮守の森―もうひとつの環境思想としての民俗」秋道智彌編著『日本の環境思想の基層―人文知からの問い』岩波書店　二〇一二年三月

「賢治童話における『童子』をめぐって―『オツベルと象』の〈赤衣の童子〉はどこから来たのか?」小松和彦・ブラット・アブラハム・ジョージ編『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』法蔵館　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「妖怪と日本人の心③　山の妖怪―天狗と山姥」『ふぃーるでぃんぐ』No. 119　ＮＥＣフィールディング　二〇一一年一〇月

「日本の妖怪文化は、世界に誇れる文化である」『妖怪見聞』茨城県立歴史館　二〇一一年一〇月

「談話室　妖怪や物の怪はどこへ行ったか」『銀行倶楽部』525　銀行協会　二〇一一年一一月

「天狗と火防」『ひととき』二〇一一年一二月号　ウェッジ

「特別随筆『わたしと異界の出会い』⑨」『怪』vol. 0034　角川書店　二〇一一年一一月

「いやはや語辞典　ガラパゴス化」『讀賣新聞』（夕刊）　二〇一一年一二月二日

「時空を超えて生き続ける伝説」『日生劇場十二月歌舞伎公演』松竹株式会社　二〇一一年一二月

「妖怪と日本人の心④　狐と狸―動物の妖怪」『ふぃーるでぃんぐ』No. 120　ＮＥＣフィールディング　二〇一一年一二月

「歴博対談五一　広がる怪異・妖怪研究」（常光徹氏と対談）『歴博』第一七〇号　国立歴史民俗博物館　二〇一二年一月

佐野真由子

●論文

「ロンドン万博へ続く道――一八六一（文久元）年のオールコックの旅と日本の『開国』」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四八号　二〇一一年一一月

「阿礼国先后推动中日参展两届伦敦博览会的启示」陶德民他編『世博会与东亚的参与』上海人民出版社　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「エストニアの友人」『日文研』四八号　二〇一二年三月

白幡洋三郎

●著書

『都市歴史博覧――都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』（錦仁、原田信男と共編）笠間書院　二〇一一年一二月

●論文

「都市はぜいたく」『都市歴史博覧』笠間書院、所収　二〇一一年一二月

●その他の執筆活動

「国立公園の復興」『まほら』六九号　二〇一一年一〇月

「キンモクセイ、アメリカ、豊中」『豊中リレー・エッセー　ゆめ・まち・ひと』豊中市、所収　二〇一一年一〇月一五日

「日本人の忘れものVol.24　集う楽しみ」『京都新聞』二〇一一年一二月一一日

「解題・雑誌『国立公園』の歴史的意義と日本の国立公園の価値」「解題・総目次・索引」『国立公園』財団法人国立公園協会　二〇一一年一二月二二日

「書評　『紅茶スパイ』サラ・ローズ著、築地誠子訳」『神戸新聞』他（共同通信配信）　二〇一二年二月五日

「桜と日本人」『季刊SORA』二〇一二年春号　二〇一二年三月

鈴木貞美

●論文

「『日記』および『日記文学』概念をめぐる覚え書き」『日本研究』第四四集　国際日本文化研究センター　二〇一一年一〇月

"Rewriting the Literary History of Japanese Modernism," translated by Roy Starrs (English version of「日本モダニズム文藝史のために―新たな構想」), *Rethinking Japanese Modernism* edited by Roy Starrs, Global Oriental, Leiden, Boston, 2012.

「明治期『北欧文学』概念と日本近現代文藝史の再編：トランス・カルチュラル研究の進め方」『日文研・ヨーテボリ大学国際シンポジウム報告書CD版

「『近代の超克』と『大東亜共栄圏』―京都学派座談会『世界史的立場と日本』および丸山真男『日本の思想』批判」黄自進編『台湾中央研究院CAPAS国際シンポジウム報告書　日本の伝統と現代』中央研究院人社中心亜太区域研究専題中心　二〇一一年一二月

「宮澤賢治世界の宗教性をめぐって」小松和彦・プラット・アブラハム・ジョージ編『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』法蔵館　二〇一二年三月

「『近代の超克』論―その戦中、戦後」鈴木貞美・劉建輝編『国際シンポジウム第二六集　東アジアにおける近代諸概念の成立』国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

"A Reevolution of the East Asian Modern System of Knowledge," translated by Alan Thwaits, *Cultural Interaction Studies in East Asia; New Method and Perspective*, ed. Tao Demin & Fujita Takao, Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University, March 2012.

●その他の執筆活動

「今年の執筆予定」『出版ニュース』二〇一二年一月上中旬号

「推薦文（帯）」三浦茂久著『古代枕詞の究明』作品社　二〇一二年一月

「吉田健一生誕百年」産経新聞（夕刊）二〇一二年三月一五日

末木文美士

●著書

『日本仏教の可能性』新潮文庫　二〇一一年一一月
『シリーズ大乗仏教（三）大乗仏教の実践』（共編）春秋社　二〇一一年一一月
『シリーズ大乗仏教（二）大乗仏教の誕生』（共編）春秋社　二〇一一年一二月
『哲学の現場』トランスビュー　二〇一二年一月
『シリーズ大乗仏教（九）認識論と論理学』（共編）春秋社　二〇一二年一月

●論文

「大乗仏教の実践」『シリーズ大乗仏教（三）大乗仏教の実践』春秋社　二〇一一年一一月
「장려불교：근대적 이성 비판」『유교 도교 불교의 감성이론』경인문화사　二〇一一年一一月
「日本仏教は非論理的か？」『日本の哲学』一二　二〇一一年一二月
「聖財集をめぐって」『無住―研究と資料』長母寺　二〇一一年一二月
「禅の言語と論理」『上月圓覺大祖師生誕百周年記念「佛學論叢」二』圓學佛教思想研究院　二〇一一年一二月
「宗教で読み解く日本の歴史」『日本の個性―「歴史」から「現在」を読み解くための九章』新人物往来社　二〇一二年二月
「高山寺本『受法用心集』の翻刻訂正」『平成二十三年度高山寺典籍文書調査団研究報告論集』二〇一二年三月
「近代日本の自然観―近代日本の自然観と伝統的自然観」秋道智彌編著『日本の環境思想の基層―人文知からの問い』岩波書店　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「現代のことば」『京都新聞』（夕刊）　二〇一一年一〇月一一日、一二月八日、一二月八日、二〇一二年二月一〇日
「仏典に学ぶ」『朝日新聞』（夕刊）　二〇一一年一〇月三一日、一一月二八日、二〇一二年一月三〇日、二月二七日、三月二六日
「日本仏教の特集を編んだ頃」『東洋学術研究』五〇―二　二〇一一年一一月
「ストゥーバから卒塔婆まで―塔の歴史とその意味」『やまとみち』一〇・一一九号　二〇一一年一一月

「弔辞　花井一典君を送る」『哲学』四七　二〇一一年一二月
「書評　今年の三冊」『仏教タイムス』二〇一一年一二月八日、一五日
「インタビュー　広がる豊かな思想の海」『朝日新聞』（夕刊）二〇一一年一二月二六日
「仏教からみた前近代と近代」『中外日報』二〇一二年一月七日号
「インタビュー　日本の哲学構築へ『哲学の現場』を上梓」『仏教タイムス』二〇一二年二月二日
「親鸞に何を求めるのか」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』二八　二〇一二年三月
「震災からアジアの仏教を考える」『NARASIA Q』創刊準備号　二〇一二年三月
「日本人の災害観」『研究東洋』二　二〇一二年三月

瀧井一博

●その他の執筆活動

Japans Hinwendung zum deutschen staatsrechtlichen Modell," in: Curt-Engelhorn-Stiftung für die Reiss-Engelhorn Museen: Alfried Wieczorek, Susanne Wichert (Hrsg.), *Ferne Gefährte, 150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen*, Verlag Schnell und Steiner (Regensburg), 2011.
「伊藤博文と山県有朋」『歴史群像シリーズ　大日本帝国の興亡②「一等国」への道』学研パブリッシング　二〇一一年年一二月
「インタビュー　私のリーダー論四　理念語り文化高める」『毎日新聞』二〇一二年一月一一日
「天皇機関説をわかりやすく教えて下さい」『日本歴史』二〇一二年一月号（七六四）吉川弘文館
「人物史を自省する―家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変―』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）に寄せて」『こころ』Vol.5　平凡社　二〇一二年二月

戸部良一

●論文

「第二次世界大戦下の在トルコ日本大使館」A・メテ・トゥンジョク編『日本人研究者の目から見たトルコ　シンポジウム』Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi Yayınları

●その他の執筆活動

「文献紹介　John J. Mearsheimer, *Why Leaders Lie: The Truth about Lying in International Politics*」『年報　戦略研究』第一〇号　二〇一一年一〇月

「解説　読売新聞社編『昭和史の天皇』」一～三　中公文庫　二〇一一年一〇月、一二月、二〇一二年二月

「再読『滞日十年』『ちくま』第四八八号　二〇一一年一一月

「解説　DVD『NHKスペシャル　日本人はなぜ戦争へと向かったのか』」NHKエンタープライズ　二〇一一年一一月

「大綱という名の無方針とリーダーシップの不在」NHK取材班編『日本人はなぜ戦争へと向かったのか　戦中編』NHK出版　二〇一一年一一月

「図説・天皇の軍隊」『歴史群像シリーズ　大日本帝国の興亡②「一等国」への道』学研パブリッシング　二〇一一年一二月

「昭和陸軍・暴走のメカニズム」『中央公論』二〇一二年一月号別冊

「辻政信：優秀なれど制御能わざる人材の弊害」『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』二〇一二年一月号

「インタビュー　にっぽん再考①リーダー論　歴史の『失敗』学び人材育成を」『京都新聞』　二〇一二年一月四日

「項目執筆「大隈重信」他八項目」歴史群像編集部編『日露戦争兵器・人物事典』学研パブリッシング　二〇一二年一月

「論評鼎談　『日本外交文書　日中戦争』所収文書から見る和平工作の諸相」（鹿錫俊氏、冨塚一彦氏と）『外交史料館報』第二五号　二〇一二年三月

「満洲国皇帝溥儀とは何者だったのか？」『歴史人「満洲帝国の真実」』二〇一二年四月号

「三つの『戦争』—満洲事変、支那事変、大東亜戦争」『陸戦研究』二〇一二年四月号

早川聞多

●論文

「撰歌評　古今秀歌一首」『古今秀歌百選』文字文化協會　二〇一二年一月

●その他の執筆活動

「達人対談　春画の達人／早川聞多 vs. ビートたけし　春画の世界はこんなに凄い」『新潮45』二〇一二年三月号　新潮社

パトリシア・フィスター

●その他の執筆活動

"Tribute to Fukushima Keidō (1922-2011)," *Orientations* 42: 8, Nov./Dec.2011.

ジョン・ブリーン

●著書

Understanding Contemporary Japan, International Symposium in Indonesia 2010, Co-edited by Yamada Shōji, International Research Center for Japanese Studies, Nov. 2011.

●論文

「伊勢神宮の近代的空間の形成：序説」神道国際学会編『第三回専攻研究論文発表国際大会：発表論文集』神道国際学会　二〇一一年一〇月

"Mourning and violence in the Land of Peace: Reflections on Yasukuni," John Breen and Yamada Shōji eds. *Understanding Contemporary Japan, International Symposium in Indonesia 2010*, International Research Center for Japanese Studies, Nov. 2011.

●その他の執筆活動

「新田教授へのレスポンス」『神道フォーラム』

"Afterword," John Breen and Yamada Shōji eds. *Understanding Contemporary Japan, International Symposium in Indonesia 2010*, International Research

Center for Japanese Studies, Nov. 2011.

細川周平

●論文

"Thunder in the Far East. The Heavy Metal Industry in 1990s Japan" (with Kei Kawano), Jeremy Wallach, Harris M. Berger, and Paul D. Greene (eds.), *Metal Rules the Globe. Heavy Metal Music around the World*, Duke University Press, Durham & London, 2011.

「戦時下の中国趣味の流行歌」山田奨治・郭南燕編『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘』国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「書評　椎名亮輔『狂気の西洋音楽史』」『同志社時報』一三二号　二〇一一年一〇月

「音楽評　二階堂和美ワンマンツアー『にじみの旅』」『毎日新聞』（関西版夕刊）　二〇一一年一一月三〇日

「読書アンケート」『みすず』二〇一二年一・二月号（No. 601）

「一九六九年夏、コルトレーンを聴く」『文藝別冊　KAWADE 夢ムック　ジョン・コルトレーン』　二〇一二年二月

「音楽評　テデスキ・トラックス・バンド」『毎日新聞』（関西版夕刊）　二〇一二年二月二二日

松田利彦

●論文

「植民地警察はいかにして生みだされたか―日本の朝鮮侵略と警察」林田敏子・大日方純夫編『近代ヨーロッパの探究⑬　警察』ミネルヴァ書房　二〇一二年一月

●その他の執筆活動

「書評　尚友倶楽部・児玉秀雄関係文書編集委員会編『児玉秀雄関係文書』第Ⅰ巻、第Ⅱ巻（同成社、二〇一〇年五月、八月）」『日本歴史』二〇一一年一〇月号（七六一）吉川弘文館

「市外教四〇周年によせて」大阪外国人教育研究協議会編刊『大阪市外国人教育研究協議会四〇周年記念誌　つむごう未来へ～響きあう子ども達を育む』二〇一一年一〇月

山田奨治

● 著書

Understanding Contemporary Japan, International Symposium in Indonesia 2010, Co-edited by John Breen, International Research Center for Japanese Studies, Nov. 2011.

『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―』（郭南燕と共編）国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

● 論文

"Ces e'tudiants japonais qui ont apporte' le zen en Allemagne," Christine Maillard et Sakae Murakami-Giroux, *Devenir l'autre: Expe'rience et re'cit du changement de culture entre le Japan et l'Occident*, E'ditions Philippe Picquier, 2011.

「〈ゆるい〉と〈かたい〉のあいだ：日本の〈ゆるキャラ〉マスコットを考える」Yamada Shoji and John Breen eds, *Understanding Contemporary Japan, International Symposium in Indonesia 2010*, International Research Center for Japanese Studies, Nov. 2011.

「古事類苑・地部ＧＩＳデータの作成」（中西和子氏、尾方隆幸氏と共著）ＨＧＩＳ研究協議会『歴史　ＧＩＳの地平　景観・環境・地域構造の復原に向けて』勉誠出版　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「インタビュー　厳罰化に異議　市民の声を」『京都新聞』二〇一一年一〇月三日

「メディア時評　現実を直視させたカダフィ氏写真」『毎日新聞』二〇一一年一〇月二九日

「妖のイメージ・日本人の想像力二五　河童」『京都新聞』二〇一一年一二月七日

「インタビュー　技術者の本棚：著者に聞く　日本の著作権の在り方に矛盾を感じる　技術者は萎縮してはならない」『日経エレクトロニクス』二〇一二年一月九日号

「コメント　著作権ルール　ＴＰＰで議論再燃」『日本経済新聞』　二〇一二年二月四日
「『模倣』と『創造』の世界文化史と『再創主義』のすすめ」『Back Up』三一号　二〇一二年三月

マルクス・リュッターマン

●論文
“Schreib-Riten (shorei 書礼) Untersuchungen zur Geschichte der japanischen Briefetikette, Teilband 1: Theorie und Überlieferung; Teilband 2: Rhetorik; Teilband 3: Nonverbalität und Intermedialität (Izumi: Quellen, Studien und Materialien zur Kultur Japans/ herausgegeben von Klaus Kracht, Band 14; Teilbde. 14.1-14.3) Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2011 (Dec.).（独語『日本書礼の史的研究』三巻、第一巻「理論と伝播」、第二巻「修辞」、第三巻「非言語的・間メディア的記号性」　二〇一一年一二月

森　洋久

●その他の執筆活動
「森幸安の世界―地図というリフレクション」『月間京都』二〇一二年三月号（七二八号）白川書院

劉　建輝

●著書
『国際シンポジウム第二六集　東アジアにおける近代諸概念の成立』（鈴木貞美と共編）国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

●論文
「上海の衝撃――幕末維新期における漢訳洋書の伝来とその意味」黄自進編『日本の伝統と現代』中央研究院人社中心亜太区域研究専題中心　二〇一一年一二月
「欲望都市・上海の誕生とその表象」白幡洋三郎・錦仁・原田信男編著『都市歴史博覧――都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』笠間書院

二〇一一年一二月

「侮蔑、趣味、そして憧憬から脅威へ――近代日本知識人の中国表象」『日本批評』編集委員会編『日本批評』第六号　ソウル大学日本研究所　二〇一二年二月

「水と女の戯れ――谷崎潤一郎の中国江南」山田奨治・郭南燕編『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘』国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

●その他の執筆活動

「アジアの故郷――京都」『月刊京都　外国人から見たKYOTO、京都』七二七号　白川書院　二〇一二年二月

「資本と革命がハーモニーする都市――万博と万博後の上海レポート」『日文研』四八号　国際日本文化研究センター　二〇一二年三月

日文研　四十九号

二〇一二（平成二四）年九月二八日発行

編　集　フレデリック・クレインス、磯前順一

発　行　大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国際日本文化研究センター

住所　〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話　（〇七五）三三五―二二二二

ホームページ　http://www.nichibun.ac.jp

印刷　中西印刷株式会社

NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889

日文研　四十九

創立二十五周年記念特集号

国際日本文化研究センター